

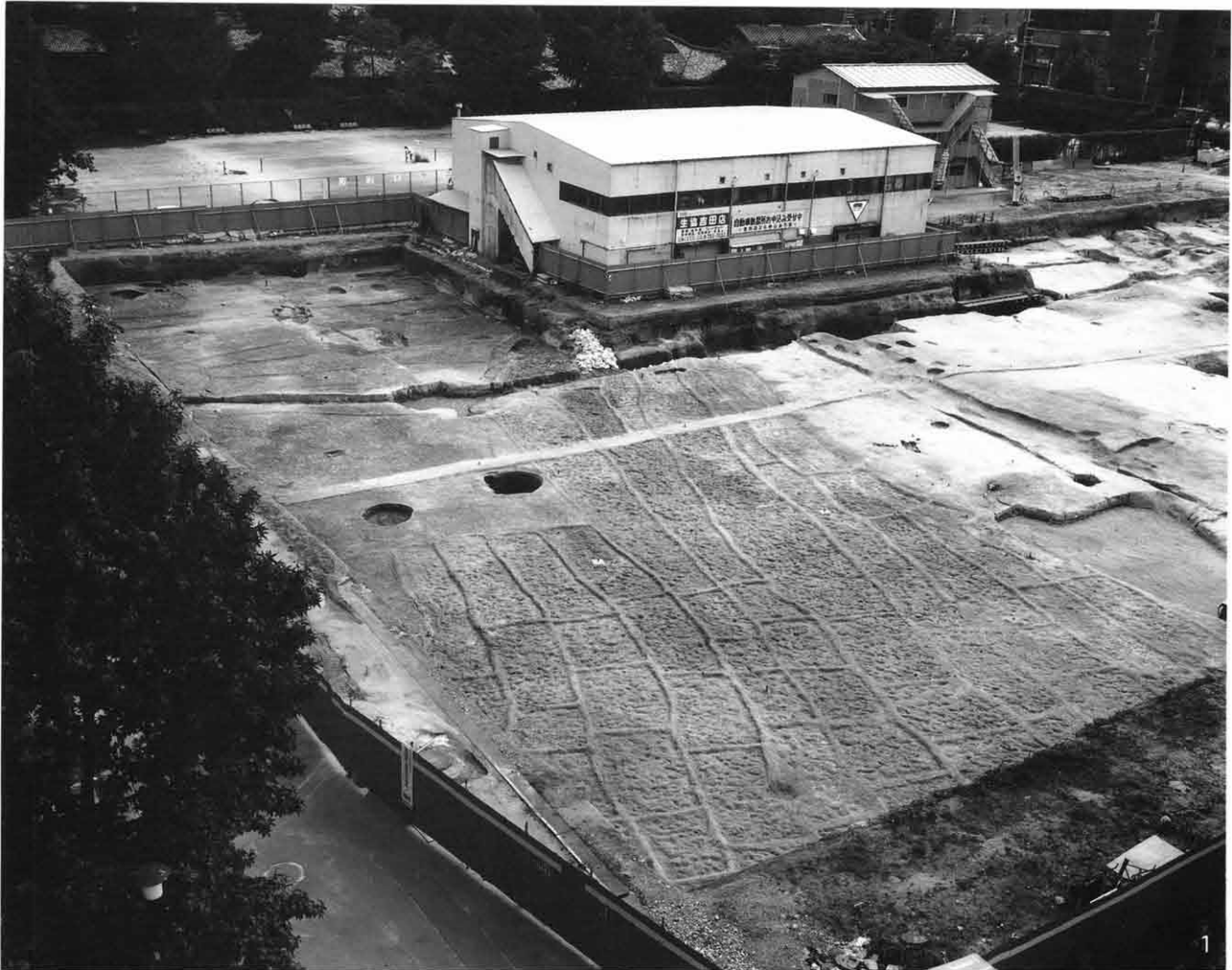
京都府埋蔵文化財情報

第 58 号

京都大学構内遺跡における弥生前期水田の調査-----	伊藤 淳史-----	1
大俣城跡の発掘調査-----	大岩 洋一-----	9
長岡京跡左京南一条三坊十三町の宅地-----	戸原 和人-----	17
—平成7年度発掘調査略報—-----		29
7. 南谷古墳群	10. 園部城跡第4次	
8. 竹野遺跡	11. 宮川遺跡	
9. 島津遠所古墳群	12. 釜ヶ谷遺跡第3次	
資料紹介 新出の朝鮮王朝磁器について —平安京跡左京一条二坊十四町例—-----	小池 寛-----	39
府内遺跡紹介 68. 淳和院跡-----		43
長岡京跡調査だより・55-----		47
センターの動向-----		51
府内報告書等刊行状況一覧-----		53
受贈図書一覧-----		58

1995年12月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター



1. 全景(北東から)
2. 北半水田の耕作面と水口(南から)
3. 北半水田と南半水田の境界(南から)
4. 南半水田(北から)

水田遺構の全景(1)と細部(2~4)

京都大学構内遺跡における弥生前期水田の調査

伊藤 淳史

1. はじめに

比叡山西南麓の北白川扇状地上に位置する京都大学吉田キャンパスでは、ほぼその全域で、縄文時代～近世に至る各時期の遺跡が存在しており、これまで調査を重ねてきている。今回、京都市左京区吉田二本松町地内の総合人間学部(旧教養部)構内において、大学院人間・環境学研究科校舎新営予定地4080m²の発掘調査を、1993年12月1日～1994年9月22日にかけて実施した。調査区(AO22区)の位置と周辺の遺跡は(第5図)に示す。調査の結果、弥生時代前期の水田遺構とその周辺の地形を、非常に良好な状態で確認することができた。現在報告書を作成中であるけれども、さらになお時間を必要とするため、ここに成果の概要を紹介し、あわせて今後の課題をまとめておくことにしたい。^(注1)

2. 層位

調査区は、北東から南西へ張り出す扇状地を、ちょうど横断するような形で東西100mにわたっているが、基本的な層序は全体で共通している(第1図)。このうち第1層～第4層は弥生時代中期以降の各時期の遺物包含層である。これらの層や面には、水田が存在していた痕跡は全く認められない。また、以下に述べる厚い砂層の堆積により、弥生前期までとは全く異なる地形環境となっており、中期以降の遺跡の展開を同一の条件で論じることはできない。本稿でも省略する。

第5層(黄色砂層) これまで医学部・病院構内を除くキャンパスの各所で確認されている無遺物の土石流堆積層で、弥生前期末～中期前葉ころの極めて短期間に堆積したものとして、鍵層となっている。調査区内での厚さは0.5～1m前後。その広がりや内容については、これまでの検討と構内遺跡各地点の報告に詳しく^(注2)、今回の調査区では、上半が粗砂、下半が細砂となっており、とりわけ最下端はシルト質の非常に粒子の細かな砂層が第6層の直上を薄く覆い、埋没後の地表面を保護するために、ま



第1図 調査区の基本層序模式図

た、発掘の際の微地形検出のためにも、非常に好都合なものであった。

第6層(黒灰色土層) 縄文晩期末の突帯文土器を中心とした遺物包含層であるとともに、縄文後期の前葉～中葉、および弥生前期の土器もわずかに含んでいる。弥生中期以降にくだる櫛描文土器等は全く出土していない。水田はこの層の上面を利用して築かれている。基本的には厚さ20～50cm程度の砂質の土壌であるが、東半の水田域に相当する範囲では泥炭質で粘性が強く、厚さ10cm前後しかない。これは、次に述べる第7層の地点別の性質の違いと対応している。

第7層(黄褐色土層) 調査区の地形のベースとなるもので、基本的には砂質・シルト質の土壌であるが、水田域に相当する東半では透水性の乏しい粘質の土壌となっている。トレンチ調査で深く掘り下げたところ、東半の粘質土内からは、縄文後期の残りの良い土器21点が出土した。調査区の東側(第5図-11地点)では、かつて藤岡謙二郎氏が土器片を採集しており、北白川上層式3期の基準資料のひとつとされている^(注3)。今回の出土土器もそれに近い時期とみており、この層の堆積による地形の形成が、縄文後期のうちであったことがわかる。1mあまりの厚さがあり、その下は砂礫層であることを確認している。

3. 遺構と遺物の概要

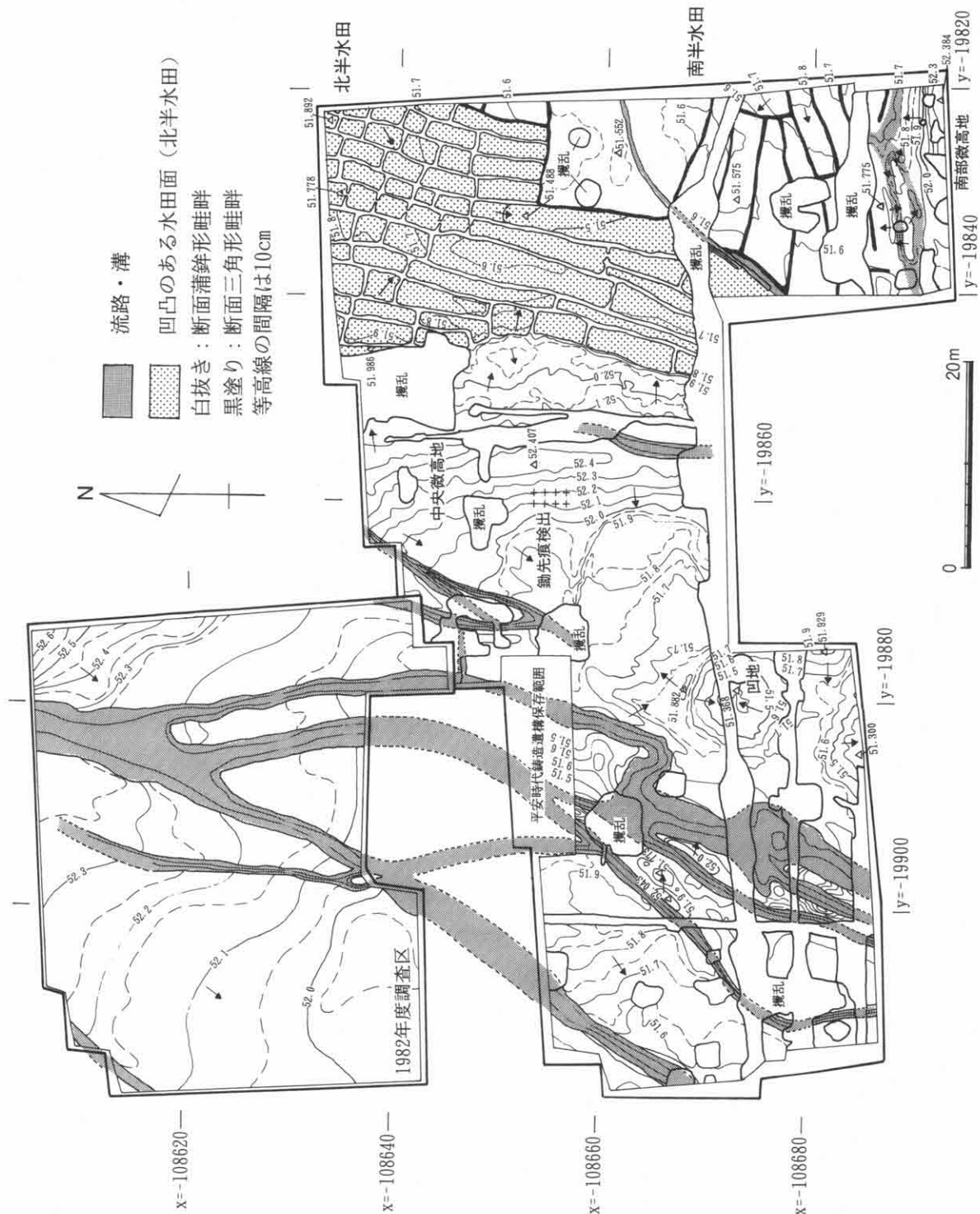
黄色砂に覆われていた黒灰色土層上面では、水田遺構をはじめ、流路、鋤先痕、さらに微高地や凹地などの自然地形を確認できた。これらは、幸いにして条件に恵まれ、埋没時の損傷やその後の影響を被らず、攪乱部分を除きほぼ完全に当時の状況を保ったままであると考えている。今回の調査地点の北西隣接地で実施されている1982年度の調査成果ともあわせて、ここに概要を示すことにする(第2図)。なお、出土遺物は土器・石器に限られ、植物遺存体や木製品などは検出されていない。

(1) 流路と微地形

まず、水田遺構以外について、簡単にまとめておきたい。

中央微高地 調査区の中央付近に、東部の水田遺構と、西部の流路が集中している地区とを隔てるように、微高地が南北にはしっている。微高地の頂部と水田面の最も低い地点との比高差は約1mである。黒灰色土層中でとりあげた遺物2721点のうち、2350点がここに集中して出土し、なかでも縄文晩期末の突帯文土器が多数を占めている。これらは、口唇部に刻み目を施すものがほとんどみられないことから、船橋式～長原式段階とみられる。これに、弥生前期の遠賀川式土器の各段階も微量ともなっており、とくに多条沈線をもった新段階の壺形土器は、層の直上で黄色砂層に覆われたような状態で出土している。土石流での埋没時期を示すものであろう。なお、断面を検討したところ、下層には白色粗砂が堆積しており、縄文後期における幅8m、深さ1.5mあまりの大規模な流路にとまなう埋積が、この微高地の成因となっていることが判明した。

鋤先痕 中央微高地の西側斜面に、南北約5m×東西約1.5mの範囲で、平面半月形や楕円形を呈して斜めに穿たれる掘り込みが集中していた(第3図)。大きさは、長軸が約15cm、深さ約10cm程度のものを基本としている。並びに規則性はない。黄色砂層によって埋まっていることか



第2図 黒灰色土上面の地形(縮尺1/600)

ら、弥生前期のものとみてよいだろう。中央微高地を中心とした空間は、遺物の集中的な出土やこうした鋤先痕の存在からみて、通行や作業といった人間の活動に重要な役割を果たしていたものと考えられる。

南部微高地 水田遺構の南側にも比高差約70cmの微高地があり、南から北へかなりの急な傾斜をもって下っている。この微高地の成因は、中央微高地とは異なり、黄褐色土層の高まりをそのまま踏襲しているものである。遺物の出土は36点と少ない。

流路 調査区の西半では、北側の82年度調査区でみつかった流路の延長が複数条確認されている。分岐と合流を繰り返して、おおむね北北東から南南西へ流れており、幅・深さとも50cm程度の小規模なものから、最大で幅3m以上、深さ2m程度に及ぶものもあり、断面はU字形を基本としている。黒灰色土層を切って流れ、内部には、下層に弥生前期中～新段階の土器を含む砂礫と青灰色のシルトが、上層に第5層と同一の黄色砂層が分厚く埋積していた。したがってこれらの流路は、弥生前期に機能しており、ある程度埋積が進んでいたところで、前期終わりの土石流により微高地や水田など周辺一帯と同時に一気に埋没したとみられる。基本的にはこの時期に扇状地内を流れていた自然流路のひとつとみているが、どの程度人の手がかえられ、また周辺での活動にかかわるものであったかは、周囲にみられる土堤状の高まりや凹地ともあわせて検討を続けており、報告書において結論をまとめたい。

(2)水田遺構(巻頭図版)

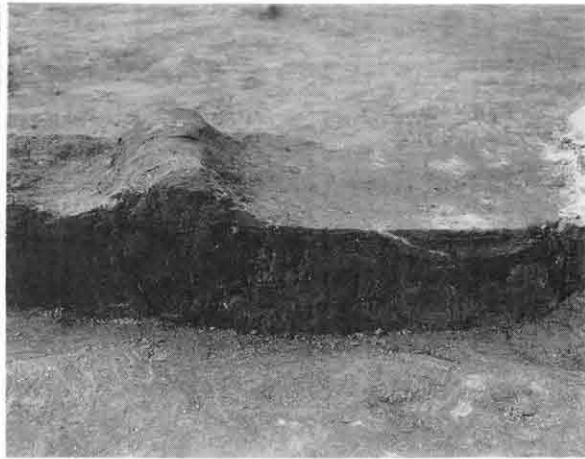
地形環境 確認できた水田遺構は一面のみで、調査区の東半1500㎡あまりを占め、西側の一部と南側を微高地によって画されているほかは、調査区外にも広がる。水田面の標高は51.5m～51.9m、現在の地表面からは約2mの深さである。水田域の地形は、全体としては北北東から南南西への傾きをもつ浅い谷状であって、より微細にみると、北半では北西から南東方向への、また南半では南から北方向への緩斜面が、それぞれ卓越している。この浅い谷状地形は、縄文後期ころの黄褐色土層の堆積により形成された、扇状地内の後背湿地であったものとみている。

耕土層 耕作の対象となっている水田範囲内の黒灰色土層は、大部分が粘土質の泥炭層であるが、地点によって若干状態が異なっている。黒色味の強い粘質の泥炭層は最もレベルの低いx=-108650付近から南側を中心にしており、それより北側や微高地縁辺のレベルの高い地点へ向かっては、灰色の粘土層あるいは黒灰色の砂質土層へと漸移的に変化している。いずれの地点も、さらに分層可能であるとともに、断面の状態に耕作に伴って生じたとみられるさまざまな特徴が認められたが、詳細は報告書に譲りたい。耕土層の色調など見かけ上の特徴の違いは、その下層にある黄褐色土層の透水性などが地点により違っていることを反映したものとみられる。しかしながら、耕作面の状況および畦畔や区画については、同一面上で特定の畦畔のラインを境にして全く異なる2者が存在していた。それぞれ、北半水田、南半水田と呼んで、説明する。

北半水田 (第2図)の梨地部分。緩斜面の等高線に沿うような形で南北方向に畦畔を通し、その間を東西方向の畦畔であみだくじ状に区画する、典型的な小区画水田である。ただし、レベルが低く斜面の傾斜も緩い南側の一帯では、細長い短冊形の区画が卓越している。さらに、南端



第3図 中央微高地上の鋤先痕細部



第4図 北半水田畦畔と耕作面下の溝断面(南から)

では方向を東に振って、北東-南西方向を軸として展開するようである。それぞれの畦畔に規模の違いはなく、幅30cm前後、高さ10cmあまりで断面が蒲鉾形の堅固なものである(第4図)。また、水田範囲内でもレベルの低い部分(すなわち谷状地形の底の部分)を南北方向につらなる一列の区画のみに、東西方向の畦畔を途切れさせる形の水口が設けられている。注目すべきは、畦畔が堅固に構築されているながら、区画内の耕作面の凹凸が著しいことである。凸部と凹部の比高差は10cmを越える部分もあり、形状も不定で、足跡や工具痕あるいは稲株痕とは認めがたい。こうした凹凸が覆うなかで、畦畔に沿う両側の幅20cmほどの範囲内には、凹地が連続しているかのような状態を確認できた。畦畔の構築にともなうもの、とみている(以上巻頭図版第2・3参照)。

南半水田 北半水田とは対照的に東西方向に細長い区画を基本とし、逆L字状のラインで北半と接している部分は、100㎡を越える区画のまま残されている。また、大半が調査区外になり詳細は不明であるが、北東側へ向かってさらに広がっている様子もうかがわれる。畦畔の形状は、北半水田との境界になっているものも含めて、幅10cm前後、高さ5cmほどの断面三角形で小ぶりのものである。ここでは耕作面に凹凸はみられず、ほぼ平坦である(巻頭図版第4)。水口は認められないが、南側の微高地との境には、斜面からの水流の直撃を妨げるかのような土堤状の高まりや流路状の窪みがみられる。

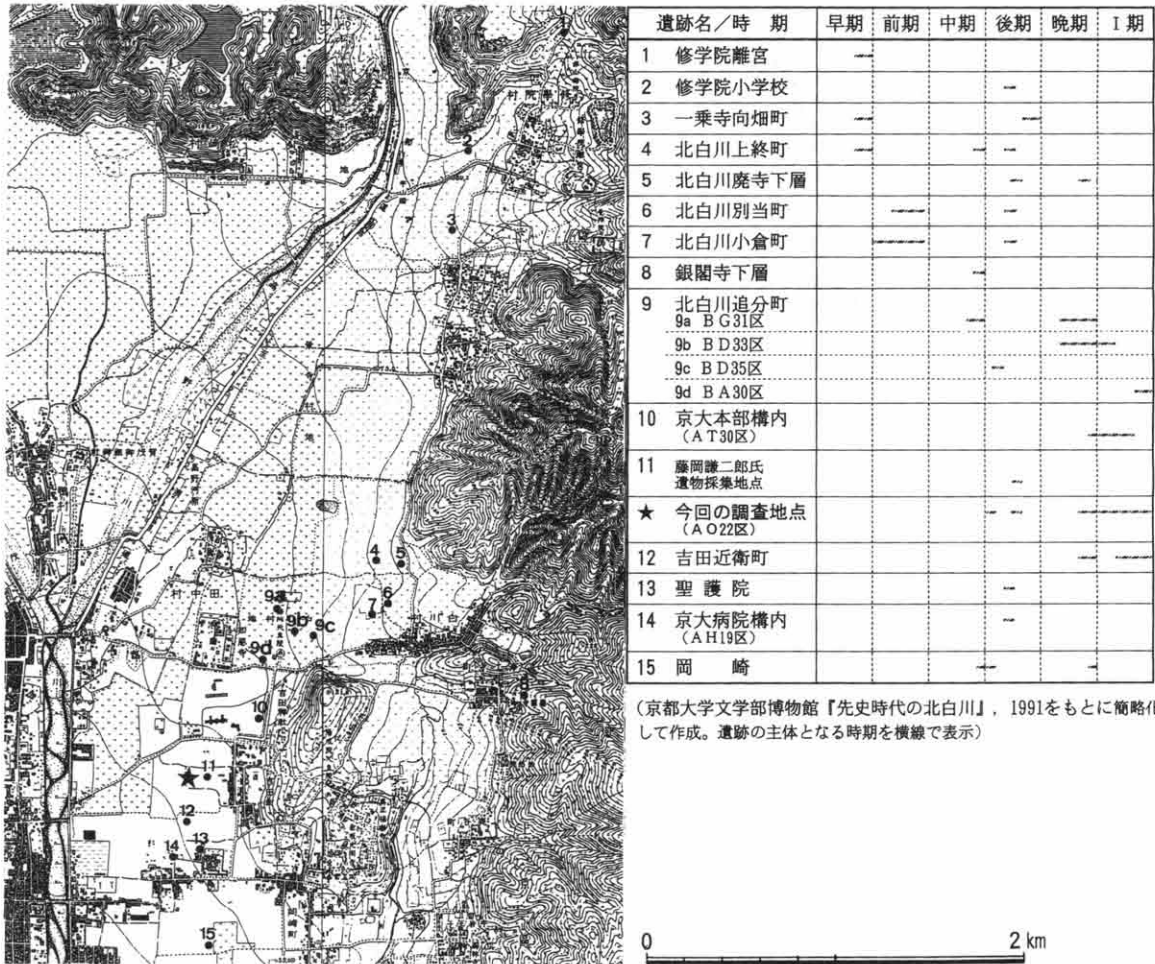
水田の時期 水田遺構は、弥生前期終わりころの土石流により全体が埋没しており、機能していた時期の下限はそこに求められる。一方、この地で水田が営まれはじめた上限の時期については、晩期末以降のいずれかの時期としか言えないのが現状である。水田範囲内の耕土中からは66点の遺物が出土し、縄文晩期末長原式と弥生前期中段階の双方の土器を含んでいた。この耕土層は、多量の船橋式～長原式土器を含む中央微高地の黒灰色土層と連続する同一層と考えられるもので、その上面を耕作しているのであるから、それよりも下る時期を上限とみることもできよう。しかしながら、耕作面よりも下面で、耕土中から掘り込む形の南北方向2条、東西方向2条の小溝が確認されており(第4図)、畦畔をとまなう水田築成前に何らかの作業をしていたことがわかる。黒灰色土層の生成に並行して、縄文晩期にさかのぼる形での粗放な水稻耕作を部分的に試みていた可能性も捨てきれず、プラント・オパール分析の結果を待ち、結論づけたい。

4. 調査成果の意義と課題

耕起水田と未耕起水田 今回の調査における最大の成果は、弥生前期の水田遺構をほぼ当時の姿のまま確認できたことである。なかでも、同一面上で互いに接して特徴の全く異なる2つの水田遺構が並存していた例は、この時期の水田にはみられなかったもので、当時の耕作体系を復元するうえで貴重な事例となろう。あくまで仮説であるけれども、この2つの水田は、春先の作業途中の段階で埋没したもの、と理解している。すなわち、北半水田については、耕作面の凹凸が田ごしらえにともなう耕起状態を示すものであり、よって、南半水田については、そのシーズンの耕起作業がまだ及んでいない手つかずの状態であったのか、あるいはそのつもりがなく放置されていた状態であった、とみるのである。これは、北半水田における畦畔の構築や耕作面の凹凸が、南半水田の位置を意識していかにも途中で止められたかのようにも見えるからである。もっとも、その場合、南半水田の畦畔を前シーズンのものの残存と考えなければならないが、証明する手だてを欠いている。また、南半水田の土地条件は北半水田と異なっており、大部分は傾斜が緩くかつ堆積層も粘質で透水性に乏しい土壌であるから、それに適した畦畔と区画が選択され、既に代掻きを終え平坦化されていた、と見れなくもない。ほかにも、耕作集団との対応など多くの解釈の余地が残されている。最終的な判断は報告書までの課題とし、断面の記録の検討を続けるとともに、他遺跡の事例や民族例なども考慮しながら、しばらくは想像を楽しむことにしたい。

遺跡形成過程と生業活動領域の変遷 水田とともに、形成過程を含めて広範囲で明らかにできた周辺の微地形も、生業活動にかかわる縄文・弥生人の戦略の一端をさぐる手がかりとして、重要である。調査地点は、巨視的にみれば、比叡山麓より南西流する白川系流路が形成した北白川扇状地の末端になるが、東側の病院構内一帯では、南流していた高野川系流路に起因する砂礫層が多数の凹地・滞水域を成しており、そこに縄文期に粘土層が堆積した過程が復元されている^(注5)。調査地のベースとなる黄褐色土層もこれと同種の堆積層とみられ、その堆積過程で、白川系流路による砂層の埋積が加わって小規模な微高地が各所に形成され、結果として水田に適した後背湿地の誕生へとつながったのであろう。さらには、東側を南北に連なる吉田山(120.2m)も、扇頂部からの洪水の直撃に対する障壁の役目を果たして、後背湿地の形成と安定に一役買っていたといえる。出土遺物の時期と状況から、縄文後期のうちには微高地と後背湿地が形成されて活動域となっており、晩期末に再び微高地周辺での活動が活発化したと想定できるが、そうした流れのなかで、弥生前期終わりころまでのいずれかの時期に、安定した後背湿地を選択して水田を開拓する、といった手段がとられたことになる。必要な分析を十分に果たしてはいないが、このような遺物・遺構の出土状況と遺跡形成過程の復元とをかみあわせた検討にとって、今回の調査からは多くの情報を提供でき、地形環境の変化と生業活動領域の変遷との対応関係をより細かなタイムスケールで解明することが、今後の課題のひとつと考えている。

比叡山西南麓遺跡群と水田 周辺の成果に目を向けると、比叡山西南麓の扇状地上には縄文時代各期の遺跡が群在しており(第5図)、それぞれが時期的な補完関係を有することに注目して、この空間を縄文時代の基本的な集団領域とみなす見解が提出されている^(注6)。今回の調査地周辺でも、



第5図 調査地点の位置と比叡山西南麓遺跡群 縮尺1/4万(明治25年仮製2万分の1地形図を使用)

縄文後期の資料が南方の聖護院遺跡(13)や病院構内A H 19区(14)で、晩期~前期の資料が吉田近衛町遺跡(12)で、それぞれ出土している。これらの出土土器との型式比較を果たすことで、領域南半部での活動の時間的変遷をあとづけることが可能となろう。さらには、特に晩期~前期については、調査が進展している北方約500mの北白川追分町(京大北部構内)遺跡との関係も注意される。ここでは、晩期前葉以降弥生前期末に至る各型式の土器が出土しているが、B D 33区(9b)では滋賀里IV式^(注10)が、B A 30区(9d)では前期新段階^(注11)がそれぞれ中心となるなど、晩期~前期のなかでも地点によって微妙に型式の偏りがみられ、集団の活動拠点が細かな移動をしていたともみられる。また、縄文晩期後葉の植生と地形環境の変遷が詳細に検証されたB G 31区(9a)の成果からは、多種類の堅果類の積極的利用という、縄文中期以降の近畿地方に普遍的な生業活動が続けられていたことが知られ、籾殻の出土は縄文的生業内に搬入された形の米と理解されている^(注12)。今回の調査で出土した土器は船橋式~長原式が主体となっており、追分町遺跡で多くみられる滋賀里IV式は非常に稀少であった。水田の構築と前後する時期における領域内での集団の動向と関連して、こうした状況が生じた可能性もあり、地点別の遺物内容を詳細に比較検討することが必要となっている。今回の調査成果を、このように比叡山西南麓遺跡群の動向の中に位置づけることを

最終的な課題とし、水稻耕作という全く異なる生業体系が出現する過程と影響を、集団や領域の動態として把握できれば、と考えている。これは、移行期の社会の実態に近づくためにも必要な作業であろう。

以上のように、明らかになったことにも増して、検討すべき多くの課題や目標が残されることになった。調査を通じて非常に多くの方に教をいただいたにもかかわらず、未消化のままであることをお詫びし、報告書をもってその責を果たすことにしたいと考えている。今後とも、変わらずご指導を賜れば幸いである。末筆ながら、記録的な暑さが続いた夏の日、調査全体を統括された五十川伸矢氏をはじめとして、私の試行錯誤を辛抱強く助け支えてくださった多くの方々と、本稿の掲載をご高配いただいた田代弘氏と土橋誠氏に、こころより御礼申し上げたい。

(いとう・あつし=京都大学埋蔵文化財研究センター)

- 注1 今回の調査成果のうち、平安時代の鋳造遺構については、概要の紹介がされている。
五十川伸矢「京都大学構内の梵鐘鋳造遺構」『月刊文化財』第374号(平成6年11月号), 1994
- 注2 清水芳裕「自然地形の変化と遺跡の形成過程」『第四紀研究』第24巻第3号, 1985
清水芳裕「遺跡の形成と地形の変化」『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅳ—京都大学病院構内遺跡の調査—』, 1991
- 注3 藤岡謙二郎「北白川扇状地と教養部構内発見の遺物包含層並びにその先史地理学的意味」京都大学教養部『人文』第19集, 1973
泉 拓良「北白川上層式土器の細分—京都大学教養部構内A O 24区出土の縄文土器を中心に—」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和54年度』, 1982
- 注4 五十川伸矢・飛野博文「京都大学教養部構内A P 22区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和57年度』, 1984
- 注5 前掲(注2)文献
- 注6 泉 拓良「縄文集落の地域的特質」『講座考古地理学』第4巻 村落と開発, 1985
- 注7 百瀬正恒「白川街区1」『昭和60年度 京都市埋蔵文化財調査概要』, 1988
- 注8 千葉 豊「病院構内の先史時代遺跡」『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅳ—京都大学病院構内遺跡の調査—』, 1991
- 注9 京都文化財団『吉田近衛町遺跡』, 1989
- 注10 浜崎一志・千葉 豊「京都大学北部構内B D 33区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 1987年度』, 1990
- 注11 石田志朗・中村徹也・中村友博『京都大学理学部構内遺跡発掘調査の概要』, 1972
- 注12 亀井節夫・泉 拓良「北白川追分町縄文遺跡調査の成果と意義」『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅲ—北白川追分町縄文遺跡の調査—』, 1985

大俣城跡の発掘調査

大岩 洋一

1. はじめに

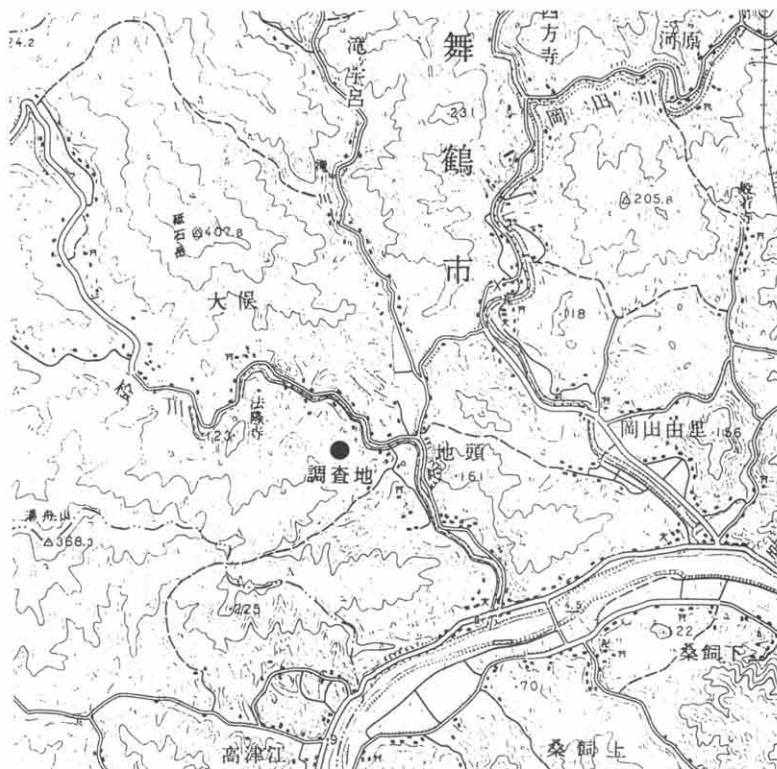
今回の調査は、京都縦貫自動車道(綾部・宮津道路)の建設工事に先立ち、京都府道路公社の依頼を受けて実施した。調査期間は、平成6年度が平成6年9月14日～平成7年1月27日、平成7年度が平成7年4月17日～同年9月8日で、調査総面積は、約5,500㎡であった。

昨年度は主郭と帯曲輪を中心に調査を行い、今年度はその他の曲輪や虎口・竪堀・土塁など主として防御施設について調査をすすめた。その結果、大俣城跡は戦国時代後期を中心として機能した山城跡であることが確認され、また城跡のほぼ全体が予定路線内にあったことから、山城の全体構造を解明する上で大きな成果を挙げることができた。それらについて、以下報告をする。

2. 遺跡の位置

調査地は、京都府舞鶴市大字大俣小字別荘平に所在し、大江町と舞鶴市の境界に聳える湯舟山から東へ派生する尾根の先端部にあたる。北方に標高408mの砥石岳を臨み、砥石岳と湯舟山に挟まれた谷筋を由良川の支流である檜川が緩やかに流れている。

大俣城跡は、この檜川を眼下に見下ろす山城跡で、標高約85mの山頂を削平し主郭としている。麓までの比高差は約40mを測る。主郭から檜川を見下ろすと、川沿いに街道が走っているのがわかる。この街道は古くより存在し、檜川の上流に向かってしばらく並走した後、普甲峠を越えて宮津市へ至る。街道沿いには小さな集落が点在し、中でも本城跡の麓に近在する「館」

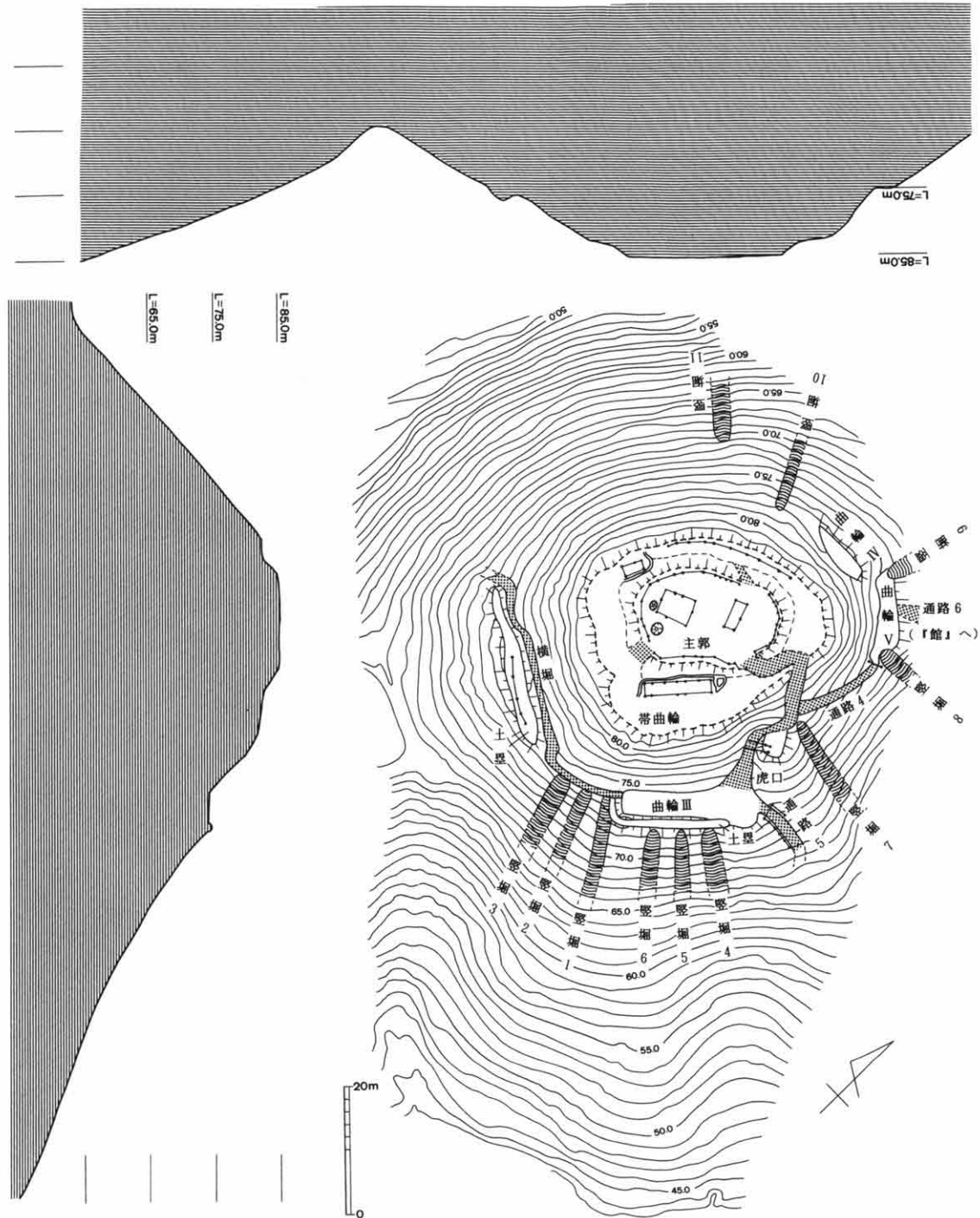


第1図 調査地位置図(1/50,000)

及び「庄内屋敷」等の集落は、城跡との関連が注目される。

3. 調査の概要

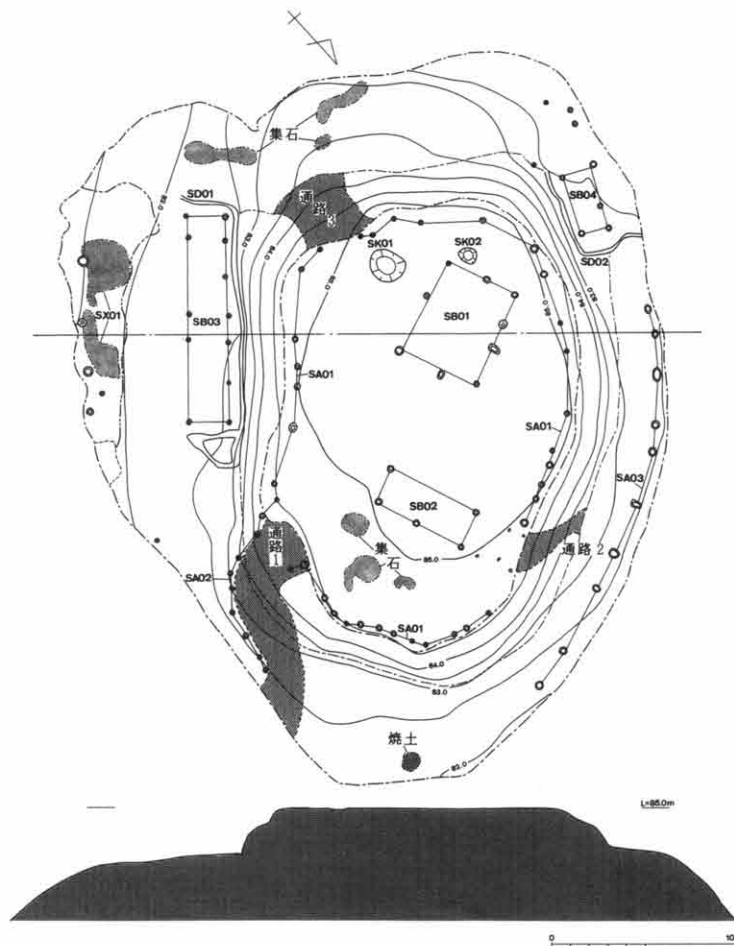
今回調査した山城は、最頂部にある主郭を帯曲輪が取り囲み、さらにその下段にも曲輪を配する円郭式の山城である。遺構の存在が想定される範囲については人力にて掘削を行い、それ以外については適宜重機掘削を併せて実施した。調査の結果、5つの曲輪と虎口・堅堀・土塁などの



第2図 遺構検出状況

防御施設を確認した他、掘立柱建物跡や柵列跡などの遺構を検出した。以下、主郭から順に検出された遺構について説明を加える。

(1)主郭 曲輪内部に掘立柱建物跡2棟(SB01・02)と土坑2基(SK01・02)、外周部分に柵列跡(SA01)、斜面部に帯曲輪とつながる通路状の出入口を3ヶ所検出した。建物跡2棟の内、SB01は曲輪西半部にある。規模は2間×3間で、柱間は不ぞろいである。柱穴は円形及び楕円形で、径30～50cm(円形のみ)、深さ15～35cmを測る。SB02は曲輪東半部にあり、規模は2間×1間、柱間はやや不ぞろいである。柱穴は円形で、径20～30cm、深さ15～30cmを



第3図 主郭及び帯曲輪

測る。いずれも緊急時の避難または待機場所と思われる。また2棟の主軸が平行していることから同時期に建っていた可能性もあるが、出土遺物を伴っていないため時期を確定することはできない。

土坑2基は曲輪南西隅にあり、SB01に隣接する。SK01は長軸約1.9m、短軸約1.6m、深さ約0.8mを測る楕円形土坑、SK02は長軸約1.0m、短軸約0.9m、深さ約0.4mを測る不整形の土坑である。水溜としての用途が考えられる。

主郭と帯曲輪を連絡する出入口3ヶ所の内、最も注目されるのが東出入口(通路1)である。主郭を出た所で壁面に沿って屈曲し、なだらかな坂をつくっている。主郭側壁面には石を貼り、帯曲輪側には柵列(SA02)を設けて境界としている。この通路の先は、さらに曲輪Ⅲに連絡する虎口や曲輪Ⅴへの連絡路(通路4)とつながっており、この山城における連絡機能の中枢部を形成している。

(2)帯曲輪 掘立柱建物跡2棟(SB03・04)と溝2条(SD01・02)、北西側外周部分に柵列跡(SA03)、その他集石遺構や焼土を検出した。

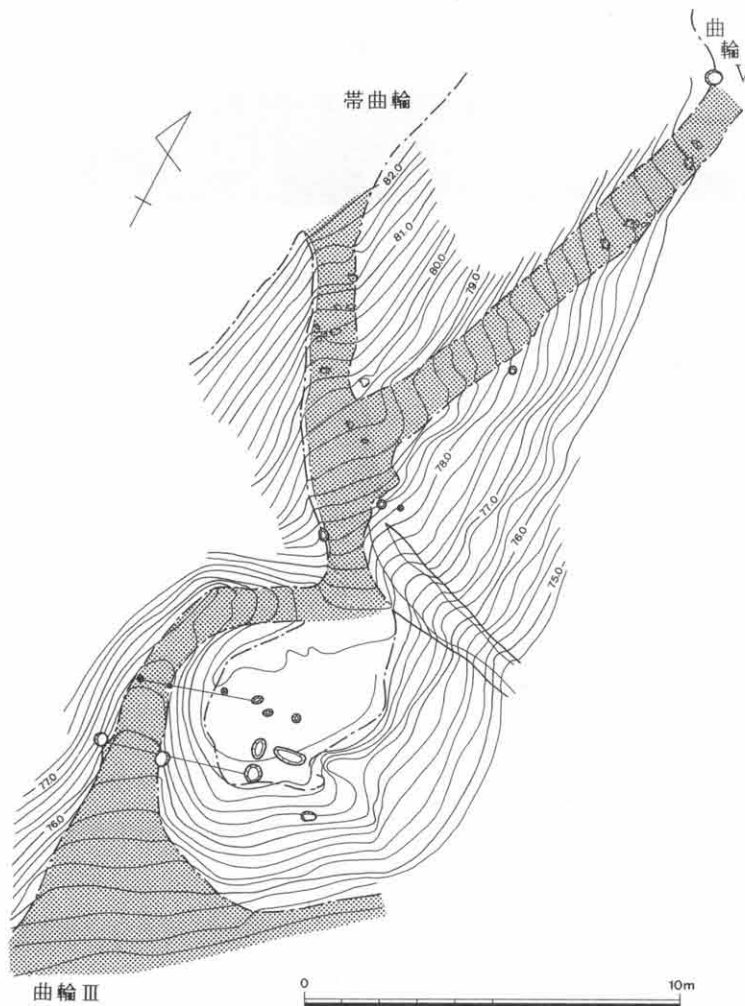
SB03は帯曲輪南東部にある。1間×6間の横長の建物跡で壁面に沿って検出された。柱穴は

円形で、径20~30cm、深さは最深のもので40cmをこえる。柱穴の記されていない箇所は、未検出というより存在しなかったとも考えられ、その様な構造の建物を想定することもできる。柱穴の並び方や柱間に規則性があり、建物の性格を考える上で興味深い。S D01は幅10~20cm、深さ約5cmを測り、S B03を囲むようにめぐっている。雨落ち溝と思われる。帯曲輪西側のS B04とS D02の関係も同様である。ただし、帯曲輪の西半部は幅が狭いため、意図的に壁面を削りこんで空間を広げた所にS B04はある。規模は1間×2間、柱穴は円形で、径25~40cm、深さは最深のもので約50cmを測る。S D02はS D01同様雨落ち溝で、幅約20cm、深さ5~10cmを測る。

S X01は拳大から人頭大の礫が混在した集石遺構である。曲輪の縁辺付近に溜まり状になって検出された。一部、面をそろえるように礫を並べている所があり、一帯が盛土層であることから造成時の土留めに使用されたことも考えられる。ただし、検出面より下を精査した結果、石積の痕跡やその他の遺構・遺物を認めることはできなかった。

帯曲輪北側で検出された焼土は、径1.2m前後の不整形円形をしている。焼土層からは炭のみが確認された。付近には範囲が不明瞭な焼土の広がりがあり、狼煙の跡と推測される。

(3)曲輪Ⅲ・曲輪Ⅳ・曲輪Ⅴ 曲輪Ⅲの周囲には土塁が逆「L」字状に築かれており、土塁の



第4図 虎口

一部を突き抜けて通路が横堀へと抜けている。臨戦時に兵が集結する防御上の拠点であったと思われる。

曲輪Ⅳからは顕著な遺構を認めることができなかった。

曲輪Ⅴは壁面を削りこんで空間を広げており、両側に堅堀を配して防御を固めている。この曲輪の中央部より下に向かって道(通路6)が伸びており、小さな曲輪(調査対象地外)を経て麓の集落(「館」)へと連絡している。曲輪Ⅳは曲輪Ⅴの西側の一段高い所に位置し、この2つの曲輪が集落に面して造られていることから防御空間として利用されたものと思われる。

(4)虎口 曲輪Ⅲと帯曲輪及び曲輪Ⅴを連絡する重要な

部分にある。曲輪Ⅲ側に門柱跡と思われる柱穴が対になって検出された。柱穴はともに円形、径はそれぞれ約25cmと35cmを測り、深さは約45cmと56cmを測る。これらの柱穴の奥に小穴が対になって検出されており、櫓の様な構築物を想定することもできる。この虎口は、折れ曲がった所に攻撃用の空間を設けた枳形虎口の形態をとっている。虎口の上部では通路が2方向に分かれ、それぞれ帯曲輪と曲輪Ⅴへ連絡している。帯曲輪への通路は石を並べた階段状遺構になっている。

(5) 堅堀 合計11条検出された。断面は「U」字形に近くしかも浅掘りで、「V」字形に鋭く掘りこまれてはいない。堅堀1～3及び4～6は、いわゆる畝状堅(空)堀群と呼ばれるもので曲輪Ⅲへの侵入を阻んでいる。総体的に堅堀は東半部斜面に多く、東側を意識した築城意図が窺える。

(6) 横堀 断面が箱形を呈し(箱堀)、両端で屈曲するという特徴が見られる。全長約35mを測り、一方の端は斜面に流れ落ち、もう一方は曲輪Ⅲに連絡する。堀底は城道として用いられたとも考えられ、敵兵の侵入を遮断するだけでなく、味方の連絡通路としての機能も兼ね備えていたと思われる。横堀前には土塁が築かれ、土塁上から柵列跡が検出された。土塁下の斜面は自然の鞍部を人工的に削りこんで傾斜を急にし、南側の尾根筋からの侵入に備えている。

(7) 通路4・通路5 通路4は先述の通り曲輪Ⅴへの連絡路である。曲輪Ⅴとの境界で対になった柱穴と堅堀8を検出した。堅堀の先端が通路を横断しているため、曲輪の入口で壁面を削りこみ、通路を屈曲させるという工夫が見られる。

通路5は曲輪Ⅲより下へ伸びる城道で、斜面側に柵列跡、曲輪Ⅲ側に門柱跡を検出した。調査範囲外になるため追跡調査ができなかったが、通路6と同様麓まで連絡していたものと推測される。

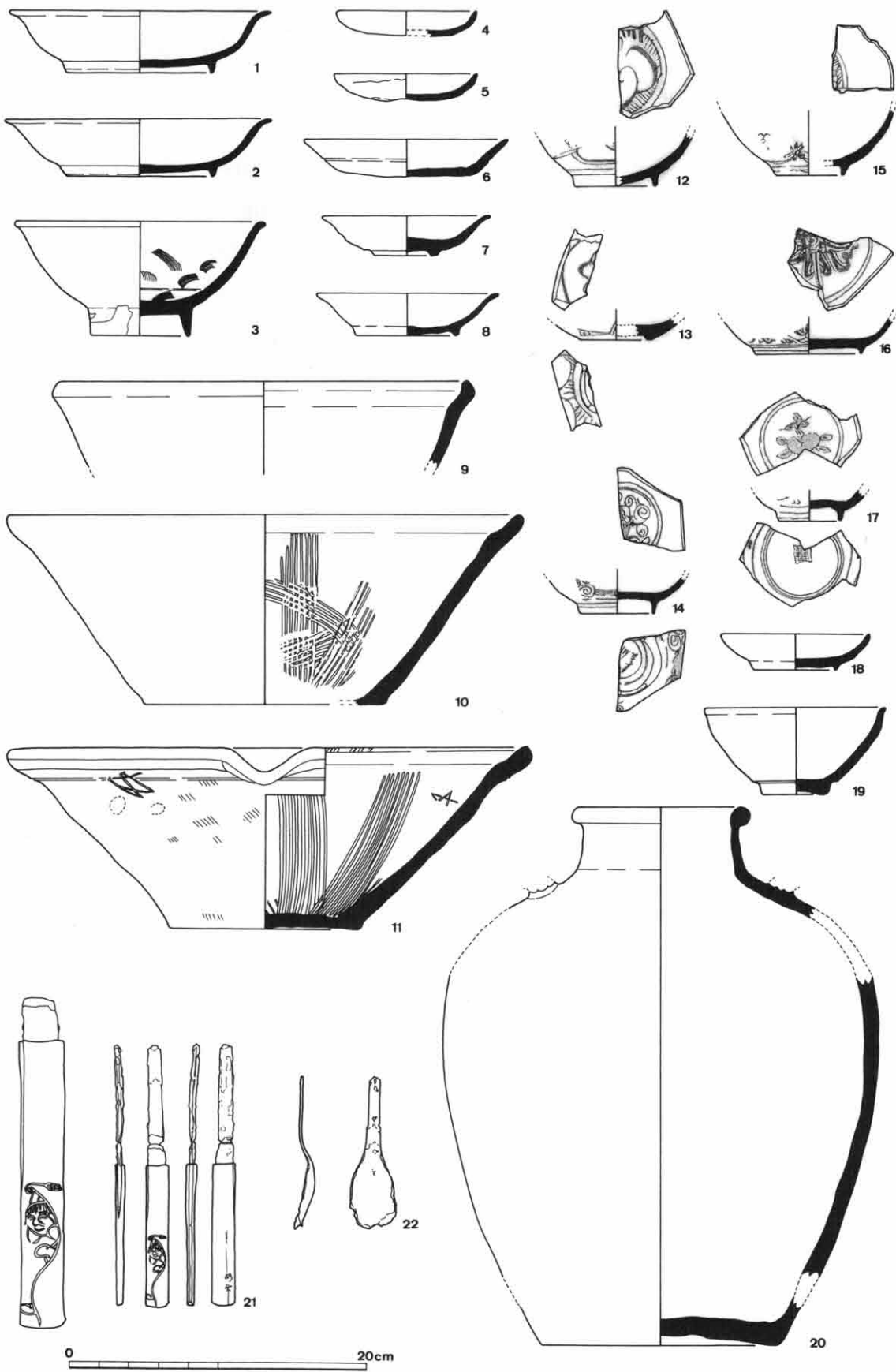
4. 出土遺物

現在遺物整理中のため、本稿では一部の紹介にとどめ、出土土器の傾向について若干の考察を加えることにする。

1～3・7～9・12～17・20は中国製輸入陶磁である。1・2・7・8は白磁の皿、9は青磁の盤で15・16世紀代のものである。12～17は染付で、12・15は蓮子椀、13は碁笥底の皿、16は十字華文をもつ端反り皿である。いずれも15世紀後葉～16世紀前葉に比定される。14・17は饅頭心の椀で16世紀中葉～後葉のものである。20は16世紀代の陶器の壺で、横位の把手をもつ。なお3の白磁椀は後にも述べるが12世紀代のもので、山城が機能する以前の遺物である。

4～6は土師器皿で、4・5は12世紀後半、6は16世紀後半のものである。4・5はもう1枚の土師器皿と3枚重ねで、3の白磁椀とともに出土した。3の傍らからは同じく白磁椀(12世紀前半)が出土しており、これらの周囲におよそ70cm四方の掘形が不明瞭ながら確認されることから、中世墓であった可能性が高い。ただし、辺り一帯は山城南側の鞍部にあたり、築城時の普請によって墓壙上部が削られ失われてしまったものと思われる。

10・11は16世紀代の在地産の播鉢、18は16世紀代の瀬戸・美濃系の灰釉丸皿、19は同じく瀬戸・美濃系の天目茶椀である。16世紀中葉以降に属する。22は銅製の匙で、出土層位から19と同時期に比定される。付近からは銅製の椀の底部も出土している。21は表土中よりとりあげたもの



第5図 出土遺物実測図

で、江戸時代中期の小柄である。材質は素銅(すあか)で、『如竹』の銘が刻まれている。山城が廃絶した後の遺物であろう。全体の傾向としては、供膳具の椀・皿類が多く、とりわけ皿(白磁・美濃焼・土師器)の出土が目立つ。これは、とりもおさずこの山城において生活の場があったことを意味する。茶臼や茶入・銅製匙・天目茶椀など茶

付表 大俣城跡出土土器類組成表

中国製53(36.55%)				日本製92(63.45%)			
磁	染付	椀	19	陶器	椀	7(美濃灰釉2、美濃天目5)	
		皿	7		皿	17(美濃灰釉)	
器	白磁	椀	0		盤	2(美濃鉄釉)	
		皿	22		壺	4(丹波1、瀬戸1、その他2)	
		小杯	2		茶入	1(美濃鉄釉)	
51	青磁	盤	1		その他	2(甕カ?)	
				土師器	皿	32	
陶器	2	壺	2	土師器	壺	1	
				瓦質・陶質土器20	蓋	5	
				甌	1(ミニチュア)		
				瓦質・陶質土器20	播鉢	20	

道具がそろっている点も興味深い。今後、これらの出土分布状況を調べ、曲輪により住居機能や防御機能など機能分化があったのか検討していきたい。また、壺・甕などの貯蔵具が極端に少ない点も、当城の性格を知る上で注目される。なお、その他の遺物として石臼・砥石・碁石・炭化物(穀類・木片)・銭貨(主として北宋銭)等があることを付記しておく。

5. まとめ

今回調査した大俣城跡は、山城としての規模からすると決して大きなものではない。しかし、曲輪同士の連絡機能が明確であることや、防御施設がほぼ完存しその配置にも工夫が見られることなど、注目すべき点の多い貴重な調査例であると言える。

大俣城の築城時期を確定することは難しいが、15世紀代の遺物が出土していることから、時期をその辺りにまで遡らせることはできる。ただし、16世紀中葉から後葉にかけての遺物が多く、山城としての最盛期はその頃にあったと考えるのが妥当であろう。虎口が枳形虎口の形態を採用していることや畝状堅堀群が確認されたことなど、遺構の面からもほぼ同様のことが言えるのではないかと思われる。

そこで、15・16世紀における丹後国の動向について概観してみることにする。丹後国は、14世紀末に一色満範が守護に補任されて以後、代々一色氏の支配下にあった。しかし、15世紀中頃から若狭国守護武田氏との間で丹後をめぐる勢力争いが絶えず、一色氏の居城建部山城や加佐郡普甲山を舞台にして戦が繰り広げられていた。両者の抗争は16世紀中頃まで続くが、おそらくは在地領主層をも巻き込みながら一進一退の攻防が展開されていたのであろう。大俣城の麓を走る街道は普甲峠へとつながっており、この地の土豪達にとってもこれらの争いは無縁ではなかったはずである。大俣城が築かれる契機はこの辺りにあったのではないだろうか。永禄元(1558)年には一色義道が丹後国主となり支配権を握るが、織田信長に京より追われ逃れてきた將軍足利義昭を庇護したため信長と敵対することになる。そして、天正6(1578)年には信長の命を受けた細川藤孝が丹後討伐のため挙兵し、宮津八幡山に陣取る。藤孝は明智光秀の加勢を得て義道の居城建部

山城を攻め、さらに中山城の沼田氏をも味方に引き入れこの戦いに勝利する。大俣城が改修・補強され、最も機能したのがこの頃だったのではないかと推測される。この城に見られる改修の様子や防御の工夫には、こうした戦乱の世を生き抜くための在地領主の並々ならぬ苦心と知恵が感じられて興味深い。天正8(1580)年に藤孝が田辺城主となり丹後は細川氏の支配下に収まるが、この頃を境に大俣城もその役割を終え、機能を停止したものと思われる。16世紀末の遺物の少なさもそのことを裏づけている。

なお、今回の調査を終え、未だ多くの検討課題を残しているのが実情である。先述した曲輪^(注)の機能分化の問題、帯曲輪の盛土層に関する造成法の問題、丹波・丹後地方に多く見られる単郭山城と大俣城の関連性、また大俣城と地域集落との結びつき等々、紙面の関係上述べられなかったことも数多い。今後、さらに検討・分析を重ね、明らかにしていきたいと思う。

(おおいわ・よういち=当センター調査第2課調査第2係調査員)

注 これらの検討課題については、中井均・福島克彦・山上雅弘各氏より御提言を頂き、多くの御教示を受けた。記して深謝の意を表すとともに、今後とも御指導賜れば幸甚である。

また、出土遺物については当センターの森島康雄から教示をえ、小柄については去る8月25日の刀剣審査会(綾部市)の折、新井重熙・徳吉秀昭・吉村滋太各先生に御鑑定をお願いした。記して厚く感謝する次第である。



大俣城跡全景航空写真(西から)

長岡京跡左京南一条三坊十三町の宅地

戸原和人

1. はじめに

京都府埋蔵文化財調査研究センターでは、中央自動車道西宮線(名神高速道路)の拡幅工事に伴い、日本道路公団大阪建設局からの依頼を受けて長岡京跡の調査を継続的に実施している。

調査の主眼は、名神の拡幅部分での条坊関連遺構の解明と、新規建設が予定される桂川パーキングエリア(PA)での面的調査による長岡京の宅地の解明である。

(仮称)桂川パーキングエリア建設予定地は、京都市南区の南西端にあたり、平成5年度から調査を実施している。

この調査地は、長岡京跡左京南一条三坊十三町、同四坊四・五町、二条三坊十六町、同四坊一・八町にあたり、長岡宮の真東に位置する(第1図)。また、弥生時代を主とする「東土川遺跡」にも近接している。これまでの調査では、長岡京の条坊関連遺構・建物跡のほか、縄文時代から平安時代・中世にいたる遺物や遺構が確認されている。本年度の調査では、左京南一条三坊十三町で一町区画の宅地を検出し、同四坊四町では1/2町の宅地を検出した。以下では長岡京期の遺構に限りまず、左京南一条三坊十三町(以下十三町と呼ぶ)周辺の調査成果を概観し、その後十三町の成果を紹介したい。

2. 十三町周辺での調査の概要(第3図)

左京二条三坊十六町

京都市埋蔵文化財研究所のおこなった左京第139次^(注1)調査の南一条大路南側溝と左京第177次^(注2)調査の東三坊第二小路東側溝、名神高速道路関係遺跡としておこなった左京第267・314・330・331次^{(注3) (注4) (注5)}調査とによって十六町の四周の遺構が検出されている。これらの調査により、溝心々で東西409.5尺、南北368.6尺とやや横長の宅地であることが判明した。

左京第330次(A3地区)94年度調査

十六町の宅地にかかわる遺構としては、同町を区画する南一条大路の南側溝と、東三坊大路の西側溝および宅地内の溝や柱列などがある。

東三坊大路西側溝 検出幅1.3~1.8m、深さ20~30cmで、22mにわたって検出した。西側溝の心座標は、 $Y = -25,254.90$ を測る。

南一条大路南側溝 検出幅1.1~1.4m、検出高40~50cmで、16.5mにわたって検出した。南側溝の心座標は、 $X = -117,539.60$ を測る。

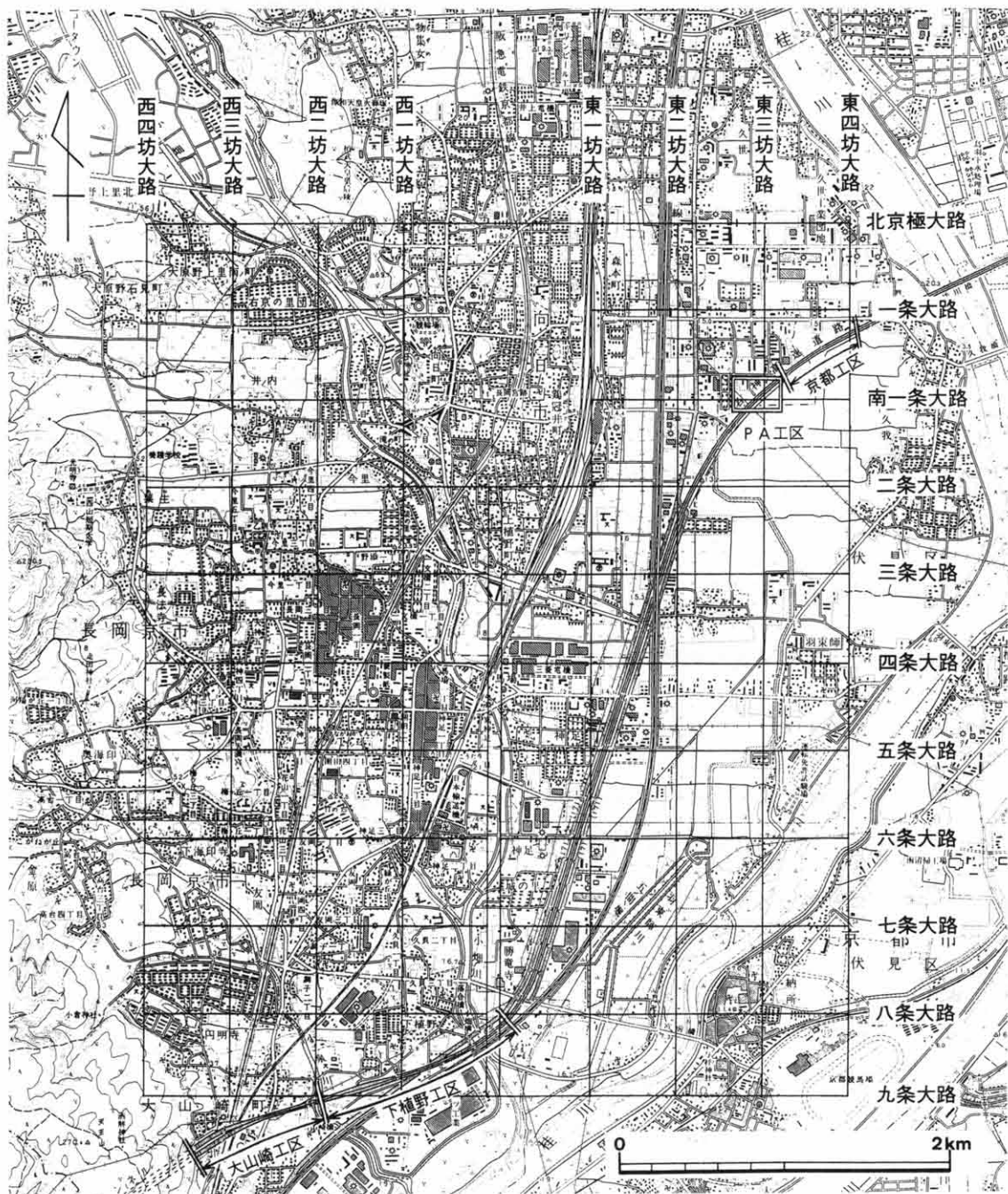
十六町町内溝 調査地南半で検出した南北の二条の溝で、東側の溝では溝の東側から廃棄された状態で長岡京期の土器が出土した。十六町を画する東三坊大路西側溝心と東三坊第二小路東側溝心との間のほぼ中央にこの二条の町内溝の中央が位置し、一町を東西に二分する溝と考えられる。

左京第331次(B-2b地区)94年度調査

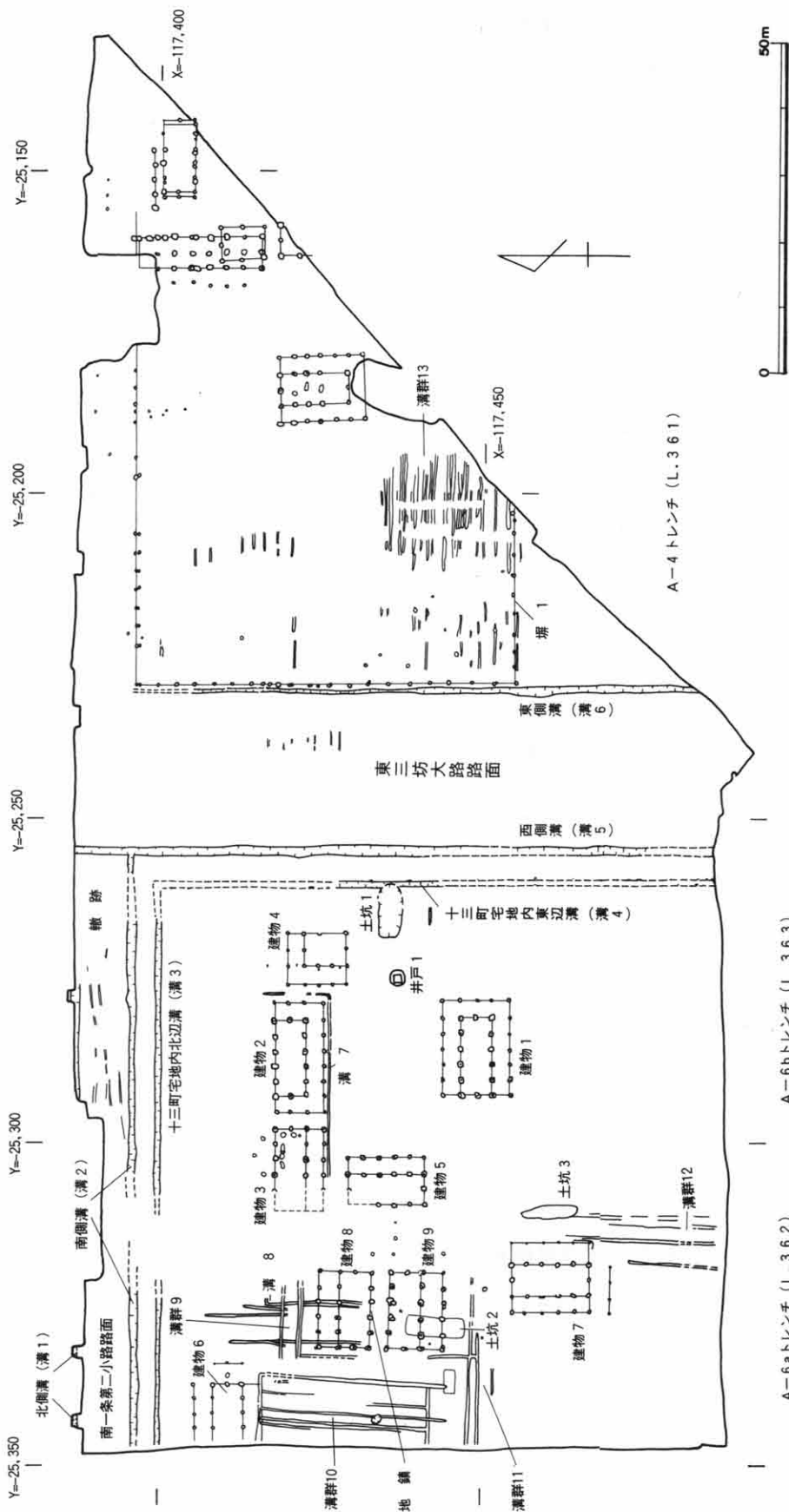
東三坊大路の西側溝、掘立柱建物跡などを検出している。

東三坊大路西側溝 幅1.2~1.5m、深さ0.4mを測る。溝の底には泥が堆積し、土師器、須恵器、木片、獣骨等が出土した。

西側溝の西では、2間×3間の南北棟を検出した。柱間の寸法は、梁間2.1m、桁行1.8mを測



第1図 長岡京条坊復原図



第2図 検出遺構平面図

る。南側の棟持柱には太さ15cmの柱根が残っていた。

左京第314次(D-2 b地区)93年度調査

二条第一小路の両側溝を検出した。両側溝の溝幅は1m、深さ0.3~0.4mを測り、両側溝の間隔は9.3mを測る。

左京第267次(向日工区12BL13tr)91年度調査

十町と十六町にまたがる調査で、東一坊第一小路の両側溝と二条第一小路の両側溝を検出した。

東一坊第一小路西側溝 幅1.0~1.2m・深さ約15cmを測る。溝心は $X = -117,662.00$ のとき $Y = -25,385.60$ となる。

東一坊第一小路東側溝 幅1.0m・深さ約30cmを測る。溝心は $X = -117,652.00$ のとき $Y = -25,376.10$ となる。

二条第一小路北側溝 幅0.8m・深さ約25cmを測る。溝心は $Y = -25,373.00$ のとき $X = -117,648.70$ となる。

二条第一小路南側溝 幅1.0m・深さ約5~10cmを測る。溝心は $Y = -25,381.00$ のとき $X = -117,657.85$ となる。

十町では2間×3間以上の東西方向に棟筋を持つ掘立柱建物跡と井戸を検出している。

十六町の宅地では、東西・南北溝や南北方向の柵列などを検出している。

左京二条四坊一・八町

左京第315次(B-2 a地区)93年度調査

南一条大路の南北両側溝および東三坊大路の東側溝、掘立柱建物跡5棟、柵2条、土坑2などを検出した。

南一条大路南側溝 幅約1.3m、深さ約65cmを測る。断面が逆台形を呈し、2度以上の溝の掘り直しが認められる。溝内からは、須恵器、土師器、馬と考えられる下顎骨や獣骨が出土した。溝心の座標は $Y = -25,190.00$ で $X = -117,538.60$ である。

東三坊大路東側溝 幅約1.3m、深さ約2.5cmを測る。調査区内で北部が細くなる。溝の断面形はU字状を呈する。埋土中から須恵器、土師器が出土している。溝心の座標は $X = -177,570.00$ で $Y = -25,230.10$ である。

東三坊大路東側溝の東側では、これに並行する柵列がある。東側溝の幅が狭くなる部分で1対の大型の方形掘形が認められることから門跡と考えられる。柵列の柱間は約3.3mである。

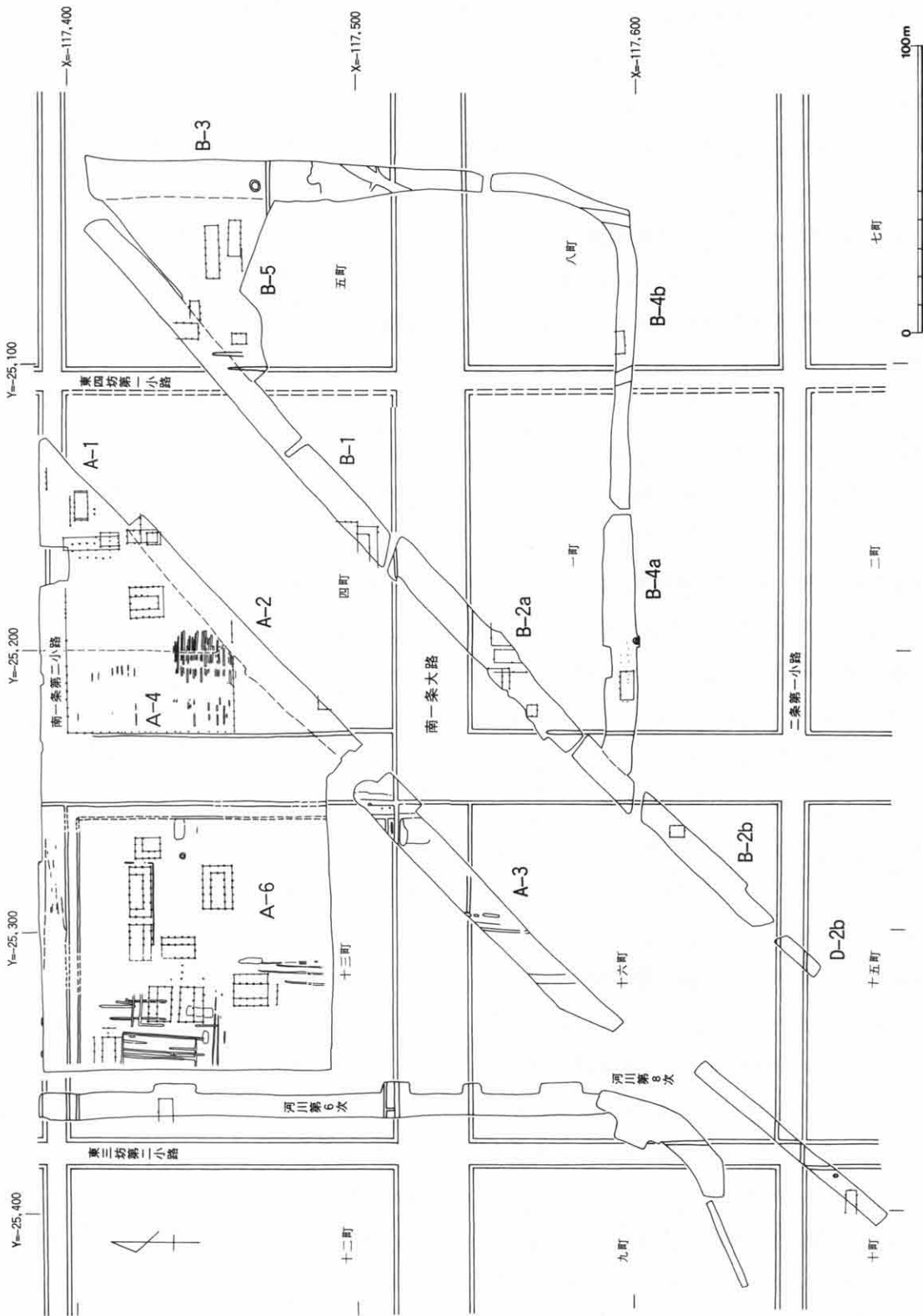
左京第333次(B-4地区)94年度調査

東三坊大路東側溝と一町の宅地内では、掘立柱建物跡2棟、井戸1基を検出した。^(注6)

東三坊大路東側溝 断面形が浅いU字形を呈し、南側は削平されており、検出面からの深さが5cm程しか残存していなかった。溝内からは、須恵器、土師器が出土している。

井戸は、上部の井戸枠が抜き取られていたが、井戸の底部から、水溜め用の曲物を検出した。井戸の中からは、須恵器の杯身と土師器皿、小型の曲物、桃の種が出土した。

八町では、東四坊第一小路計画線付近で検出した流路と調査地の屈曲部で南北に流れる流路、



第3図 長岡京期主要遺構図

掘立柱建物跡がある。

左京第334次(B-3地区)94年度調査

南一条大路南側溝 調査区の南端部で検出した。幅約1.3~1.6m、深さ約0.5m、検出長約5mである。埋土中より土器片数点が出土した。

左京南一条四坊五町

五町では、調査区の北半で3棟、南半では2棟以上の掘立柱建物跡が見つまっている。いずれも長岡京の時代か平安時代のものと思われる。

左京第303次(B-1a地区)93年度調査

東四坊第一小路東側溝の可能性のある溝を含む、溝2条と掘立柱建物跡2棟を検出した。

東四坊第一小路東側溝 西側の溝は、幅約1.5m、検出面からの深さ約5cmを測る。平城宮式6721Gの軒平瓦をはじめ、多くの平瓦・丸瓦・須恵器・土師器を検出した。東四坊第一小路東側溝の延長線上に乗る。

東側の溝は、最大幅は約1.2m、深さ15cmを測る。出土遺物には長岡京期以外のものは認められない。この溝の位置は、東三坊大路の中心線から東三坊第二小路を折り返した位置にあり、 $X = -117,462.00$ で $Y = -25,101.20$ を測る。

左京第334次(B-3地区)94年度調査

この調査区では南一条大路南北側溝、溝2条、井戸1基、旧流路等を検出した。

南一条大路北側溝 調査区の南側で検出した。幅約1.5~1.7m、深さ約0.6mを測る。溝の最下層より須恵器・土師器等の破片が数点と、獣骨の一部が出土している。

旧流路は、南一条大路北側溝から北東方向にのびる溝である。検出長約16m、幅約3.1mを測る。この溝は溝内に杭列が打たれており、護岸施設があったものと想定される。遺物は、木簡1点「九月九日□米□二升里米三升『四日出米事』」、木製品、土器多数が出土した。

このほかに、平安時代に埋められた約4m×4m規模の方形の掘形をもつ井戸や、その南に東西方向の溝がある。

左京第337次(B-5地区)94年度調査

五町の中央付近で掘立柱建物跡2棟と柵列、西よりで1棟を検出した。中央付近の掘立柱建物跡は、2間×7間の東西棟である。柱間寸法は梁間2.5m、桁行2.67mの等間である。建物跡の方位はほぼ真北を向く。柱穴に一部に礎板がある。

その南の2間×5間の東西棟建物跡は、柱間寸法は梁間2.33m、桁行2.52mの等間で、建物跡の方位はN3°Eとやや東に振れる。調査地西よりの1間×3間の南北棟建物跡は、柱間寸法が梁間3.85m、桁行1.8mの等間である。建物跡の方位はほぼ真北を向く。柱穴は一辺1mの方形を呈する。北西隅の柱穴には拳大ほどの小石が敷きつめられ、礎石の根石かと考えられる。

左京南一条四坊四町

四町での調査は、宅地の約1/3を調査し、1/2町の宅地割りの区画を確認することができた。四町の北半部で7棟以上の掘立柱建物跡と北半の半町を区画する柱列が見つかった。南半部で

は、2棟の掘立柱建物跡と柵列が見つかった。いずれも長岡京期か平安時代のものと思われる。

左京第336次(A-1地区)94年度調査

四町の東半で北辺に接して建てられた南北2間、東西5間の建物跡は、同じ規模の建物が立て替えられている。

その西側には、南北7間、東西2間の総柱建物が復元できるが、2棟の建物に分かれる可能性もある。南には東西2間、南北2間の建物跡が重なっている。

さらに南には左京第329次調査で検出した建物跡に続き、東西2間、南北5間に復元される。

四町の西半には東西2間、南北5間の主屋の東西に廂を持つ。この建物跡は南面にも廂を持つ可能性がある。

左京第336次(A-2地区)94年度調査

東三坊大路東側溝、掘立柱建物跡、柵列跡などを検出した。

東三坊大路東側溝 幅1.2~1.5mで、検出面からの深さ約40cmを測る。この溝からはほとんど遺物が出土していない。溝の中心座標は $X = -117,486.00$ のとき $Y = -25,230.40$ となる。調査地の北東隅で検出した1間×3間と考えられる南北棟とA-1地区に広がりを持つ建物跡がある。

調査地の中央で検出した東西方向の柱列は、町内を南北に二分割する位置にある。

調査地の南寄りでは、東西1間以上、南北1間以上の掘立柱建物跡を検出した。

左京第336次(B-1b地区)93年度調査

当調査地は南一条大路の北に接し、四町の東西を二分する中心付近に位置する。検出された遺構は、掘立柱建物跡・柵列などがある。主要な遺構はトレンチの西側に集中する。

調査地の西端では、梁間2間・桁行3間以上の東と南に廂を持つ東西棟建物跡を検出した。柱間寸法は梁間2.4m、桁行2.4m等間、身舎から廂の出は、2.7mである。この建物跡の北には、東西2間以上・南北2間以上の柵列と考えられる柱穴が検出されている。これらの遺構は重複関係から柵列が新しい。

左京第315次(B-2a地区)93年度調査

四町の宅地に関連する遺構として南一条大路の北側溝がある。

南一条大路北側溝 断面が逆台形を呈し、立ち上がりが急な東西方向の溝である。埋土中から長岡京期の須恵器、土師器、凝灰岩が出土している。幅約11m、深さ約40cmを測る。溝心の座標は $Y = -25,170.00$ で $X = -117,513.80$ である。

左京第361次(A-4地区)95年度調査(第2図)

堀1 四町の北半分(半町)を区画する施設である。一辺40~60cm程度の方形の掘形に直径約10cmの柱を埋めている。柱穴の深さは南で深く、約90cmを測る。北端では、後世の削平が激しく約30cmしか残っていない。それぞれの柱間は、北辺では約3m、西辺では約2.8~3.5mのものまでばらである。西南のコーナーでは、東三坊大路の路面上に約2mの間隔で2基の小さな穴が掘られており、大路の東側溝を渡す橋のような施設があり、出入口があった可能性が考えられる。

溝群13 四町の北半で検出した溝群である。これらの溝群は、堀1の南辺の柱掘形を切り込ん

でいることや、東三坊大路の路面上にも達しており、長岡京廃都後の畑の溝と考えられる。道路としての機能を失った東三坊大路の土地利用を示す、興味深い遺構である。

3. 十三町の調査の概要(第2図)

京都市埋蔵文化財研究所が西羽束師川の河川改修工事に伴い1985年におこなった左京第139次調査(河川改修第6次)と、当センターが1994年におこなった名神高速道路拡幅工事に伴う左京第330次(PA工区A-3地区)の調査がある。

左京第139次(河川改修第6次)85年度調査

南一条第二小路両側溝と宅地内の坊内溝、南一条大路両側溝と築地に作られたと考えられる暗渠溝が検出されている。また、宅地内では、1間×1間以上の掘立柱建物跡1棟が検出されている。

左京第330次(A-3地区)94年度調査

東三坊大路西側溝と南一条大路南北両側溝と坊内溝を検出している。各遺構の検出状況は以下のとおりである。

東三坊大路西側溝 検出幅1.3~1.8m、深さ20~30cmを測る。

南一条大路北側溝 検出幅1.1~1.55m、深さ45cmで、東三坊大路西側溝との関係は、ともに相手の溝を切り合う「十」字をなしていた。このことから、東三坊大路と南一条大路については、互いに優先関係がなかったことが確認できた。

南一条大路路面 南一条大路の南・北側溝で画された平坦面で、溝心々間で南北25.1m(約85尺)である。

左京第362・363次(A-6地区)95年度調査

検出した主な遺構としては、条坊では、東三坊大路と南一条第二小路をそれぞれ検出し、この2本の道路が交差する状況を確認した。また、宅地では十三町の約2/3を調査し、周辺での調査を含め、ほぼ宅地の様子をつかむことができた。

検出遺構(第2図)

条坊関連遺構

南一条第二小路北側溝(溝1) 調査地の北辺で部分的に検出した東西方向の溝である。断面形がU字形を呈し、幅約1.65m、深さ約0.35mを測る。この溝は、西から東へ排水している。溝内からは、緑釉の火舎をはじめ、各種の土器とともに瓢箪や桃の種子などが出土した。また、出土した土師器の中には「車」と墨書されたものもみられる。

南一条第二小路南側溝(溝2) 北側溝の約8m南で検出した北側溝に平行する溝である。調査地の西端から続くもので、東三坊大路の西側溝とT字に接続して終わっている。断面形は浅いU字形を呈し、幅約1.2m、深さ約0.25mを測る。北側溝と比べ、浅く細い溝となっている。これは、周辺の地形から北側溝が排水機能を多く負担したためと考えられる。

南一条第二小路路面 溝1および溝2に区画される東西道路路面である。両側溝の心々間の距離は約9m、路面幅は約8mを測る。東三坊大路より西では路面上に幅約1.5mの轍を検出している。

十三町宅地内北辺溝(溝3) 南一条第二小路南側溝の約3m南で検出した東西方向の溝である。調査地の西端から東三坊大路の西側溝のやや西までを検出した。断面形が浅いU字形を呈し、幅約0.8m、深さ約0.15mを測る。南側溝と比べ、さらに浅く狭い溝となっている。この溝は、後述の溝4や周辺での調査結果から、十三町の周囲を廻る様子を見せており、築地が設けられていたと考えられる。

十三町宅地内東辺溝(溝4) 遺構の遺存状態が悪く、全体の構造を確認できないが、東三坊大路西側溝から約3m西で検出した南北方向の溝である。溝3の状況によく似ており、これに連続する町内の溝と考えられる。溝3と同様の性格を持つ溝で、築地の築造をうかがわせる遺構である。

東三坊大路西側溝(溝5) 幅約1.5m、深さ約0.15mを測る断面が浅い皿状の溝である。調査地の北寄りでは、後世の削平を受けているため、北半では深さが数センチしか残っていない。溝の南端付近からは、瓦や土器類がまとまって出土した。

東三坊大路東側溝(溝6) 東三坊大路西側溝の約23m東で検出した南北溝である。北端の約18mは後世の削平によって検出できなかった。この溝は、四町の北半と南半で検出状況が変わっており、南半では幅も深さも大きく、幅約1.3m、深さ約0.5mを測り、断面が逆台形を呈しているのに対し、半町の地点より北では急に浅く幅も狭くなり、断面も皿状になる。北半では幅約0.9m、深さ約0.2mを測る。溝内からは須恵器、土師器とともに緑釉の火舎が出土した。

東三坊大路路面 溝5と溝6で画する南北道路面である。両側溝の心々間の距離は約24m余り、路面の幅は約23mを測る。西側溝付近では路面を改良するためと考えられる整地の跡が見られる。

十三町宅地内検出遺構

建物1 東西5間、南北2間の身舎を持ち、南・北・東の3面に廂を持つ東西棟である。身舎の柱間は約2.4m(8尺)の等間隔で、廂の柱間はこれより長く約2.7m(9尺)を測る。身舎に使用されていた柱は、直径約20cmと考えられる。十三町の中では、中心的な建物と考えられる。

建物2 建物1と同様、東西5間、南北2間の身舎を持ち、東・西と南に廂を持つ東西に長い掘立柱建物跡である。身舎の柱間は、建物1と同様に約2.4mの等間隔で、廂の柱間は約2.7mを測る。

建物3 東西5間、南北2間の身舎を持ち、南に廂を持つ東西棟である。身舎と廂の柱間はそれぞれ約2.4mと約2.7mを測る。この建物の身舎の中には、直径約0.9m、深さ約0.1mの丸底の土坑を6ヶ所で検出している。これらの土坑は、甕を据え付けた穴と考えられる。

建物4 東西2間、南北3間の身舎を持ち、北と西に廂を持つ南北棟である。身舎と廂の柱間は建物1と同様にそれぞれ約2.4mと約2.7mを測る。

建物5 東西2間、南北5間の身舎を持ち、東に廂を持つ南北棟である。身舎と廂の柱間は建物1と同様にそれぞれ約2.4mと約2.7mを測る。

建物6 東西3間以上、南北2間の身舎を持ち、南・北に廂を持つ東西棟である。身舎の柱間は約2.4mの等間隔で、廂の柱間は約2.7mを測る。この建物跡は、建物1～3・5と比べ柱の掘形も小さく柱の直径約15cmを測る。建物跡の東には、堀2が設けられており、東側の敷地に対して目隠しされている。

建物7 東西2間、南北5間の身舎を持ち、東と西に廂を持つ南北棟である。身舎の柱間は約2.4mの等間隔で、廂の柱間は東廂で3.0m(10尺)、西廂で約2.7mを測る。この建物の南には、塀3が設けられており南に対して目隠しされている。

建物8 東西5間、南北2間の身舎を持ち、北に廂を持つ東西棟である。身舎の柱間は約2.4mの等間隔で、廂の柱間は約3.0mを測る。この建物跡は、身舎の柱掘形の中に基礎固めのための礎板を残す。また、西側の妻部では1ヶ所の柱穴に柱の一部を残していた。この柱は、直径30cmを測る。この建物跡は、建物1～7が真北を向くのに対し、主軸が北から2.5°程度東に傾いている。

地鎮 十三町の西よりに建てられた建物8の地鎮跡である。地鎮は、建物8の身舎の部分で行われており、南柱列の中央部で検出した。15×17cmの小さな穴に、彩釉(二彩)の小壺を埋納したものである。小壺は、宝珠つまみをもつ蓋を持ち、中からは、ガラス小玉10点が収められていた。

建物9 建物8と柱筋をそろえ、東西5間、南北2間の身舎を持ち、南に廂を持つ東西棟である。身舎の柱間は約2.4mの等間隔で、廂の柱間は約3.3m(11尺)を測る。柱掘形内には、柱を抜き取った跡に石や、屋根に葺かれていたと思われる檜皮、塗壁の仕上げに使われていたと考えられる漆喰が投げ込まれていた。漆喰は、厚さ2～3mm程度で中には微細なスサが混入している。

井戸1 井籠組みの井戸である。上部の井戸枠は抜き取られていたが、5段の井戸枠が残っていた。井戸の掘形は、一辺約2.3mの隅丸の方形である。井戸枠は、内法の一辺が約1.1mで、長さ約1.2m、幅約25cm、厚さ約3cmの板をホゾ組みしている。各段は、一辺に各2ヶ所で上下にホゾを設けダボ接合している。井戸の底には拳大の河原石を厚さ30cm以上敷き詰め、石の間には木炭を詰めて浄水の機能を持たせている。井戸底からは、口縁部を打ち欠いた須恵器の壺が1点出土した。また、井戸板の外面には、「東北二」など組みの位置や段を示す墨書が見られ製作時の手順を知ることができるが、新規造営時のものか転用時のものかはわからない。さらに、この井戸側板には、直径3cmほどの刻印が数ヶ所に打たれており、材料の入手時のものか井戸製作時のものかと考えられる。

土坑1 井戸の東約5mで検出した東西約7.8m、南北約3.8m、深さ約30cmを測る長方形の土坑である。井戸との位置関係から、平城宮の造酒司井戸横の泉屋のような井戸に関連して利用された施設と考えられる。

土坑2 東西約3m、南北約9mを測る長方形の穴である。建物9が建てられる前に埋め立てられていたが、土坑の中には土師器・須恵器・瓦などが投棄されていた。

土坑3 建物7の東で検出した東西約2m、南北約7mを測る隅丸の長方形の穴である。出土遺物としては、土師器・須恵器の各種のほか、炭・焼土がある。

溝7 建物2・3の東と南に掘られた雨落ち溝である。柱からの距離約60cmを測り、軒の出が少なくなることがわかる。

溝8 建物8より古い時期に掘られたL字に曲がる溝である。ほぼ真北を向いており、建物1～7と同じ時期に作られたと考えられる。東側が後世の削平によって失われているが、溝群10のように何本もの溝が掘られていた可能性が考えられる。

溝群9 建物8に平行する2本の溝で、東西方向に掘削されている。両溝の間は約2.3mを測る。東から約2°南に傾いており、東側は後世の削平によって失われている。

溝群10 建物8の西で検出した、東西10m以上、南北約26mの範囲に掘られた溝群である。傾きは北から約4°東に傾いている。

溝群11 建物9に平行する2本の溝である。2本の溝の間は約3mを測り、東から約2°南に向いている。

溝群12 柵3の南で検出した3本の溝である。このうちの東側の2本は十三町の宅地を東西に二分する中心付近にある。

4. まとめ

今回の調査地は、南一条大路を介して大極殿院・内裏・推定東院跡とつながっている。調査は、2つの町にまたがる宅地を約15,000㎡おこなっている。そのため、1町内での建物などの配置について、ほぼ全体像をつかむことができた。周辺での調査も含め明らかになったことは以下のとおりである。

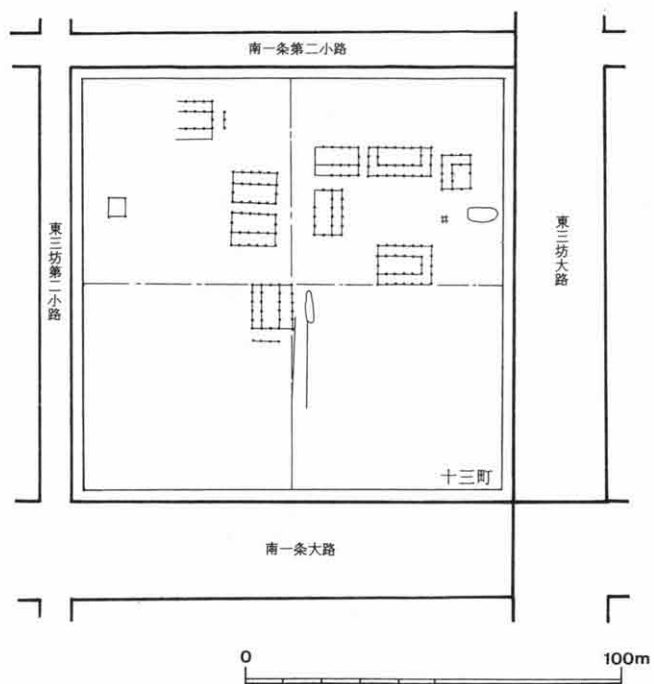
①左京南一条三坊十三町の宅地は、1町の区画で班給がなされていること。1町の宅地班給約14,756㎡(約4,470坪)は、『続日本紀』の規定によると三位以上の高位の貴族になされている。

②この1町では、北東の1/4に整然と建物が配置されていること。建物1の南の辺は1町敷地の南北を2分する線にほぼ一致しており、建物2・3の南の辺は同じく4分割する線にほぼ一致している。さらに、建物1・2の2棟は、身舎の中軸線が1町敷地の東西を四分割する線にほぼ一致している。

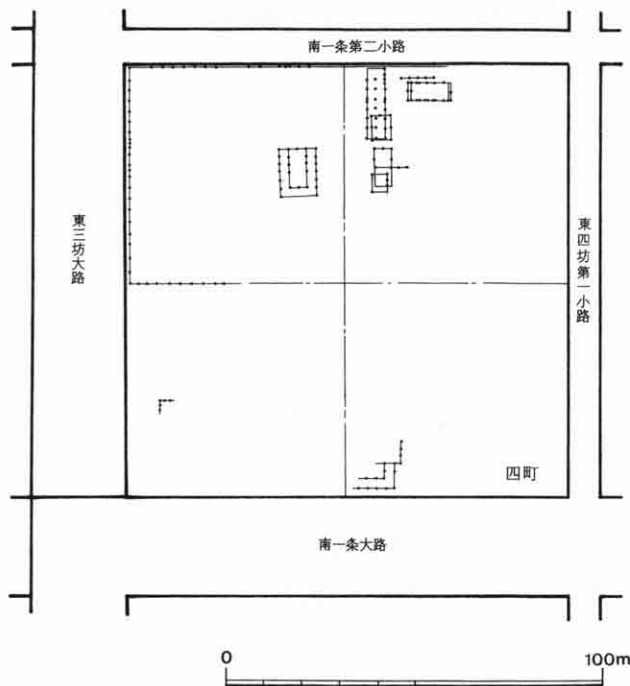
③東南の空間は空閑地(空き地)になっていること。北側を建物1、西側を建物7、東を東三坊大路を画す築地によって囲まれる地域は、建物や井戸などの構造物もなく、広場の様相を呈しており、前庭と考えられる。

④甕据え付け穴を伴った建物跡は、特殊な機能を持った建物と考えられること。建物3で検出した身舎の中の穴は、酒などを造った甕を据えた穴と考えられており、官衙・官衙関連遺跡・有力寺院の出先機関、または王臣家などの家政機関に伴うものと考えられている。

⑤今回検出した井戸は、横板井籠組



第4図 左京南一条三坊十三町の宅地



第5図 左京南一条四坊四町の宅地

の構造であること。長岡京では、長岡京期の井戸が報告されたもので110例以上あるが、横板井籠組の井戸は、今回で10例目になる。枳板に墨書された文字はよくその位置を示しており、製作時の仕組みの方法を理解させてくれるものである。また板に打ち込まれた刻印は、他にも類例があり、井戸造りの職人の手によるものかなど今後の検討課題である。

⑥四町では、北を占める1/2町の宅地が班給がされていること。1/2町の宅地は、五位以上の貴族の宅地と想定される。また、大路に門を開けられるのは、『延喜式』によると三位

以上と考えられている。

⑦今回の調査では、十三町の宅地の班給者を特定する史料は得られなかったこと。長岡京期の営まれた、延暦三年～十三年(784～794年)に三位以上の地位にいた貴族は、文献によると17名が明らかであるが、宅地の班給者の地位や、名前のわかるような史料は出土しなかった。

(とはら・かずと＝当センター調査第2課調査第4係主任調査員)

- 注1 久世康博・上村和直「長岡京左京一条三坊」(『昭和60年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所) 1988
- 注2 百瀬正恒・丸川義広・長宗繁一「長岡京左京二条三坊」(『昭和62年度京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所) 1991
- 注3 戸原和人他「名神高速道路関係遺跡発掘調査概要 (1)長岡京跡左京第241・267・268次 向日工区」(『京都府遺跡調査概報』第51冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1994
- 注4 戸原和人他「名神高速道路関係遺跡平成5年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第61冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1995
- 注5 「長岡京跡左京第329・330・331次-中央自動車道西宮線(名神高速道路)の拡張工事に伴う発掘調査-(京埋セ中間報告資料No.94-10)」(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1994
- 注6 「長岡京跡左京第333・334・336・337次-中央自動車道西宮線(名神高速道路)の拡張工事に伴う発掘調査-(京埋セ中間報告資料No.95-01)」(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1995

平成7年度発掘調査略報

7. 南谷古墳群

所在地 熊野郡久美浜町字壱分小字南谷
 調査期間 平成7年7月18日～同年10月20日
 調査面積 約750m²

はじめに 今回の調査は、「丹後国営農地開発事業」の女布団地造成工事に先立ち、農林水産省近畿農政局の依頼を受けて実施した。南谷古墳群は、久美浜町の東を北流する佐濃谷川流域を見下ろす丘陵上に営まれている。調査対象となった南谷1～4号墳のうち、当調査研究センターが調査を行った1・4号墳について報告する。なお、2・3号墳は久美浜町教育委員会が担当された。

調査概要

南谷1号墳 直径15.2mの円墳で、墳丘は盛り土と地山成形により築造されている。墳頂部で木棺を直葬した主体部1基を確認した。墓壙は、旧表土が東から西に向かって傾斜しているために、傾斜面の西半部に盛り土を行っていったん水平面をつくった後に、掘られている。検出された木棺は、いわゆる組合式木棺で、長さ4.2m・幅0.6mを測る。

棺内からは、鉄鏃・刀子・円形銅製品が出土した。円形銅製品は、その形状から鏡のミニチュアではないかと考えられる。須恵器は、墓壙埋土上面で出土した。器種は、高杯・高杯蓋・壺などがある。これらの須恵器は、TK47～MT15型式に属すると考えられる。

南谷4号墳 長径17.0m・短径14.4mを測る楕円形墳である。墳丘は、盛り土と地山成形により築造されている。墳頂部の中央で木棺を直葬した主体部1基を確認した。検出された木棺は、箱形木棺と考えられ、長さ3.7m・幅0.6mを測る。

出土遺物は、墓壙埋土上面で出土した土器のみで、木棺内からの出土遺物はなかった。土器には須恵器杯身・杯蓋、土師器片などがある。須恵器は、MT15型式に属すると考えられる。

まとめ 南谷古墳群は、須恵器の年代観から、古墳時代後期前半の古墳群であることが明らかになった。この時期は、丹後半島に横穴式石室が導入される時期に当たるが、南谷古墳群では木棺を直葬しており、佐濃谷川流域では、まだ横穴式石室が普遍化していなかったと考えられる。

(筒井崇史)



調査地位置図(1/50,000)

8. 竹 野 遺 跡

所在地 竹野郡丹後町竹野
 調査期間 平成7年7月17日～同年10月13日
 調査面積 約530m²

はじめに 今回の調査は、国道178号線丹後リゾート等関連道路改良事業に伴う発掘調査で、京都府土木建設部の依頼で実施した。

竹野遺跡は、竹野川河口右岸に位置する砂丘上に営まれた遺跡である。遺跡の広がりには東西約550～600m・南北約250～350mで、標高3～5mに立地する。この遺跡では、縄文時代から鎌倉時代までの遺物が出土しており、丹後地域では有数の複合遺跡として知られている。

この遺跡では、過去8回にわたって発掘調査が実施された。昭和42・44・45年に府立峰山高等学校史学部が分布調査を実施した。昭和57年には京都府教育委員会の指導で丹後町教育委員会が丹後町営ほ場整備に係わる試掘調査を行っている。また、昭和61年には農協関連施設の建設に係わる事前調査を丹後町教育委員会が実施し、さらに平成6・7年に丹後町教育委員会が『道の駅』などの建設に伴い竹野遺跡の中心部と思われる地区の調査を実施した。そして、平成6年度には国道178号線丹後リゾート等関連道路改良事業に伴い、当調査研究センターが今回の調査地の北東側で実施し、12～13世紀頃の集石土坑などを検出した。今回の調査は、昨年度の調査に引き続いて、昨年度の調査範囲の南西側で発掘調査を実施した。

調査概要 今回の調査は、3m×4mの試掘グリッド8か所と調査トレンチ6か所を設定し、発掘調査を実施した。試掘グリッドについては、遺構の有無を確認するために設定して掘削を行



調査地位置図(1/50,000)

い、遺構・遺物がないことを確認して埋め戻した。そして、遺構または遺物包含層を確認した6か所については、調査トレンチとして設定し、面的な調査を行った。調査地の現地形は、西から東に向かって傾斜していて、土層の堆積状況は砂丘特有の起伏が見られる。基本的な層序は、現代の盛り土または耕作土、黒褐色砂(弥生時代、古墳時代、鎌倉時代の遺物が混入する包含層)、黄灰色砂(遺構検出面・砂丘面)、礫堆積層である。

第1トレンチ 地表面から約50cmの深さで厚さ約30cmの遺物包含層に達し、その下で地山面

に掘り込まれた遺構面を検出した。検出遺構は、弥生時代前期と思われる小溝、土坑である。

第2トレンチ 現地表面から約1mの深さで厚さ約50cmの遺物包含層に達し、その下で遺構面を検出した。検出遺構は大溝、大土坑、小土坑などで、大土坑からは弥生時代前期の遠賀川系の櫛描き文のある壺と、注ぎ口がある小形の鉢が完形で出土した。また、大溝の底部とトレンチの南側2か所で人頭大の礫と拳大の礫の堆積を確認した。

第3トレンチ 現地表面から約1mの深さで厚さ約40cmの遺物包含層に達し、その下で幅約30cmの礫の堆積層を検出した。礫は5～20cmほどの大きさである。

第4トレンチ 第3トレンチと類似した遺物包含層と礫の堆積状況であった。

第5トレンチ 現地表面から約1.6mの深さまで現代の盛り土で、遺物包含層の幅は約30cm残っていた。その下で、拳大の礫の堆積層を1.5m以上堆積しているのを確認した。

第6トレンチ 現在の地表面から約1mで、近年の墓地の利用面を検出し、その下層に約30cmの遺物包含層、さらにその層の下から地山面を検出した。このトレンチでは礫の堆積層は確認できなかった。

まとめ 今回の調査では、弥生時代、古墳時代、鎌倉時代の遺物が混入する遺物包含層と弥生時代の遺構面を検出した。検出遺構は、大土坑、小土坑、大溝などで、出土遺物から弥生時代前期に属すると思われる。以前の調査で、弥生時代の集落の中心が第5トレンチの約70m北側の地点であったことが確認されている。今回の調査で、遺構を確認できたのは第1・第2のトレンチのみで、遺構が希薄なことと、弥生時代の遺構面が南側に下がっていくこと、そして、南側に向かう傾斜の変換点から礫の堆積を確認した。これらの点から、砂丘上につくられた遺跡の南の縁辺部を一部分ではあるが確認できた。竹野遺跡が位置する周辺の地形は、竹野川の氾濫などによって礫が運ばれ、堆積し、その後その上に海からの波などの流れによって砂が移動し砂丘がつくられたと考えられる。また、古代では、この周辺が潟湖であったといわれているので、砂丘の形成との関係が興味深い。

また、出土遺物の中に遠賀川系の壺などがあり、弥生時代における丹後半島の他地域との交流などを考える上で、良好な資料が得られた。

(村田和弘)

9. 島津遠所古墳群

所在地 竹野郡網野町島津
 調査期間 平成7年5月19日～同年8月10日
 調査面積 約600m²

はじめに 島津遠所古墳群は、離湖の東側、標高40m前後の丘陵上に展開する古墳群である。調査は、丹後国営農地開発事業の島津団地造成工事に先立って、農林水産省近畿農政局の依頼を受けて実施した。この古墳群の発掘調査は、この農地造成に伴って平成5年度から開始されており、今回が第3次の調査である。第1次調査は、当調査研究センターが17・18号墳と丘陵斜面の試掘を行い、前期前半に群形成が始まることを確認した。第2次調査は、網野町教育委員会によって6・7号墳が調査され、6号墳では枕石を持つ主体部が判明した。今回は、丘陵頂の16号墳と斜面の19～21号墳が対象となった。

調査概要

(1) 遠所古墳群

16号墳は、長辺24m・短辺20mの方墳で、約30cm程度の盛り土がある。墳頂で7基の土坑を検出し、木棺墓2基、土壙墓3基、被熱土坑2基を確認した。中心主体の木棺墓の規模は、墓壙の長さ4.8m・幅2.2mを測り、長さ4.2m・幅0.4mの箱形木棺を納める。主軸はほぼ東西で、西側小口には拳大の塊石が積まれている。また、棺側には柱穴があり、その周囲から小型丸底壺の土器片が出土した。その他の木棺墓・土壙墓では遺物は出土しなかった。被熱土坑は、これらの主体部を直交に切っており、共伴遺物はない。1基は長3.3m・幅0.6m、もう1基は長さ2.9m・幅0.7mを測る。いずれも断面がゆるい「U」字形を呈し、北側の1基は床面中央に排水溝がある。この床面と両立ち上がり面は幅0.5cmにわたって、全面が被熱酸化しており、強い火を受けたことがわかる。床面で、小指大の炭塊や骨片を検出している。



調査地位置図(1/25,000)

たことがわかる。床面で、小指大の炭塊や骨片を検出している。

19～21号墳は、斜面を階段状に削り、盛り土で整形した丹後通有の古墳である。規模約10mで1基の土壙墓を持つ。19号墳でベンガラ、21号墳で鉄刀1、鉄鏃6、刀子1が出土した。刀は鞘入りの佩用状態で副葬され、鉄鏃には柳葉形、圭頭形、重腸袂の無頸鏃などがある。

築造時期は、16号墳の小型丸底壺、21号墳の鉄製品などから4世紀～後半に押さえられる。

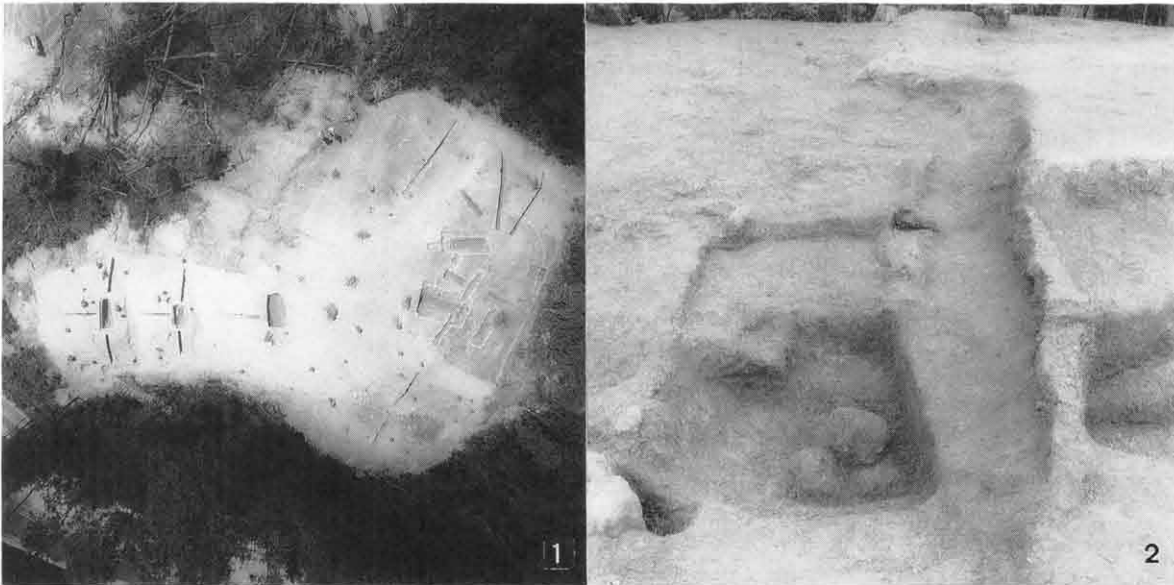


写真 1: 島津遠所古墳群全景 2: 被熱土坑全景

(2) 遠所A城跡

16号墳の調査では、遠所城の遺構も確認された。古墳の南側は厚さ1mに及ぶ盛り土がみられ、北側は急勾配で削り落としている。その結果、遠所16号墳は、長軸27m・短軸21mの平坦地に拡張された。南東側には一辺8mほどの方形の張り出し部(腰曲輪)を設け、3基の柱穴を確認した。また、頂部には、円形に、拳大の礫の集石が認められ、石つぶてとして使用された可能性がある。遠所城は、これ以外に3か所確認されているが、特に今回の調査地は、掛津側と離湖側に抜ける道の分岐点に当たる最高所に位置する点から、監視するための砦の機能が想定される。

まとめ 島津遠所古墳群は、古墳時代前期を通じて造られている。また、21号墳のように小型で、丘陵端に位置する古墳に鉄製品が認められたこともこの古墳群の特徴である。今後、調査が進めば、築造集団の階層分化の問題などが明らかとなるだろう。また、16号墳検出の被熱土坑は、時期が不明なもの、骨片が検出されているから墓の可能性もある。朝鮮半島では、原三国時代の下笠遺跡で土壙墓の被熱例が報告されており、墓か否かの検討も含めて、類例の増加を待ちたい。また、遠所城は丹後半島の類例から中世末期のものと思われる。中世の丹後半島は、守護代延永春信と石川直経の確執による永正の兵乱(第1次:1503~1507年、第2次:1516~1517年)があり、島津地区に集中する中世城館も、それに伴うものだろうか。遠所城の構造は、主に頂上付近だけに曲輪をつくるもので、加悦町谷垣城などと同様、古い要素が指摘できる。『丹後国御檀家帳』によれば、島津の高尾城(現島津城)に「石川中務」の名が見え、島津地区でも石川氏の進出に伴う争乱が想定できよう。徐々にではあるが、中世山城の調査例も蓄積されており、この時期の解明が期待される。

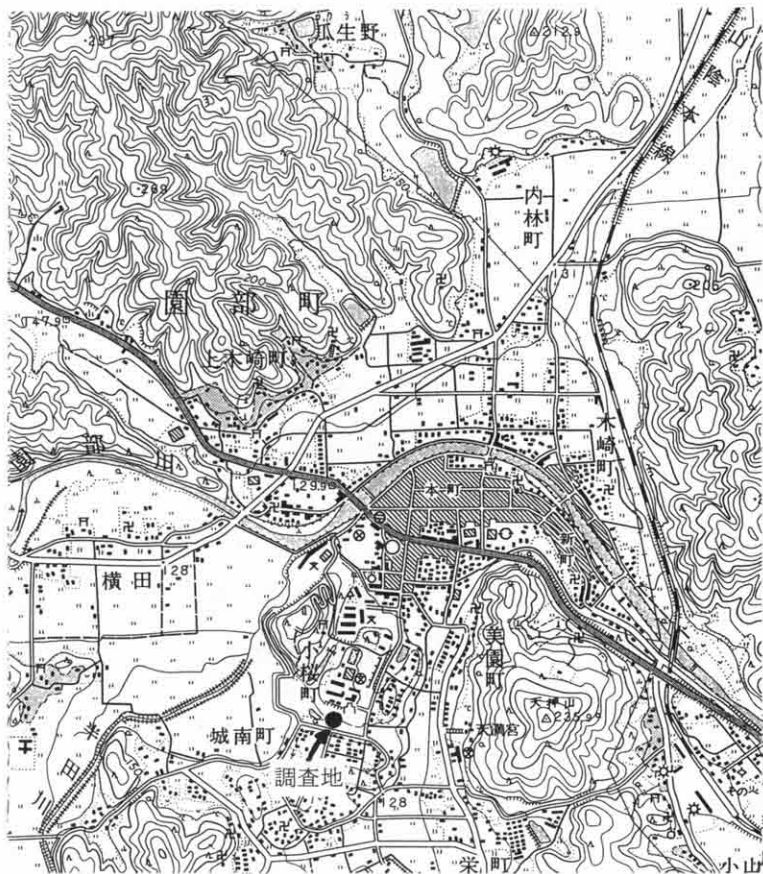
(河野一隆)

10. 園部城跡第4次

所在地 船井郡園部町小桜町97
 調査期間 平成7年6月26日～同年8月9日
 調査面積 約800m²

はじめに この調査は、京都府立園部高等学校の体育館建設工事に伴い、京都府教育庁管理部管理課の依頼を受けて実施した。近世園部城は、但馬国出石から当地に移ってきた小出吉親によって築城され、元和7(1621)年に完成している。城は、天守閣をもたない陣屋形式である。幕末までの約250年間は園部藩主小出氏の居城として栄える。最後の藩主小出英尚の時、明治の新政府から京都を守護することを理由に城の整備と増改築を許可される。園部高校に現存する巽櫓や櫓門はこの際のものである。しかし、明治4(1871)年の廃藩置県以降に城内の主な建物は解体され、明治20(1887)年に船井郡立高等小学校さらに大正15(1926)年の府立園部中学校(現園部高校)の建設で今日にいたる。

園部城跡の発掘調査は、当調査研究センターでは3度目である。昭和56年度調査では、石組の

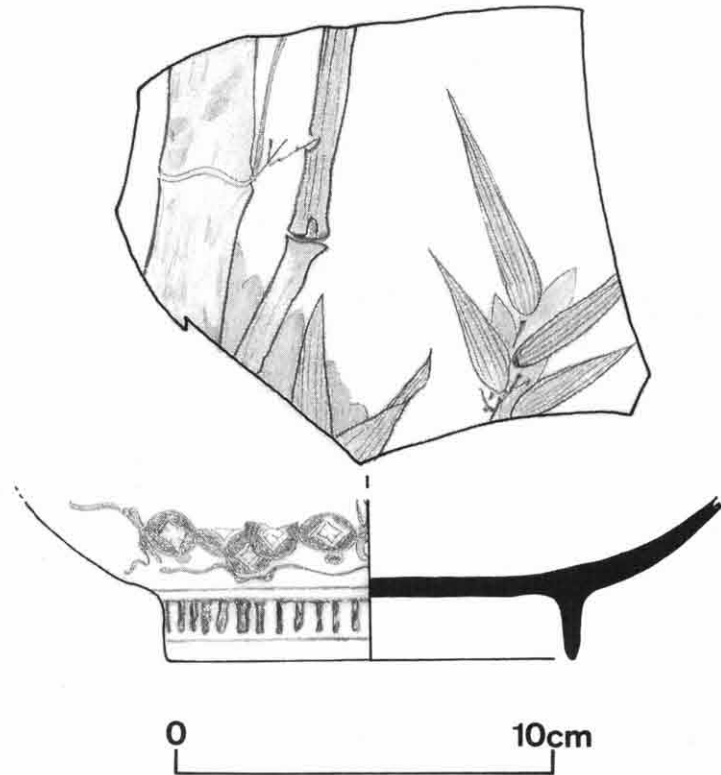


第1図 調査地位置図(1/25,000)

溝、瓦溜り、溝、塀跡などの遺構及びこれらに伴う多くの遺物(瓦・陶磁器・土師器・古銭など)が見つかった。さらに、古墳(方墳)2基及び埴輪なども検出されている。昭和62年度調査では、石組の溝及び瓦溜りなどの遺構に伴って、瓦や陶磁器類などの遺物が出土している。今回は、園部町教育委員会による過去1回の調査を加え、園部城跡第4次調査としている。

調査概要 調査地は園部高校のグラウンド東側である(第1図)。ここは園部城の復原絵図によると中堀(南蓮池)にあたっている。検出した遺

構は杭によって護岸された堀の一部である。検出は長さ約10m分、幅は20m以上を測る堀の深さを示す黒色粘土の堆積は、0.3～1mを測る。杭は、堀に並行して2列に打られている。なお、堀の南側の端は調査範囲内では検出されず、堀の全体幅は不明である。出土遺物はすべて堀の中からで、近世の園部域に関するものがほとんどである。瓦類(平・軒丸・軒平)、土師器皿、陶磁器類(古伊万里・瀬戸美濃・信楽・丹波・中国製白磁など)、硯の断片、下駄などがある。出土遺物のおよそ9



第2図 鍋島中型皿実測図

割を占めるのが陶磁器類である。磁器類で特筆すべき点は、鍋島の中型の皿である。鍋島は本来、鍋島藩から幕府や大名への贈答品で一般に出回る品ではない。外面の七宝繋ぎの意匠や内面の精密な竹の絵、高台の櫛目の染め付けなどにその特色がよくでている(第2図)。京の中心地以外ではほとんど出土例はなく、貴重なものである。また、中国製の白磁は、皿や小鉢を含め破片が数点ある。

近世より古い時代の遺物は、弥生時代の鉢形土器とみられるものが1点あるのみである。

まとめ 今回の調査では、近世園部域の堀跡の北側ラインを部分的に検出し、堀に堆積した黒色粘土層から多くの遺物が出土した。堀は、杭列が2段に並び、護岸されていた。規模は、幅約20m以上を測る。堀の構造は、比較的急な立ち上がりを見せているが、石垣などの構築物はなく、杭で護岸しただけの素堀りである。

出土遺物には弥生土器、瓦類、陶磁器類、土師器、硯、下駄などがある。ほとんど17～19世紀を中心とする近世園部域に関する資料である。鍋島の皿や中国製の白磁、さらに多くの産地を異にする陶磁器類から、当時の繁栄や他地域との幅広い交流が偲ばれる。

部分的ながら、近世園部域の中堀の構造を明らかにできたこと、園部域の繁栄と地域間交流を考えていく上で貴重な出土遺物を得たことが今回の主な成果といえる。

(黒坪一樹)

11. 宮川遺跡

所在地 亀岡市宮前町宮川
 調査期間 平成7年5月9日～同年8月11日
 調査面積 約1,600m²

はじめに 今回の発掘調査は、府営宮川地区ほ場整備事業に伴い、京都府農林水産部耕地課から依頼を受けて、当調査研究センターと京都府教育委員会が合同で実施した。宮川遺跡は、亀岡盆地から丹波篠山へ通じる篠山街道沿いにあり、本梅盆地の中央部に位置する。弥生時代から中世にいたる複合遺跡である。平成6年度の京都府教育委員会による試掘調査の結果を受けて、当調査研究センターでは遺跡の東部、中央部、西部の3地点で4か所のトレンチを設定し、調査を実施した。

調査概要 調査地周辺の地形は、西から東へ段丘状の緩斜面となっており、東部地点(第1トレンチ)は、本梅川の本流に最も近い低地である。この地点からは、主な遺構としては弥生時代後期～古墳時代初頭の竪穴式住居跡6棟や、中世の掘立柱建物跡群及び土器溜まりを検出した。竪穴式住居跡は、円形住居跡2棟、方形住居跡4棟からなり、過渡期の状況をよく示している。また、中世の遺構群からは、13～14世紀の瓦器、土師器、青磁、天目茶碗片が出土した。中央地点(第4トレンチ)では、弥生時代後期の竪穴式住居跡2棟、全壊した横穴式石室1基、中世の掘立柱建物跡などを検出した。竪穴式住居跡は、平面が八角形の形態のもの(府教委調査)と、方形のものからなる。八角形住居跡からは、在地の土器とともに近江系の土器が出土した。横穴式石室は、後世の開墾の際、地山の掘り込みに石材を落とし破壊されたもので、周辺から6世紀後半～末葉頃の須恵器が出土している。西部地点(第2・3トレンチ)は、中世山岳寺院としての伝統をもつ金輪寺の所在する半国山の裾部である。13～14世紀頃の掘立柱建物跡や流路を検出した。



調査地位置図(1/50,000)

まとめ 弥生集落は、河岸段丘状の微高地を中心に大きく広がることが判明した。弥生時代後期の八角形住居跡は、京都府内では初例で、その系譜が注目される。また、横穴式石室墳は、京都府教育委員会調査地点を含めて2基検出されており、これまで確認されていなかった古墳群の存在が明らかになった。中世の遺構は、調査地点全域に及んでいるが、これは文献などにみられる金輪寺の勢力拡張に伴う集落規模の拡大によるものであろう。

(野々口陽子)

12. 釜ヶ谷遺跡第3次

所在地 相模郡木津町大字木津小字釜ヶ谷
 調査期間 平成7年4月17日～8月21日
 調査面積 約1,800m²

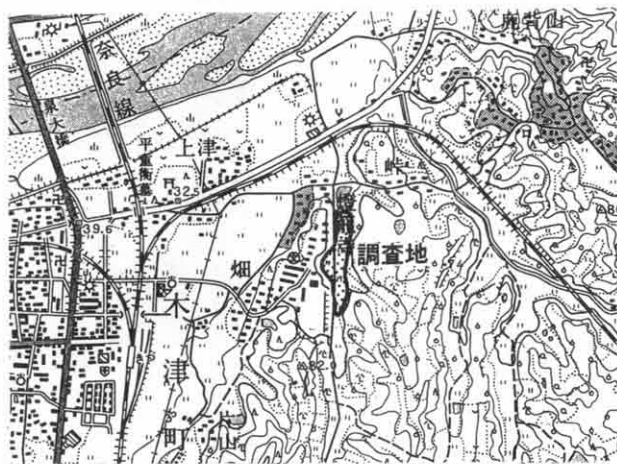
はじめに 釜ヶ谷遺跡は、木津町の東部に広がる丘陵地帯を、ほぼ南北に貫く細長い谷間に広がる。この谷の西側の丘陵は、木津地域はもとより、南山城一帯を望める場所で、弥生・古墳・奈良・中世などの各時代を通じてさまざまに利用されてきた。釜ヶ谷遺跡は、丘陵上の遺跡に関連する遺物が以前から多種にわたって出土している。昭和59年度の第1次調査では、弥生時代の石器、奈良時代の土馬・須恵器・土師器、鎌倉時代の瓦器、中・近世の陶磁器などを確認している。昨年度実施した調査では、奈良時代の河川跡から墨書人面土器・土馬などが出土した。本年度は、谷斜面で窯などの有無、道路などの遺構の有無、昨年度検出した奈良時代の河川跡などを調査目的とした。当調査研究センターでは、今回の調査も前2回の調査と同様、住宅・都市整備公団の依頼によって実施した。

調査概要 今回の調査では、主に奈良時代に流れていたと考えている流路跡(NR01)を検出し、多くの遺物が出土した。この流路では、全域で墨書人面土器が多く出土し、また一部で斎串・人形などがみられ、祭祀関連遺物が多いのが特徴である。

今回確認したNR01は、自然流路である。南北350mの調査地内で、5回ほど蛇行を繰り返しながら北流する。こうした状況から、奈良時代以前では、谷全域で安定した場所はほとんどなく、道路などの遺構は検出できなかった。

この谷は、中世頃から水田開発の進んだようすが土層断面の状況からうかがえる。土層は、中世以降安定した水平堆積が見られ、調査地のほぼ全域で、現在までの各時期の水田層を確認した。その一方で、今回の調査では中世以降の流路跡を検出できなかった。おそらく、河川管理が中世以降進み、水路の位置は今とほとんど変わらなかったと判断している。

遺物の大半は、NR01から出土しており多くは奈良時代の土馬、各種人面土器、ミニチュア竈など、祭祀関連遺物である。土馬はほとんどが小笠原氏のいうC類に属する(小笠原好彦「土馬考」『物質文化』第25号 1975年)。ミニチュア竈や人面土器などは完形



第1図 調査地位置図(1/25,000)

のものもあり、墨痕もよく残っているものもある。小型丸底壺の内部に漆膜の残っているものも出土した。斎串と人形は、調査地北側のNR01西岸付近から墨書土器類とともにまとめて出土しており、祭祀を行った場所から、ほとんど移動していないと考えている。人形は、全長120cmを測るかなり長いもので、頭部を北(下流方向)に向けて出土した。

この他、調査地南側では、須恵質や、赤橙色軟質の布目瓦片や素弁八弁蓮華文軒丸瓦が、NR01から出土している。また、軒丸瓦出土付近から、緑釉陶器小壺の口縁から肩にかけての破片も出土した。NR01埋土中からは、縄文土器の破片、弥生時代後期の壺、古墳時代中期の円筒埴輪片、奈良時代の須恵器(甕・杯・壺)、土師器(杯・甕)なども出土しており、流路の時期幅はかなり広がる可能性がある。

また、上層の包含層からは、奈良時代の須恵器・土師器、中世の瓦器椀、青磁片などが出土しているが、耕作の影響か小片が多い。

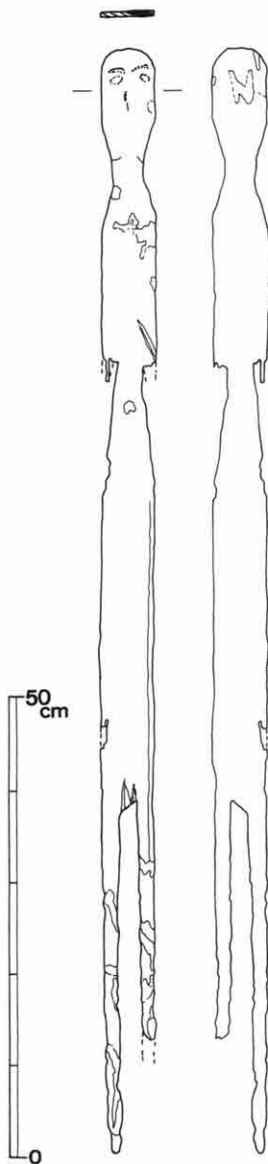
まとめ 今回の調査成果を簡単にまとめておきたい。

①奈良時代を主とした河川跡を調査地全域で確認した。この川の辺では、土馬や人面土器などを用いた祭祀が奈良時代に盛んに行われていたことが、出土した遺物の量で類推できる。

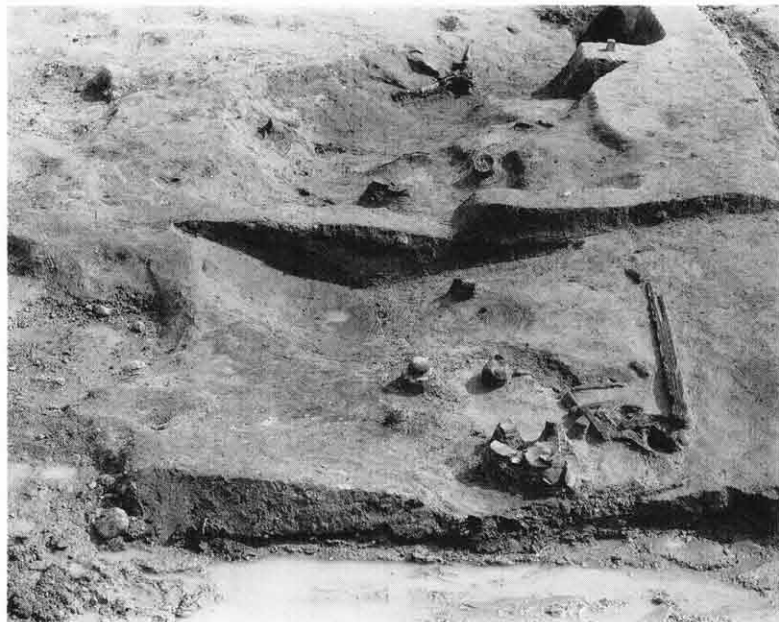
②素弁八弁蓮華文軒丸瓦のほか、多数の布目瓦片が出土したことは、この谷付近に寺などの施設が7世紀中頃にあった可能性を示している。

今後、この谷の特徴と周辺部の遺跡との関わりを考え、この地域の遺跡の実態がさらに明らかにされることを望む。

(有井広幸)



第2図 NR01出土人形実測図



人形、斎串、墨書人面土器出土状況(北から)

資料紹介

新出の朝鮮王朝磁器について

— 平安京跡左京一条二坊十四町例 —

小池 寛

1. はじめに

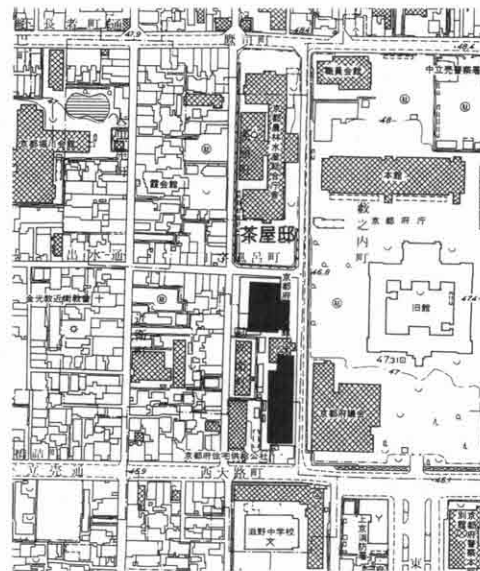
遺跡の発掘調査によって出土する外国製の陶磁器の研究は、出土量が多いこともあって中国製陶磁器類が、その中核をなしてきた。しかし、近年、京や鎌倉などの発掘調査が進展し、朝鮮王朝陶磁器やペルシャ・イギリス・ベトナム産の陶磁器の出土例が増加する傾向を見せている。おそらく、出土例増加傾向の背景には、発掘調査件数の増加に起因するところが多いと考えられるが、それにも増して、調査担当者が得られる情報量が増加し、各国産の陶磁器に対する認識が深められたことと密接に関連していると考えられる。そのことを念頭におけば、中国製陶磁器を除いた各国産の陶磁器の出土量の絶対数は、中国製品に比べて明らかに少ないが、現在、知り得た出土量を遥かに凌駕することは必至であり、必ずしも現在の出土量が、当時の交易の実態を如実に反映していることにはならず、むしろ、実態とはややかけ離れた数量であるという認識をもつ必要が生じてきている。

中国製陶磁器以外の製品の中で、特に、出土例が早くに認識され、近年、事例報告が増加する傾向にあるものが、ここに紹介する朝鮮王朝陶磁器である。

本稿は、以上の認識を下に、平安京跡左京一条二坊十四町から出土した資料の紹介を行うことを主目的とする。

2. 朝鮮王朝陶磁器の研究抄史

朝鮮王朝陶磁器を体系的に論じた堀内明博・稲垣正宏は、「遺跡出土の朝鮮王朝陶磁」と題し、15世紀～17世紀の粉青沙器、白磁、施釉陶器等の出土例を整理し、Ⅳ期区分を行った(『遺跡出土の朝鮮王朝陶磁—名碗と考古学—』茶道資料館 1990)。まず、Ⅰ期(15世紀初頭～16世紀初頭)は、粉青沙器の初源期とし、白磁の出土例が僅かであることを指摘した。Ⅱ期(16世紀前半～同後半)は、雑釉陶器の盛行期であるとともに、白磁・皿の内面には明瞭な段があり、砂



第1図 調査地位置図(1/5,000)

目が認められることを指摘した。Ⅲ期(16世紀後半～17世紀初頭)は、白磁の比率が高く、白磁・皿の大半に砂目が観察できるとし、特に、織豊政権の成立と文禄・慶長の役の画期との関連を論述している。最後に、Ⅳ期(17世紀前半以降)は、白磁・皿の内面の段が消失し、出土量も減少傾向であることを示唆した。

以上が、白磁・皿を中心とした堀内・稲垣研究の概要である。

一方、百瀬正恒は、平安京内での出土例を整理し、北限を寺之内通、南限を七条通、西限を大宮通、東限を東大路通とする範囲に10数例確認でき、南に下がって伏見城跡下層において出土していることを究明した(「平安京とその周辺における遺跡出土高麗・李朝陶磁器について」『貿易陶磁研究』第5号 日本貿易陶磁研究会 1985)。また、引原茂治は、百瀬が作成した分布図に新出資料を追加した(「平安京左京一条三坊二町出土の朝鮮王朝陶磁器」『京都府埋蔵文化財情報』第39号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1991)。その中で、今まであまり検討されなかった検出遺構と供伴遺物の概観を行い、一括資料群における時期認定を行なった。また、平安京内では、朝鮮王朝陶磁器が白磁を中心に全期を通じて出土している傾向について把握し、茶器としての注文製作の問題を論じた。

その他、凡世界的な範囲で陶磁器を取り扱った全集などに触れられているが、出土例を中心に考察を行い、なおかつ、平安京跡における代表的研究は、以上の三篇と言っても過言ではない。

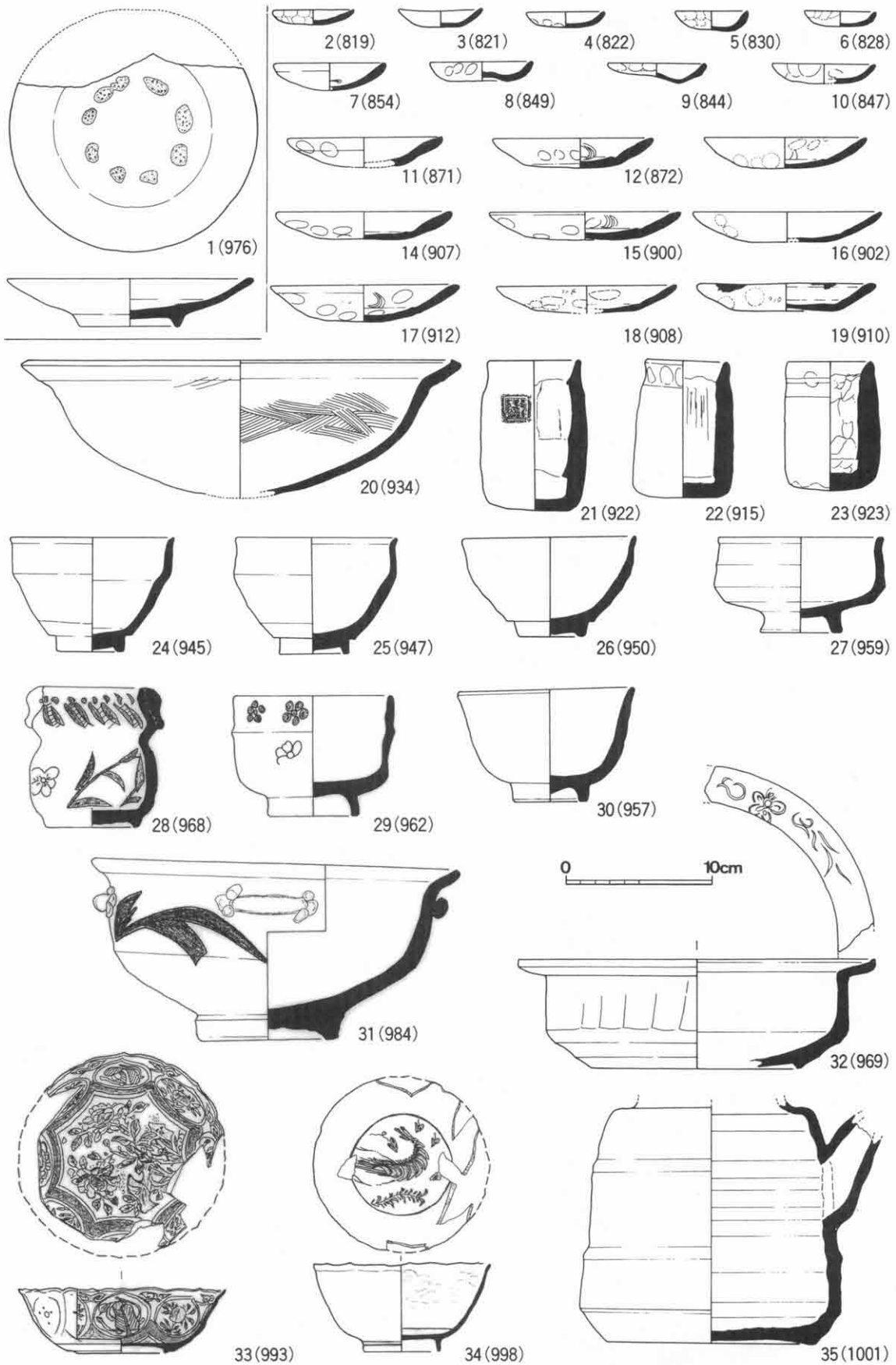
3. 朝鮮王朝白磁・皿が出土した環境

当該資料が出土した平安京跡左京一条二坊十四町は、平安時代～中世にかけて「左獄・囚獄司」の推定地であり、京都市上京区西洞院通下立売上ル西大路町にあたる(第1図)。

当該地の北隣接地には、茶屋四郎次郎邸がかつて所在したことが知られており、また、当該地は、京の富者である三勤兵衛の一人の居住を想起させる「勤兵衛町」の一部に該当しており、16世紀～17世紀にかけて周辺一帯が、比較的著名な有力者が多く居住していた空間と考えられる。

ここに紹介する朝鮮王朝白磁・皿は、平成4年～5年にかけての発掘調査で検出した資料であり、土坑42から出土した(「平安京跡左京一条二坊十四町発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第63冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1995)。土坑42は、南北6m・東西4m・最深0.6mを測る不整形な隅丸方形土坑であり、炭や焼土に混じり、多量の陶磁器・土師器・鉄釘が出土している(第2図)。おそらく、土層堆積状況から周辺で起った火災の焼け跡の処理が目的で穿たれた土坑と推定できる。

土坑からは、口径5～7.2cm、9.2～11cm、12.2～13cmの3群に分類できる土師皿が多量に出土しており、「ミなと藤左エ門」の刻印が押圧された焼塩壺なども見られる。また、陶器には、美濃・志野・唐津・黄瀬戸の各器種・各器形が多く見られ、細部においては、年代的な広がりか認定できるものの、一括資料として概ね182点を報告書において図示できた。これらの各器種の形態的特徴から概ね17世紀第一四半紀から第二四半紀前半に比定して大過ない状況である。なお、中国製陶磁器の出土も多く、正確な比率は算出していないが、朝鮮王朝白磁とともに注目される場所である。特に、第2図35の白磁・注口瓶の出土は希有な資料である。



第2図 朝鮮王朝磁器・皿及び共伴一括土器実測図
 (括弧内の付番は、『京都府遺跡調査概報』第63冊使用付番を表わす)

4. 朝鮮王朝白磁・皿の概観

第2図1及び下段の写真が朝鮮王朝白磁・皿である。口径16.5cm・器高3.2cm・高台径6.5cmを測る。残存率は70%前後であり、内面に9ヶ所の砂目が見られ、内面の段は比較的明瞭である。また、高台にも砂目が認められ、基本的な色調は、淡灰褐色である。

先述した堀内・稲垣論文のⅣ期分類を基本に考えると、まず、内面には、比較的明瞭な段が認められ、内面と高台部分に10ヶ所前後の砂目が見られる特徴から、概ねⅢ期に分類できる。平安京跡で同一形態の資料が出土している遺跡は、現時点では見られないが、白磁の皿は、左京一条三坊二町・左京五条二坊十六町、左京五条三坊十六町などから出土している。朝鮮王朝陶磁器・白磁の出土量は、比較的多いが、当該資料と同じ形態の特徴をもったものは、少量である。

今回、朝鮮王朝白磁・皿が出土した土坑42の供伴資料群は、焼塩壺の刻印と美濃天目碗の形態的特徴、黄瀬戸、志野焼の各器形から17世紀前半を中心とする時期に比定できることは既に述べたが、白磁・皿が示す年代観とは、僅かに相違する可能性も指摘できる。

最後に、土坑42から出土している陶磁器類の大半は国産品であり、その中に中国製陶磁器の出土も認められる。平安京跡左京一条三坊二町から出土している朝鮮王朝陶磁器は、数点が確認されており、土坑42の資料群の中にも図化した以外の白磁が含まれている可能性は残こされている。今後、国産陶磁器類と中国、朝鮮王朝陶磁器の比率が、データとしてまとめれば、注文製作などの具体的な問題を考える上で重要な基礎資料となる。

5. まとめにかえて

平安京跡から出土している朝鮮王朝陶磁器は、発掘調査の件数に較べて量的に少量である。一

方、中国製陶磁器類の出土は、膨大な量に達しており、当時の交易の一端を示唆していると解釈する見解が一般的である。例えば、粉青沙器・碗が注文製作であることを考えれば、日本に持ち運ばれた状況が異っており、その状況が出土量にも反映されていると解釈できる。今回は、出土事例の報告を行ったが、更に、基礎資料の蓄積が急がれる。また、土坑一括資料群においての個体識別は、極めて困難な状況であり、各地域内での分類作業が今以上に必要であることを痛感した次第である。

最後に、基礎的な事項から教示を頂いた堀内明博氏・引原茂治氏・伊野近富氏に、御礼を申し述べたい。

(こいけ・ひろし=当
センター調査第2課調査第2係調査員)



朝鮮王朝磁器・皿

府内遺跡紹介

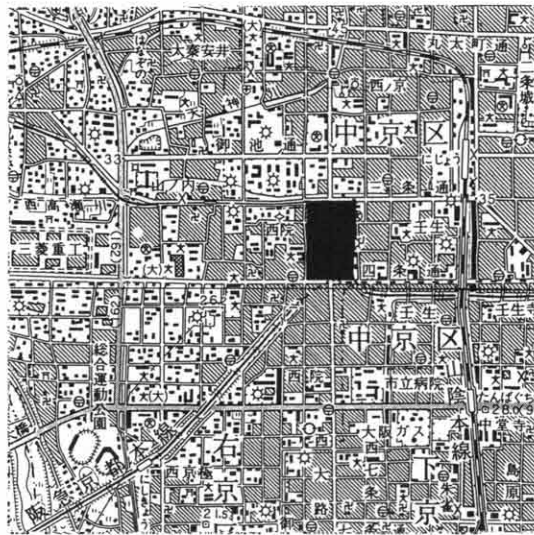
68. 淳和院跡

淳和院跡は、京都市右京区西院西淳和院町・西院東淳和院町・西院巽町・西院高山寺町の広大な地域に広がる遺跡である。淳和院は、平安時代初期の淳和天皇の離宮・後院として設けられた著名なところである。

淳和院がいつ頃創建されたかははっきりしない。『続日本後紀』天長10(833)年2月28日条に「皇帝於淳和院讓位于皇太子」と、唐突に出てくるのが初見である。淳和天皇とこの場所との関わりは、これ以前にもさかのぼる可能性はある。『京都市の地名』では、淳和院と南池院の場所とが同一であったと指摘している。まず、南池院であるが、ここで嵯峨朝に漢詩を作る会などが催されており、嵯峨天皇とともに皇太弟として淳和も出席している。その場所は、鎌倉時代の『続教訓抄』(文永7(1270)年)の記載に、南池院が「西ノ宮殿」の森の西四町のところにあるというのが手がかりとなる。「西ノ宮殿」は、源高明の邸宅のことで、これは「戎の森」とも呼ばれたとあり、現在の中京区壬生森町にあっている。したがって、南池院の場所は現在の淳和院跡とほぼ一致することになるのである。これが事実とすれば、淳和院はこの南池院と同一か、もしくは南池院が拡張されて完成した離宮ということになる。

淳和太上天皇は、讓位後の居所としてこの淳和院に移ることになる。淳和のこの行動は、嵯峨が讓位の時に冷然院に移ったことを先例としているが、これ以後太上天皇と新天皇は平安宮内に一緒に住むことはなくなる。

淳和院が後院となって以後、まず嵯峨太上天皇が天長10(833)年8月25日にここを訪れて文人に詩賦を賜わっている。嵯峨は、翌承和元(834)年正月4日にも訪れている。この時は、その前日に淳和が冷然院に嵯峨を訪れて新年を賀したことによる。また、承和元年は、史料上では、仁明天皇が淳和院に朝覲行幸した唯一の年に当たっている。前号の府内遺跡紹介で掲げた付表にあるように、仁明は実父の嵯峨のところへはたびたび朝覲行幸しているが、先帝の淳和のもとへはなぜかこの時しか史料には見えない。ただ、仁明は、変事があると、嵯峨院へと同じく淳和院にも使者を送り、舎人を派遣して起居を尋ねたりしてい



遺跡所在地(1/50,000)

付表 淳和院での出来事

番号	年紀	西暦	内容	出典
1	天長10.2.28	833	淳和、仁明へ譲位	続日本後紀
2	天長10.8.25	833	嵯峨、淳和以下と漢詩を作る	続日本後紀
3	承和元.正.2	834	仁明、朝覲行幸	続日本後紀
4	承和元.正.4	834	嵯峨、正月を賀す	続日本後紀
5	承和2.10.23	835	仁明、新銭を嵯峨・淳和に10万文奉る	続日本後紀
6	承和3.12.13	836	正子太后、皇子を生む	続日本後紀
7	承和4.正.4	837	正子太后所誕の皇子、薨去	続日本後紀
8	承和7.2.27	840	仁明、夜中雷雨により嵯峨・淳和の起居に祇候さす	続日本後紀
9	承和7.5.8	840	淳和、崩御	続日本後紀
10	承和9.8.13	842	承和の変により、廢太子送られる	続日本後紀
11	貞観2.5.11	860	正子太后、院裏にて齋会	三代実録
12	貞観12.8.5	870	新銭50貫文を宛てる	三代実録
13	貞観16.4.19	874	淳和院失火	三代実録
14	貞観16.4.27	874	正子太后、本院洞裏殿に還御	三代実録
15	元慶3.3.23	879	正子太后、崩御	三代実録
16	元慶5.12.11	881	恒貞親王の奏により淳和院に公卿別当を置く	三代実録
17	天徳3.12.23	959	淳和院、崇親院の女等に綿布を賜う	日本紀略

淳和院での出来事に限り、封戸などについては省略した。

き、廢太子の恒貞親王は、『続日本後紀』承和9年8月13日条に「遣参議正躬王、送廢太子於淳和院」とあるように、淳和院に送られてきているのである。その後、恒貞親王は母太后とともに薨去するまでこの淳和院で生活することになる。

その後、淳和院の院裏では、貞観2(860)年5月に正子太皇太后が齋会を催している。そのとき、『三代実録』の同年5月18日条によれば、5日間(円仁卒伝では6日間とする)にわたって行われ、主に法華経が講ぜられていることがわかる。この時には、天台座主の円仁をはじめ、諸寺の名僧が参加している。この齋会の終了後、特に円仁は留められて、正子太皇太后に菩薩戒を受け、良祚という法名を奉じている。

このように、淳和院は淳和の死去後もたびたび史料上に姿をみせてはいた。しかし、貞観16(874)年4月19日には火災に見舞われししまう。『三代実録』の同日条によれば、「丑刻、淳和院失火、飛燼轉行、飄洛禁中、(中略)是夜、淳和太皇太后御素車出宮、避火於松院、在院西南」とあって、夜半過ぎに出火したが、正子は淳和院の西南にあった松院へと避難している。正子は、8日後には本院洞裏殿に還御しているが、この火事の影響で、火穢を避ける意味から春の賀茂祭が中止になっている。この火事が正子にとっても相当深刻な影響を与えたことが想像される。さらに、貞観18(876)年には冷然院も焼亡してしまい、こういった後院の相次ぐ焼失によってついに正子が嵯峨院を大覚寺という寺院にするよう、清和天皇に奏請したことは、前号の府内遺跡紹介で述べたとおりである。

る。

こうして、淳和院は、後院として淳和太上天皇と正子皇太后の居所となり、淳和の死後まで続く。嵯峨院では、嵯峨の死後、嘉智子太皇太后は冷然院に移ったが、淳和院では淳和の死後も正子の居所として機能し続けたのである。

承和7(840)年に淳和太上天皇が死去し、承和9(842)年に嵯峨が相次いで亡くなると、いわゆる承和の変がおり、皇太子であった恒貞親王が廢されるに至る。このと



淳和院跡遺構検出状況

この火災の後、淳和院はまもなく復興されたとし、『三代実録』元慶3(879)年3月23日条の正子の崩伝によれば、再興後の淳和院は、尼を常住させた道場として用いられるようになったようである。実質的に寺院としての様相を強めてはいたが、恒貞親王の奏請によって院号はそのままとなり、また恒貞も引き続き居住していたようである。

その後、元慶5(881)年に至って、恒貞親王の奏請によって公卿別当が置かれ、大覚寺・檀林寺とともに嵯峨太上天皇陵・太皇太后陵・正子太后陵の三陵を検校させることとなった。この内、淳和院の公卿別当は、後には奨学院の別当を兼ねるようになり、村上源氏の嫡流がその地位を世襲するようになった。むろん、源氏長者の地位が足利氏・徳川氏へと移るにしたがい、名目だけではあったが、奨学院の別当の地位も移っていくことになった。

淳和院は、このころを最後に史料には見えなくなる。淳和院がいつ頃廃絶したかについては不明な点が多くわからないことが多い。一説には、戦国時代までにはなくなったという。

このように、かなり早くに廃絶して規模などがわからなくなっていた淳和院であるが、発掘調査や試掘調査が1927年以降、断続的に行われて、少しずつその様相がわかるようになってきた。特に、1992年に行われた調査では、淳和院の西南の隅部にあつて、ここから大規模な建物跡がみつかつて、淳和院関連の建物であることが明らかになった。

発掘調査では、大きく4期の建物跡が見つかつている。第1期は、9世紀の前半から中葉にかけての時期で、建物掘形の規模も大きく、近くには釘や飾り金具などの家具を作つたと見られる遺構・遺物も存在している。この時期の遺構は、淳和の譲位から貞観16年の焼亡に至る時期に当

たっており、淳和・正子・廃太子恒貞がこの後院で送った日々の生活の一端をうかがわせる資料となろう。ただ、遺構的には焼けた痕跡がなく、むしろ、洪水のような大量の水によって埋まったことがわかった。このことは、調査地が淳和院の西南の隅であったことと関連するようで、『三代実録』によれば、火は南西に向かって吹いた風によって広がったとあるので、このことによって焼亡の痕跡が見られないのかもしれない。

第2・3期は、建物掘形の規模が小さくなり、遺物も極端に少なくなっている。この時期はほぼ9世紀後半から10世紀にかけてで、淳和院の敷地の区画は踏襲されているので、淳和院が道場として用いられたとすころに当たっている。出土遺物が少ないため、詳しくはわからないが、この時期の建物跡は、道場と関連する可能性があろう。

第4期になると、建物跡の方位も従来とは異なっており、淳和院の性格が変質したことが推定できる。時期は、11・12世紀頃で、このころには淳和院の活動が衰退したのではなかろうか。

以上の発掘調査の成果から、9世紀が淳和院工房関係、9世紀後半から10世紀が道場関係、11・12世紀が淳和院の変質時期へと変遷したことが判明した。今後の調査の進展で、「コ」字形に建物を配置した院構造の本体部が見つかり、淳和院の全体像が明らかになることに期待したい。

なお、1993年の調査成果については、関西文化財調査会の吉川義彦氏から資料の提供を受けた。記して感謝したい。

(土橋 誠)

<参考文献>

西田直二郎「淳和院舊蹟」(『京都府史蹟調査會報告』第八冊 京都府) 1927

橋本義彦「後院について」『日本歴史』217 1966

所 京子「平安前期の冷然院と朱雀院—「御院」から「後院」へ—」『史窓』28 1970

瀧波貞子「葉子の変と上宮別宮の出現—後院の系譜(その1)—」、「奈良時代の上皇と「後院」—後院の系譜(その2)—」(同『日本古代宮廷社会の研究』所収 思文閣) 1991

『京都市の地名』平凡社 1979

『京都の歴史』第一巻 平安の新京 京都市 1970

『平安京提要』(財)古代學協會・古代學研究所 角川書店 1994

長岡京跡調査だより・55

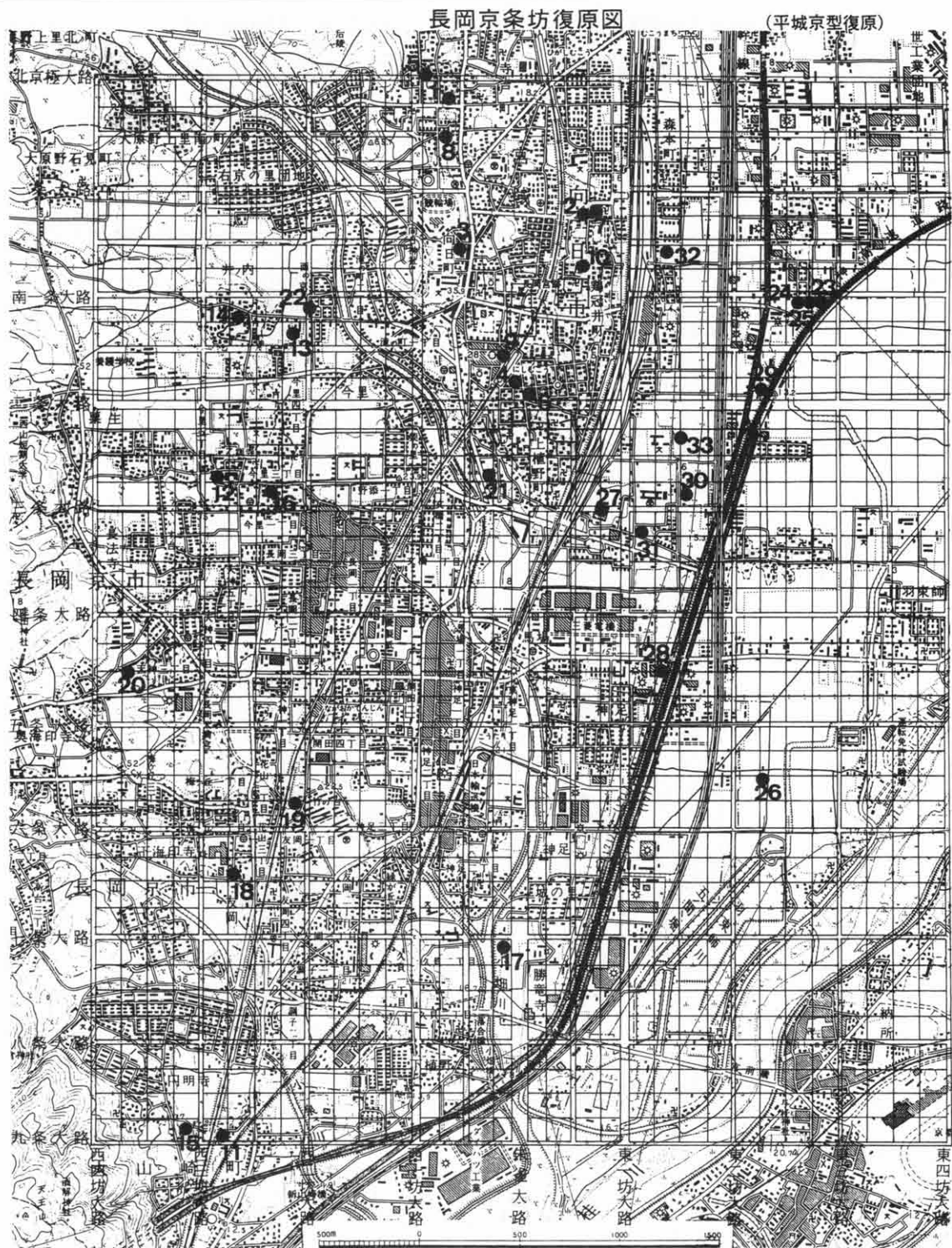
前回の「たより」以降の長岡京連絡協議会は、平成7年8月30日、9月27日、10月25日に開催された。報告のあった京内の発掘調査は、宮内10件、右京域12件、左京域11件であった。京外の8件を併せると41件となる(調査地一覧表と位置図を参照)。この内、主要な報告について調査成果を簡単に紹介する。

調査地一覧表

(1995年10月末現在)

番号	調査次数	地区名	調査地	調査機関	調査期間
1	宮内第305次	7ANBNC	向日市寺戸町中垣内3	(財)向日市埋文	6/26~7/20
2	宮内第306次	7ANDYK	向日市森本町山開3	(財)向日市埋文	7/12~7/26
3	宮内第307次	7ANCKM-3	向日市向日町北山1-1・1-2	(財)向日市埋文	7/28~8/23
4	宮内第308・309次	7ANFMK-5・6	向日市上植野町南開11-50・11-10	(財)向日市埋文	8/1~8/11
5	宮内第310次	7ANBNI	向日市寺戸町西垣内13-16	(財)向日市埋文	9/11~9/20
6	宮内第311次	7ANFMK-7	向日市上植野町南開8-27	(財)向日市埋文	9/18~9/20
7	宮内第312次	7ANDMD	向日市森本町前田14・22	(財)向日市埋文	10/2~10/20
8	宮内第313次	7ANBMC-4	向日市寺戸町南垣内5	(財)向日市埋文	10/3~1/25
9	宮内第314次	7ANFMK-8	向日市上植野町南開19-6	(財)向日市埋文	10/23~11/10
10	宮内第315次	7ANEOK-2	向日市鶏冠井町御屋敷19	(財)向日市埋文	10/23~11/21
11	右京第491次	7ANSTD	大山崎町円明寺佃12・15	大山崎町教委	3/14~8/4
12	右京第500次	7ANINC-6	長岡京市今里五丁目325-1他	(財)長岡京市埋文	6/26~9/1
13	右京第502次	7ANGSN-3	長岡京市井ノ内下印田24-1	(財)長岡京市埋文	7/5~8/5
14	右京第503次 稲荷塚古墳第3次	7ANGKS-3	長岡京市井ノ内小西40	長岡京市教委	7/21~8/18
15	右京第504次	7ANSTK-2	大山崎町円明寺大門脇2・3	大山崎町教委	7/18~8/25
16	右京第505次	7ANIHN	長岡京市今里二丁目19	(財)長岡京市埋文	7/27~9/11
17	右京第506次	7ANQMH	長岡京市勝竜寺巡り原16-2他	(財)長岡京市埋文	8/7~8/11
18	右京第507次	7ANOIR-3	長岡京市下海印寺伊賀寺26-1他	(財)長岡京市埋文	8/8~8/17
19	右京第508次	7ANNTB	長岡京市開田四丁目805-1	(財)長岡京市埋文	9/11~9/29
20	右京第509次	7ANPHO-4	長岡京市天神三丁目207-13他	(財)長岡京市埋文	9/25~10/5
21	右京第510次	7ANFSR-3	向日市上植野町下川原1-8	(財)向日市埋文	10/2~10/20
22	右京第511次	7ANGKN	長岡京市井ノ内地内	(財)京都府埋文	10/20~
23	左京第361次	7ANVKN-6	京都市南区久世東土川町金井田	(財)京都府埋文	4/10~2/末
24	左京第362次	7ANVKN-7	京都市南区久世東土川町金井田	(財)京都府埋文	4/10~2/末
25	左京第363次	7ANVKN-8	京都市南区久世東土川町金井田	(財)京都府埋文	4/10~2/末
26	左京第364次	7ANYNO-2	京都市伏見区淀樋爪町地内	(財)京都市埋文	4/1~11/30
27	左京第366次	7ANFIR-3, FDN-2, FKA, FHM-6	向日市上植野町池ノ尻、大門、釜桂、樋爪	(財)京都府埋文	5/22~1/
28	左京第369次	7ANLRB-4	長岡京市馬場六ノ坪12他	(財)長岡京市埋文	7/5~8/4
29	左京第370次	7ANEKZ-9	向日市鶏冠井町清水9	(財)向日市埋文	6/30~8/28
30	左京第371次	7ANFOT-10	向日市上植野町大田2-8	(財)向日市埋文	7/24~8/10
31	左京第372次	7ANFMG	向日市上植野町妙峠5-1	(財)向日市埋文	8/23~9/12
32	左京第373次	7ANEJS-13	向日市鶏冠井町十相4-1・4-2	(財)向日市埋文	8/24~9/22
33	立会左京第95099次	7ANFGB	向日市上植野町五ノ坪地内	(財)向日市埋文	10/11~10/19
34	修理式遺跡第4次	3NSBKR	向日市寺戸町蔵ノ内町1	(財)向日市埋文	8/8~10/3
35	中海道遺跡第32次	3NNANK-32	向日市物集女町ヲサン田6他	(財)向日市埋文	7/18~10/31

36	中海道遺跡第33次	3NNANK-33	向日市物集女町クズ子地内	(財)向日市埋文	9/11~9/30
37	中海道遺跡第34次	3NNANK-34	向日市物集女町御所海道地内	(財)京都府埋文	9/27~
38	中海道遺跡第35次	3NNANK-35	向日市物集女町中海道93	(財)向日市埋文	10/3~10/18
39	遺跡確認第21次	7XYS' HK	大山崎町大山崎傍示木9-1	大山崎町教委	7/14~8/11
40	山城国府跡第37次	7XYS' AS	大山崎町大山崎明島1	大山崎町教委	7/17~8/11
41	海印寺跡第3次・ 走田古墳群第1次	7CKPME-3	長岡京市奥海印寺明神前31	(財)長岡京市埋文	10/2~



▽番号は一覧表・本文()内と対応

調査地位置図

中海道遺跡第32次

(35)

(財) 向日市埋蔵文化財センター

弥生時代終末期から古墳時代初頭にかけての竪穴式住居跡、掘立柱建物跡などが検出された。中でも、掘立柱建物跡は、方形区画溝で囲まれ、身舎の四方に4間の柱列が取り付く建物跡である。身舎は、桁行(南北)2間(約5.5m)、梁間(東西)2間(約5m)で、廂を含めると桁行4間(約8.6m)、梁間4間(約8m)の規模をもつ建物跡となる。方形区画溝は、南北18m・東西15mの規模の方形にめぐる溝で、幅1.3~2.0m・深さ0.3~0.6mを測り、断面「U」字形を呈する。北辺中央部分は、掘り残されており、出入口として機能していたと考えられる。建物跡と溝は、有機的に関係して一体となった施設を構成していたものと見なすことができる。溝と柱穴内の出土遺物などから、この施設は庄内期のものと特定できる。この施設の性格については、首長の政治拠点の中核施設だと考えられる。さらに、非日常性が強い点と類例が示す属性との共通点から、「祭殿」と評価するのが今のところ妥当だと思われる。「祭殿」と評価した場合、祭殿の建築構造には、棟持柱を有する建物のタイプに加えて、こうしたタイプがある可能性を提示したことになる。

左京第361・362・
363次(23・24・25)

(財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター

調査地は、東三坊大路によって東西に左京南一条三坊十三町(新呼称左京二条三坊十五町)と同左京南一条四坊四町(新呼称左京二条四坊二町)に二分される約14,400㎡の区域である。

十三町の宅地の特徴としては、北東の1/4に整然と建物が配置され、北側、西側の建物、東側の東三坊大路を画す築地によって囲まれた東南の空間は、空閑地になり前庭をなすと考えられる点や、特殊な機能を持った建物と考えられる甕据え付け穴を伴った建物跡が検出されている点が挙げられる。また、西よりに建てられた建物の南柱列の中央部からは、彩釉(二彩)の小壺にガラス小玉を納めた地鎮の跡が検出されている。さらに、宅地の東端中央で検出された井戸は、横板井籠組み構造のもので、上部の井戸枠は抜き取られていたが、5段の井戸枠が残っていた。井戸の底には、拳大の河原石を敷き詰め、石の間には木炭を詰めて浄水の機能を持たせていた。長岡京で報告された110例の長岡京期の井戸の中で、横板井籠組みの井戸は、今回で10例目となり、井戸としては格の高い形式のものと考えられる。主な出土遺物としては、緑釉の火舎や「車」と墨書された土師器がみられる。十三町では、1町の区画で宅地の班給がなされているが、『続日本紀』の難波京宅地班給規定によれば、1町の宅地は三位以上の高位の貴族になされていることから、三位以上の貴族

の邸宅跡と考えられる。

四町では、北半分の半町の宅地を区画する塀が検出された。西南のコーナーでは、東三坊大路の東側溝を渡す橋のような施設があり、出入口があった可能性が考えられる。1町の1/2の宅地が班給されていることから、この宅地は五位以上の貴族の宅地と想定される。

(古瀬誠三)

<参考資料>

『中海道第32次調査現地説明会資料』 (財)向日市埋蔵文化財センター 1995
『長岡京跡左京第361・362・363次—中央自動車道西宮線(名神高速道路)の拡張工事に伴う発掘調査—現地説明会資料』 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1995



長岡京跡左京第361・362・363次発掘現場

センターの動向(7.8~10)

1. できごと

8. 1 釜ヶ谷遺跡(木津町)関係者説明会
 2 井上満郎理事、内里八丁遺跡(八幡市)現地視察
 3 上田正昭理事、宮川遺跡(亀岡市)現地視察
 堤 圭三郎理事、大俣城跡(舞鶴市)ほか現地視察
 4 宮川遺跡現地説明会
 8 左坂古墳群C支群(大宮町)関係者説明会、発掘調査終了(4.17~)
 9 園部城跡(園部町)関係者説明会
 10 島津遠所古墳群(網野町)関係者説明会
 11 島津遠所古墳群発掘調査終了(5.19~)、園部城跡発掘調査終了(6.26~)、宮川遺跡発掘調査終了(5.9~)、釜ヶ谷遺跡発掘調査終了(4.24~)
 10~11 全国埋蔵文化財法人連絡協議会研修会(於:高知市)岩松調査員、松尾・西村主事出席
 12 第74回埋蔵文化財セミナー開催(別掲)
 12~27 第13回小さな展覧会開催(別掲)
 17 興戸宮ノ前遺跡(田辺町)発掘調査開始
 18 植物園北遺跡発掘調査終了(4.19~)
 19~20 埋蔵文化財研究会(於:橿原考古学研究所)奥村課長補佐、野島・筒井・村田・奈良調査員出席
 21 柿添遺跡(精華町)発掘調査開始
 22 府政見学会参加者、当センター見学
 23 理事協議会(於:当センター)樋口隆康理事長、中澤圭二副理事長、木村英男常務理事、川上 貢、上田正昭、藤井 学、足利健亮、都出比呂志、井上満郎、藤田价浩、堤 圭三郎の各理事出席
 24 堤 圭三郎理事、奈具岡遺跡(弥栄町)ほか現地視察
 25 川上 貢理事、大俣城跡(舞鶴市)現地視察
 28 都出比呂志理事、奈具岡遺跡(弥栄町)現地視察
 30 大俣城跡現地説明会
 長岡京連絡協議会
 9. 2~3 京都府埋蔵文化財研究会(於:大山崎ふるさとセンター)
 7 藤井 学理事、大俣城跡現地視察
 内里八丁遺跡(八幡市)関係者説明会
 9 府立山城郷土資料館文化財講座(講師)竹原一彦主任調査員
 12 堤 圭三郎理事、弓田遺跡(木津町)ほか現地視察
 18 枯木谷遺跡(大宮町)発掘調査開始
 20 足利健亮理事、内里八丁遺跡ほか現地視察
 木村事務局長、柿添遺跡(精華町)ほか現地視察
 21 樋口隆康理事長、井上満郎理事、長岡京跡左京第361・362・363次調査(京都市南区)現地視察
 22 川上 貢理事、都出比呂志理事、長岡京跡左京第361・362・363次調査現地視察
 25 池下城支城跡(舞鶴市)発掘調査開始

- 26 木村事務局長、桑原口遺跡(宮津市)
現地視察
- 27 長岡京連絡協議会
中海道遺跡(向日市)発掘調査開始
- 28 竹野遺跡(丹後町)関係者説明会
10. 5 京都府教育関係法人研修会(於:府立
医大青蓮会館)
- 6 全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿
ブロック研修会(於:大阪市立中央青年
センター)安藤次長、小山調査第1課
長、平良・奥村課長補佐、増田主任調
査員、古瀬主査調査員、八木・野島調
査員出席
- 8 長岡京跡左京第361・362・363次調
査現地説明会
- 12 高橋美久二滋賀県立大学助教授、弓
田遺跡現地指導
- 13 竹野遺跡発掘調査終了(7.17~)
- 16~17 京都府公益法人連絡協議会(於:
南山城少年自然の家)木村事務局長、
園山次長、安田課長補佐出席
- 19 堀古墳(舞鶴市)発掘調査開始
上中大田遺跡(京北町)発掘調査開始
- 20 南谷古墳群(久美浜町)現地説明会、
発掘調査終了(7.17~)

長岡京跡左京第366次調査(向日市上
植野町)関係者説明会

長岡京跡右京第511次調査(長岡京市
井ノ内)発掘調査開始

23~28 全国埋蔵文化財法人連絡協議会
海外研修「韓国・歴史と文化を訪ね
て」、田中調査員参加

24~25 樋口隆康理事長、中澤圭二副理
事長、奈具岡遺跡現地視察

25 長岡京連絡協議会
弓田遺跡現地説明会

第7回中部地区文化振興会議(於:ル
ビノ京都堀川)安田課長補佐出席

26 井尻遺跡(宇治市)発掘調査開始

29 奈具岡遺跡現地説明会

2. 普及啓発事業

8.12~27 第74回小さな展覧会(於:向日市
文化資料館)

12 第74回埋蔵文化財セミナー(於:向日
市民会館)「飛鳥時代の古墳を考える」、
加藤晴彦「加悦町・滝岡田古墳の発掘
調査について」、奥村清一郎「綾部市・
山尾古墳の発掘調査について」

(安藤信策)

府内報告書等刊行状況一覧 (93.11~94.10)

発掘調査報告書

- 『埋蔵文化財発掘調査概報』 1995 京都府教育委員会 1995.3
- 『京都市内遺跡発掘調査概報』 平成6年度 京都市文化観光局 1995.3
- 『京都市内遺跡立会調査概報』 平成6年度 同上 1995.3
- 『京都市内遺跡試掘調査概報』 平成6年度 同上 1995.3
- 『平成2年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1994.12
- 『平成3年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 同上 1995.3
- 『平成4年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 同上 1995.9
- 『向日市埋蔵文化財調査報告書』 第39集 (財)向日市埋蔵文化財センター・向日市教育委員会 1995.3
- 『向日市埋蔵文化財調査報告書』 第40集 同上 1995.3
- 『長岡京市文化財調査報告書』 第33冊 長岡京市教育委員会 1995.3
- 『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』 第27集 宇治市教育委員会 1995.3
- 『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』 第29集 同上 1995.3
- 『城陽市埋蔵文化財調査報告書』 第26集 城陽市教育委員会 1994.12
- 『城陽市埋蔵文化財調査報告書』 第27集 同上 1995.3
- 『城陽市埋蔵文化財調査報告書』 第28集 同上 1995.3
- 『城陽市埋蔵文化財調査報告書』 第29集 同上 1995.3
- 『八幡市埋蔵文化財調査概報』 第17集 八幡市教育委員会 1995.3
- 『八幡市埋蔵文化財調査概報』 第18集 同上 1995.3
- 『田辺町埋蔵文化財調査報告書』 第17集 田辺町教育委員会 1994.3
- 『田辺町埋蔵文化財調査報告書』 第20集 同上 1995.3
- 『加茂町文化財調査報告』 第4集 加茂町教育委員会 1987.3
- 『加茂町文化財調査報告』 第6集 同上 1988.3
- 『加茂町文化財調査報告』 第7集 同上 1989.3
- 『加茂町文化財調査報告』 第8集 同上 1990.3
- 『加茂町文化財調査報告』 第9集 同上 1991.3
- 『加茂町文化財調査報告』 第12集 同上 1995.3
- 『加茂駅周辺特定土地画整理事業に伴う文化財発掘調査概報』 加茂町文化財発掘調査委員会 1995.3
- 『京都府網野町文化財調査報告』 第10集 網野町教育委員会 1995.3
- 『京都府丹後町文化財調査報告』 第11集 丹後町教育委員会 1995.3
- 『京都府峰山町埋蔵文化財調査報告書』 第17集 峰山町教育委員会 1995.3
- 『加悦町文化財調査報告』 第22集 加悦町教育委員会 1995.3
- 『加悦町文化財調査報告』 第23集 同上 1995.3
- 『高内鎌谷遺跡発掘調査概報』 夜久野町教育委員会 1994.3
- 『福知山市文化財調査報告』 第28集 福知山市教育委員会 1995.3
- 『福知山市文化財調査報告』 第29集 同上 1995.3
- 『福知山市文化財調査報告』 第30集 同上 1995.5
- 『綾部市文化財調査報告』 第20集 綾部市教育委員会 1994.3
- 『綾部市文化財調査報告』 第21集 同上 1995.3

『綾部市文化財調査報告』 第22集 同上 1995.3

『京都府京北町埋蔵文化財調査報告書』 第5集 京北町教育委員会 1995.3

当調査研究センター現地説明会・中間報告資料

現地説明会

「ニゴレ遺跡」 (京埋セ現地説明会資料 No.94-14) 1994.12.8

「内里八丁遺跡」 (同 No.94-15) 1994.12.21

「今林2号墳・今林遺跡」 (同 No.94-16) 1994.12.20

「長岡京跡左京第333・334・336・337次」 (同 No.95-01) 1995.2.6

「北稲遺跡」 (同 No.95-03) 1995.2.21

「左坂古墳群第4次」 (同 No.95-03) 1995.3.3

「植物園北遺跡第16次」 (同 No.95-04) 1995.7.20

「宮川遺跡」 (同 No.95-05) 1995.8.4

「大俣城跡」 (同 No.95-06) 1995.8.30

「長岡京跡左京第361・362・363次」 (同 No.95-07) 1995.10.8

「南谷古墳群」 (同 No.95-08) 1995.10.20

「弓田遺跡第2次」 (同 No.95-09) 1995.10.25

「奈具谷遺跡・奈具岡遺跡・奈具岡北古墳群」 (同 No.95-10) 1995.10.29

中間報告

「引地城跡」 (京埋セ中間報告資料 No.94-14) 1994.12.2

「弓田遺跡」 (同 No.94-15) 1994.12.19

「長岡京跡左京第353次」 (同 No.95-01) 1995.2.24

「滝谷遺跡・上野古墳群」 (同 No.95-02) 1995.2.23

「亀山城跡第4次」 (同 No.95-03) 1995.2.27

「黒部遺跡」 (同 No.95-04) 1995.6.28

「左坂墳墓群」 (同 No.95-05) 1995.7.7

「長岡京跡右京第498次」 (同 No.95-06) 1995.7.25

「釜ヶ谷遺跡第3次」 (同 No.95-07) 1995.8.1

「左坂古墳群C支群」 (同 No.95-08) 1995.8.8

「島津遠所古墳群」 (同 No.95-09) 1995.8.10

「園部城跡第4次」 (同 No.95-10) 1995.8.9

「内里八丁遺跡第8次」 (同 No.95-11) 1995.9.4

「竹野遺跡第9次」 (同 No.95-12) 1995.9.28

「長岡京跡左京第366次」 (同 No.95-13) 1995.10.20

府内現地説明会資料

「長岡京跡左京第341次」 (財)向日市埋蔵文化財センター 1994.11.12

「新蔵古墳」 峰山町教育委員会 1994.11.18

「白川金色院跡」 宇治市教育委員会 1994.11.26

「平成6年度恭仁京跡発掘調査」 京都府教育委員会 1995.1.29

「今里車塚古墳8次調査」 (財)長岡京市埋蔵文化財センター 1995.3.11

「滝岡田古墳」 加悦町教育委員会 1995.3.17

- 「長岡京跡左京第356次発掘調査」 (財)向日市埋蔵文化財センター 1995.6.3
「竹野遺跡」 丹後町教育委員会 1995.6.30
「宮ノ口遺跡」 京都府京都文化博物館 1995.7.1
「長岡京跡右京第494次発掘調査」 (財)長岡京市埋蔵文化財センター 1995.7.15
「赤ヶ山古墳」 福知山市教育委員会 1995.8.3
「井ノ内稲荷塚古墳第3次調査」 長岡京市教育委員会 1995.8.12
「北白川廃寺塔跡」 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1995.9.2
「黄金塚2号墳」 黄金塚2号墳発掘調査団 1995.9.16
「中海道遺跡第32次調査」 (財)向日市埋蔵文化財センター 1995.9.23

その他の雑誌・報告・論文等

- 『京都府埋蔵文化財情報』 第54号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1994.12
『京都府埋蔵文化財情報』 第55号 同上 1995.3
『京都府埋蔵文化財情報』 第56号 同上 1995.6
『京都府埋蔵文化財情報』 第57号 同上 1995.9
『京都府遺跡調査概報』 第60冊 同上 1994.3
『京都府遺跡調査概報』 第61冊 同上 1995.3
『京都府遺跡調査概報』 第62冊 同上 1995.3
『京都府遺跡調査概報』 第63冊 同上 1995.3
『京都府遺跡調査概報』 第64冊 同上 1995.3
『京都府遺跡調査概報』 第65冊 同上 1995.3
『京都府遺跡調査概報』 第66冊 同上 1995.3
『恭仁京 発掘調査20年の成果から』 京都府教育委員会 1995.3
『教王護国寺蓮華門北大門・慶賀門・北総門修理工事報告書』 同上 1995.3
『京都市文化財だより』 第22号 京都市文化観光局 1994.10
『京都市の文化財』 第12集 同上 1994.11
『京都市文化財ボックス』 第10集 同上 1994.12
『京都市文化財だより』 第23・24号 京都市文化市民局 1995.6~1995.10
『平安建都1200年記念 シンポジウム平安京』 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1994.11
『研究紀要』 第1号 同上 1995.1
『平成5年度 京都国立博物館年報』 京都国立博物館 1995.3
『京都文化博物館研究紀要 朱雀』 第6集 京都府京都文化博物館 1993.12
『京都文化博物館研究報告』 第10集 同上 1993.3
『特別展 マヤ』 同上 1993.4
『大唐長安展』 同上 1994.9
『資料館紀要』 第23号 京都府立総合資料館 1995.3
『京都府資料目録追録』 No.11 同上 1995.10
『総合資料館だより』 No.102~105 同上 1995.1~1995.10
『平成5年度 京都市歴史資料館年報』 京都市歴史資料館 1995.3
『平成6年度 京都市歴史資料館年報』 同上 1995.3
『京都市歴史資料館紀要』 第12号 同上 1995.3
『京都市の文化財』 第7回 同上 1995.6
『八坂神社の古文書』 同上 1995.10

- 『京都市史編さん通信』 No.256～260 同上 1994.11～1995.3
『京都市考古資料館年報 平成元・2年度』 京都市考古資料館 1991.3
『京都市考古資料館年報 平成3・4年度』 同上 1993.3
『京都市考古資料館文化財講座資料』 第76・77回 同上 1994.9～1994.10
『リーフレット京都』 No.56～70 同上 1993.10～1994.10
『同志社大学考古学シリーズVI』 同志社大学考古学シリーズ刊行会 1994.10
『同志社大学文学部考古学調査報告』 第8冊 同志社大学文学部文化学科内考古学研究室 1994.8
『同志社大学文学部考古学調査報告』 第9冊 同上 1994.10
『第45とれんち』 京都大学考古学研究会 1994.11
『京都橘女子大学研究紀要』 第21号 京都橘女子大学研究紀要編集委員会 1994.12
『琵琶湖周辺の6世紀を探る』 京都大学文学部考古学研究室 1995.3
『京都大学構内遺跡調査研究年報』 1992年度 京都大学埋蔵文化財研究センター 1995.3
『佛教大学総合研究所紀要』 第2号 佛教大学総合研究所 1995.3
『佛教大学総合研究所報』 第7・8号 同上 1994.11～1995.5
『学芸員 NEWS LETTER』 第7号 立命館大学文学部 1995.3
『京都府国際化プラン』 京都府知事公室国際課 1995.4
『会報』 第78・79号 (財)京都古文化保存協会 1995.1～1995.10
『古代文化』 第46巻11・12号、第47巻第1～10号 (財)古代学協会 1994.11～1995.10
『古代学研究所研究紀要』 第4輯 同上 1994.12
『古代学研究所研究報告』 第4輯 同上 1994.12
『土車』 第71～74号 同上 1994.7～1995.4
『(財)平安建都1200年記念協会ニュース』 第37号 (財)平安建都1200年記念協会 1995.3
『志くれてい』 第50～54号 (財)冷泉家時雨亭文庫 1994.10～1995.10
『青龍三年銘鏡とその周辺』 京都府立丹後郷土資料館 1995.4
『特別陳列図録』 37 同上 1995.7
『日本海の裂き織り』 同上 1995.10
『丹後郷土資料館だより』 同上 第29号 1995.3
『青龍三年鏡シンポジウム』 弥栄町役場 1995.2
『第2回加悦町文化財シンポジウム』 加悦町教育委員会 1994.3
『加悦町の文化財』 第4・5号 同上 1995.3～1995.5
『市史編さんだより』 第8号 宮津市教育委員会 1994.10
『舞鶴市史・年表編』 舞鶴市役所 1994.11
『平成6年度企画展』 三和町郷土資料館 1994.11
『三和町史』 上巻 三和町 1995.3
『史談ふくち山』 第502～507号 福知山史談会 1994.1～1994.6
『第3回特別展示 ヒミコの箱』 綾部市資料館 1995.7
『綾部の文化財』 第40・41号 綾部の文化財を守る会 1995.4～1995.9
『口丹波史料九 形原記』 卷二 口丹波史談会 1994.12
『新修 亀岡市史 本文編』 第一巻 京都府亀岡市 1995.1
『亀岡市文化資料館報』 第3号 亀岡市文化資料館 1994.9
『第10回特別展示図録』 同上 1994.10
『第19回企画展』 同上 1995.4
『第20回企画展』 同上 1995.7

- 『(財)向日市埋蔵文化財センター年報 都城6』 (財)向日市埋蔵文化財センター 1994.12
- 『特別展 椿尽くし』 向日市立図書館 1995.1
- 『向日市文化資料館報』 第9号 向日市文化資料館 1994.3
- 『向日市文化資料館報』 第10号 同上 1995.3
- 『企画展 にしのおかのほとけ』 同上 1994.11
- 『特別展示図録』 同上 1995.10
- 『向日市古文書調査報告書』 第四集 同上 1995.3
- 『Nagaokakyo Culture&Nature』 長岡京市教育委員会
- 『長岡京市史編さんだより』 長岡京市 1995.3
- 『文化財宇治』 94 宇治市教育委員会 1995.3
- 『宇治文庫6 宇治をめぐる人々』 宇治市歴史資料館 1995.3
- 『平成5年度 宇治市歴史資料館年報』 同上 1995.3
- 『宇治橋 その歴史と美と』 同上 1995.9
- 『文愛協会報』 第39号 (財)宇治市文化財愛護協会 1995.7
- 『郷土史双書 やわたの道しるべ』 八幡市郷土史会 1982.10
- 『八幡市 文化財分布図』 同上 1986.3
- 『八幡市の教育 平成6年度版』 同上
- 『山城郷土資料館報』 第12号 京都府立山城郷土資料館 1994.5
- 『企画展資料』 19 同上 1995.4
- 『企画展資料』 21 同上 1995.9
- 『展示図録』 15 同上 1995.10
- 『山城郷土資料館だより』 第23号 同上 1995.10
- 『山城郷土資料館友の会ニュース』 第21号 同上 1995.7
- 『京都考古』 第78号 京都考古刊行会 1995.8
- 『加茂町史』 第三巻 加茂町 1994.3
- 『紫陽花』 第18~21号 同上 1994.12~1995.8
- 『波布理曾能』 第12号 精華町の自然と歴史を学ぶ会 1995.4
- 『精華町の郷土誌』 同上 1995.3
- 『古代の土器3・都城の土器集成Ⅲ』 古代の土器研究会 1994.9
- 『第3回シンポジウム』 同上 1994.9
- 『史迹と美術』 第649~658号 史迹美術同致会 1994.11~1995.9
- 『ミヤコを掘る』 (株)淡交社 1995.2
- 『京都国際セミナー「安定社会の総合研究」第5回セミナー』 (財)京都ゼミナールハウス 1995.3
- 『泉屋博古館紀要』 第十一巻 (財)泉屋博古館 1995.5
- 『北稜に光を観る』 玄武の会 1995.4
- 『北野天神』 京都北野天満宮
- 『平安京研究資料集成』 1 柳原書店 1994.6
- 『京都国立博物館蔵 須恵器集成Ⅰ』 便利堂 1994.3
- 『京都工芸大学博士学位論文』 橋本清一 1995.3

受贈図書一覧 (7.8~10)

<p>苦小牧市埋蔵文化財調査センター</p> <p>(財)山形県埋蔵文化財センター</p> <p>(財)郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団</p> <p>(財)栃木県文化振興事業団</p> <p>(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団</p> <p>(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団</p> <p>(財)市原市文化財センター</p> <p>(財)香取郡市文化財センター</p> <p>(財)山武郡市文化財センター 東京都埋蔵文化財センター</p> <p>(財)横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター</p> <p>(財)富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所</p> <p>(社)石川県埋蔵文化財保存協会</p> <p>(財)愛知県埋蔵文化財センター</p> <p>(財)瀬戸市埋蔵文化財センター</p> <p>(財)滋賀県文化財保護協会</p> <p>(財)大阪市文化財協会</p>	<p>第33回特別展 大昔の苦小牧</p> <p>山形県埋蔵文化財センター調査報告書第19集 宮の前遺跡第2次発掘調査報告書、同第20集 お仲間林遺跡発掘調査報告書、同第21集 古屋敷遺跡発掘調査報告書、同第22集 畑田遺跡・中野遺跡発掘調査報告書、同第23集 大坪遺跡第2次発掘調査報告書、同第24集 北目長田遺跡・櫛待遺跡・堂田遺跡発掘調査報告書、同第25集 上高田遺跡・木戸下遺跡発掘調査報告書、同第26集 西谷地遺跡第2次・西ノ川遺跡発掘調査報告書、同第27集 廻り屋遺跡発掘調査報告書、同第28集 亀ヶ崎城跡第3次発掘調査報告書、同第29集 渋作遺跡発掘調査報告書</p> <p>研究紀要 第1号</p> <p>財団法人 栃木県文化振興事業団年報 平成6年度版</p> <p>資料管理取扱要領 オンライン対応初版、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第172集 白倉下原・天引向原遺跡II</p> <p>埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第147集 田島・棚田、同第148集 森下・戸森松原・起会、同第150集 城北遺跡、同第151集 前・居立、同第152集 清水上遺跡、同第153集 根絡・横間栗・関下、同第154集 柳戸・新山・向山・青棚・光山遺跡群、同第155集 向山・上原・向原、同第156集 西久保・金井上、同第158集 修理山遺跡、同第160集 上内手遺跡、同第161集 海老沼南遺跡、同第162集 桜山遺跡、研究紀要 第11号、埼玉県埋蔵文化財調査事業団年報 15</p> <p>市原市文化財センター年報(平成2年度)、市原市文化財センター研究紀要Ⅲ、第10回 市原市文化財センター遺跡発表会要旨、上総国府推定地確認調査報告書(1)、(財)市原市文化財センター調査報告書第54集 姉崎東原遺跡C地点、同第55集 能満上小貝塚、同第56集 郡本遺跡、同第57集 中高根南名山遺跡事業報告Ⅲ 平成4年度、同Ⅳ 平成5年度、(財)香取郡市文化財センター調査報告書第14集 下男山遺跡、同第26集 鶴崎天神台遺跡、同第28集 織幡妙見堂遺跡Ⅱ、同第30集 キサキ遺跡、同第31集 谷津遺跡、同第32集 岩部遺跡砂田中台遺跡(旧石器・縄文時代篇)、同(奈良・平安時代篇)</p> <p>東京都埋蔵文化財センター調査報告第20集 多摩ニュータウン遺跡 先行調査報告1、同第21集 多摩ニュータウン遺跡 先行調査報告2</p> <p>港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告XVI 花見山遺跡、同XVIII 桜並遺跡、財団法人横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター年報5</p> <p>埋蔵文化財年報(6) 平成6年度、富山県文化振興財団埋蔵文化財調査報告第6集 能越自動車道関係埋蔵文化財包蔵地調査報告</p> <p>社団法人 石川県埋蔵文化財保存協会年報5 平成5年度、同6 平成6年度、曾祢C遺跡</p> <p>愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第54集 清州城下町遺跡V、同第57集 牛ノ松遺跡、同第59集 吉田城遺跡Ⅱ、同第60集 名古屋城三の丸遺跡(V)、同第62集 川地遺跡、同第64集 刀池古窯跡群、愛知県埋蔵文化財情報10</p> <p>(財)瀬戸市埋蔵文化財センター 研究紀要第3輯、年報 平成6年度</p> <p>紀要 第8号、近江の文化財教室3、滋賀文化財だより4</p> <p>長原・瓜破遺跡発掘調査報告V~VII</p>
--	---

(財)八尾市文化財調査研究会	(財)八尾市文化財調査研究会報告45 I 東郷遺跡・II 宮町遺跡、同46 田井中遺跡、同47 八尾南遺跡、平成6年度 (財)八尾市文化財調査研究会事業報告、文化財講座記録集4
奈良国立文化財研究所	飛鳥・藤原京発掘調査概報25
桜井市立埋蔵文化財センター	平成7年度秋季特別展解説書 纏向型前方後円墳とそのひろがりー関東編ー
(財)和歌山県文化財センター	(財)和歌山県文化財センター年報 1994
(財)鳥取県教育文化財団鳥取県埋蔵文化財センター	鳥取県教育文化財団調査報告書36 大下畑遺跡、同37 百塚第5遺跡・小波狭間谷遺跡・泉上経前遺跡、同38 百塚第7遺跡(8区)、同39 尾高御建山遺跡II・尾高古墳群・尾高1号横穴墓、同40 鶴田東山遺跡・鶴田合清水遺跡、平成6年度 鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書、山ヶ鼻遺跡、平成6年度 桂見遺跡発掘調査報告書、六部山古墳群II
(財)香川県埋蔵文化財調査センター	財団法人 香川県埋蔵文化財調査センター年報 平成6年度
(財)愛媛県埋蔵文化財調査センター	埋蔵文化財発掘調査報告書第55集 愛媛県立松山北高等学校遺跡埋蔵文化財調査報告書2、同第56集 姫内城跡1、同第57集 相の谷古墳群杉谷支群埋蔵文化財発掘調査報告書、同第58集 持田町3丁目遺跡
(財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター	松山市文化財調査報告書第47集 古照遺跡、同第50集 福音小学校構内遺跡
(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター	後川・中筋川埋蔵文化財発掘調査報告書III 具同中山遺跡群、高知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第3集 扇城跡、同第11集 稗地遺跡、同第15集 峰の上遺跡、同第19集 浦戸城跡、同第20集 小籠遺跡I、中村宿毛道路埋蔵文化財発掘調査概報I 船戸遺跡、同II 具同中山遺跡群I、高知県文化財団埋蔵文化財センター年報2 1992年度、同3 1993年度、研究紀要 第1号、高知県埋蔵文化財発掘調査報告書第16集 下分遠崎遺跡、同第39集 高知県遺跡地図、同第37集 史跡高知城跡、土佐山田町埋蔵文化財報告書第11集 高柳遺跡・高柳土居城発掘調査報告書、同第14集 伏原大塚古墳、永田遺跡 本山町遺跡発掘調査報告書第7集、木村遺跡発掘調査報告書 野市町埋蔵文化財調査報告書第3集、高知県大月町埋蔵文化財調査報告書第2集 竜ヶ迫遺跡・ムクリ山遺跡、東津野村埋蔵文化財発掘調査報告書第1集 北川遺跡
胆沢町教育委員会	胆沢町埋蔵文化財報告書第26集 要害遺跡
仙台市教育委員会	仙台市文化財調査報告書第200集 四郎丸館跡、同第202集 下ノ内浦遺跡、同第203集 富沢・泉崎浦・山口遺跡(8)、同第206集 中田南遺跡
栃木県教育委員会	栃木県埋蔵文化財調査報告第91集 下野国分寺跡IV、同第145集 鶴田中原遺跡、同第153集 栃木県埋蔵文化財保護行政年報17 平成5年度(1993)、同第155集 猿淵遺跡、同第156集 下野国分寺跡IX、同第157集 那須官衙関連遺跡II、同第158集 長福城跡、同第159集 乙畑・大久保古墳群、同第161集 横倉宮ノ内遺跡、同第163集 埜平遺跡II、同第164集 槻沢遺跡II、同第165集 馬門南遺跡、同第167集 谷近台遺跡
足利市教育委員会	足利市埋蔵文化財調査報告第27集 平成5年度埋蔵文化財発掘調査年報、同第28集 西場古墳群第1次発掘調査報告書、同第29集 法界寺跡発掘調査概要 堤上遺跡 群馬町埋蔵文化財調査報告書第37集、諏訪西遺跡 同第39集、町内遺跡III 同第41集
群馬町教育委員会	
吉井町教育委員会	長根遺跡群発掘調査概報、長根遺跡群発掘調査報告書II、ヌカリ沢A窯址発掘調査報告書、黒熊海道端遺跡発掘調査報告書
東京都教育庁	多摩地区所在古墳確認調査報告書
鎌倉市教育委員会	甘縄神社遺跡群発掘調査報告書、能蔵寺跡
佐久市教育委員会	佐久市埋蔵文化財調査報告書第24集 上聖端遺跡、同第35集 市内遺跡発掘調

<p>岡谷市教育委員会 明野村教育委員会 松任市教育委員会</p>	<p>査報告書1993、同第36集 蛇塚B遺跡Ⅲ調査報告書、同第37集 西一本柳遺跡Ⅱ・中西ノ久保遺跡Ⅰ、同第38集 南下中原遺跡Ⅱ、同第39集 中屋敷遺跡、同第40集 寺畑遺跡調査報告書、同第41集 曾根新城遺跡・上久保田向遺跡・西曾根遺跡、佐久市埋蔵文化財 年報3 平成5年度、北西ノ久保遺跡第1次発掘調査報告書、佐久埋蔵文化財調査センター調査報告書第11集 長峯古墳群発掘調査報告書、同第14集 瀧の峯古墳群発掘調査報告書 広畑・阿原神田・間下丸山遺跡発掘調査報告書 明野村文化財調査報告9 村之内Ⅱ・Ⅲ遺跡 高台・中谷井遺跡 横江古屋敷遺跡Ⅰ、北安田北遺跡Ⅰ、宮永市遺跡、横江荘遺跡Ⅲ、米永シキシロ遺跡、宮永市松原遺跡、相木北遺跡、倉光ナガタケ遺跡、史跡 石ノ木塚、旭遺跡群Ⅰ～Ⅲ、横江古屋敷遺跡Ⅱ、宮永ほじ川遺跡、野本遺跡、相木遺跡、東相川D遺跡、倉光館跡、橋爪ガンノアナ遺跡Ⅱ</p>
<p>能都町教育委員会 袋井市教育委員会</p>	<p>能都町の文化財 第3輯 井戸ヶ谷第1号古墳の調査、掛の上遺跡(Ⅱ)、坂尻遺跡、坂尻遺跡第2次調査、坂尻遺跡第5・6次調査、坂尻遺跡 昭和57年度、平成2年度、3年度、久野城跡 平成2年度、3年度、堀越ジョウヤマ遺跡、鶴田Ⅱ遺跡、鶴松古墳群・機ヶ谷古墳群、大門遺跡、玉越遺跡、宇刈の横穴、権現山遺跡、三沢古墳群、大畑遺跡、大畑遺跡 1978年度、昭和60年度国庫補助事業発掘調査報告書、昭和62年度国庫補助事業発掘調査報告書、春岡遺跡、長者平遺跡、土橋遺跡、鶴松遺跡Ⅲ～Ⅴ、Ⅶ、宇佐八幡境内遺跡</p>
<p>阪南市教育委員会 嬉野町教育委員会 羽曳野市教育委員会</p>	<p>浅間古墳群発掘調査報告書、白山古墳群発掘調査報告書 上野廃寺発掘調査報告、第2回特別展 天白ムラの物語 古市遺跡群XⅥ 羽曳野市埋蔵文化財調査報告書32、文化財のしおり、第12回歴史資料室テーマ展示 環境問題と考古学</p>
<p>豊中市教育委員会</p>	<p>豊中市埋蔵文化財年報 Vol. 3、行きかう人びと、しょうじ幼稚園東側崖を中心とした地質調査報告書</p>
<p>熊取町教育委員会 伊丹市教育委員会</p>	<p>熊取町埋蔵文化財調査報告第23集 熊取町遺跡群発掘調査概要報告書Ⅸ 伊丹の文化財、伊丹市埋蔵文化財調査報告書第21集 有岡城跡・伊丹郷町遺跡の調査、有岡城跡・伊丹郷町Ⅳ</p>
<p>姫路市教育委員会 高取町教育委員会</p>	<p>御旅山13号墳 越智遺跡第4次発掘調査概報 高取町文化財調査報告第15冊、平成6年度 高取町内遺跡発掘調査報告 同第16冊</p>
<p>岩出町教育委員会 総社市教育委員会 徳島市教育委員会 佐賀県教育委員会</p>	<p>平成6年度 岩出町内遺跡発掘調査概要 総社市埋蔵文化財発掘調査報告14 石原後遺跡、総社市埋蔵文化財調査年報5 徳島市埋蔵文化財発掘調査概要5、第15回埋蔵文化財資料展 阿波を掘る 佐賀県文化財調査報告書第124集 佐賀県農業基盤整備事業に係る文化財調査報告書12</p>
<p>犬飼町教育委員会 高鍋町教育委員会</p>	<p>上津尾遺跡 高鍋町文化財調査報告書第7集 中尾・牛牧地区発掘調査報告書</p>
<p>土浦市立博物館 上高津貝塚ふるさと歴史の 広場・土浦市立博物館 栃木県立博物館 栃木県立しもつけ風土記の 丘資料館 栃木県立なす風土記の丘資 料館</p>	<p>土浦市立博物館紀要 第6号 霞ヶ浦 人と神と海と・湖のくらし 第53回企画展図録 東国火葬事始 古代人の生と死 栃木県立しもつけ風土記の丘資料館年報 第9号(平成6年度版) 第3回企画展図録 豊かな恵みの中で なすの縄文人</p>

千葉県立房総風土記の丘 国立歴史民俗博物館 (財)出光美術館 大田区立郷土博物館 井戸尻考古館 塩尻市立平出遺跡考古博物館 上田市立博物館 長岡市立科学博物館 高岡市立博物館 氷見市立博物館 石川県立歴史博物館 三方町立郷土資料館 岐阜県博物館 浜松市博物館 名古屋市博物館	千葉県立房総風土記の丘年報 17、平成7年度企画展 住まいと集落 国立歴史民俗博物館研究報告第60集 出光美術館 館報第91号、出光美術館 研究紀要第1号 特別展 火炎土器 曾利遺跡、井戸尻遺跡 平出遺跡考古博物館ノート9 書き換えられる歴史像、平出遺跡考古博物館 紀要第12集、東山・下り坂遺跡、床尾中央遺跡 蚕糸業の先覚者 長岡市立科学博物館研究報告 第30号 高岡市立博物館年報 第9号 平成6年度 特別展 布尾良策展 I 銃後の人々 祈りと暮らし、加賀藩主 前田斉泰 倉見集落の歴史展 美濃・飛騨の古代史発掘 律令国家の時代 浜松城のイメージ 名古屋市博物館年報No.18(平成6年度)、企画展 夏休み親と子のれきしどう ぶつえん 特別展 狩りと王権 第9回企画展 蒲生野の古代史—蒲生・神崎郡展—、秋季特別展 観音寺城と 佐々木六角 歴史シンポジウム記録集第1集 池上・曾根遺跡、弥生文化博物館叢書2 弥 生文化の成立、平成7年度秋季特別展 邪馬台国への海の道 大阪府立近つ飛鳥博物館常設展示図録、平成7年度秋季特別展 古代人名 録—戸籍と計帳の世界— 平成7年度企画展 河内六寺 開館25周年記念特別展 岸和田藩の歴史 平成7年度特別展 水辺の文化の再発見 平成7年度企画展 二上山麓の古代寺院、太子町立竹内街道歴史資料館館報 創刊号 館報 1994、歴史博物館教育資料Vol.1 兵庫の弥生土器 西宮市立郷土資料館第10回特別展 新収集資料展、西宮市立郷土資料館報 平 成6年度(1994年度) ふるさとの学校のあゆみ 開館10周年記念特別展 蘇我三代
齋宮歴史博物館 滋賀県立安土城考古博物館 大阪府立弥生文化博物館 大阪府立近つ飛鳥博物館 柏原市立歴史資料館 岸和田市立郷土資料館 吹田市立博物館 太子町立竹内街道歴史資料館 兵庫県立歴史博物館 西宮市立郷土資料館 播磨町郷土資料館 奈良国立文化財研究所飛鳥資料館 橿原市千塚資料館 香芝市二上山博物館 広島県立歴史民俗資料館 大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館 国立慶州博物館	特別展 狩りと王権 第9回企画展 蒲生野の古代史—蒲生・神崎郡展—、秋季特別展 観音寺城と 佐々木六角 歴史シンポジウム記録集第1集 池上・曾根遺跡、弥生文化博物館叢書2 弥 生文化の成立、平成7年度秋季特別展 邪馬台国への海の道 大阪府立近つ飛鳥博物館常設展示図録、平成7年度秋季特別展 古代人名 録—戸籍と計帳の世界— 平成7年度企画展 河内六寺 開館25周年記念特別展 岸和田藩の歴史 平成7年度特別展 水辺の文化の再発見 平成7年度企画展 二上山麓の古代寺院、太子町立竹内街道歴史資料館館報 創刊号 館報 1994、歴史博物館教育資料Vol.1 兵庫の弥生土器 西宮市立郷土資料館第10回特別展 新収集資料展、西宮市立郷土資料館報 平 成6年度(1994年度) ふるさとの学校のあゆみ 開館10周年記念特別展 蘇我三代 かしはらの歴史をさぐる3 平成6年度埋蔵文化財発掘調査速報展 第8回特別展 二上山・歴史のある風景 平成7年度特別企画展 古墳誕生の謎をさぐる 宇佐風土記の丘歴史民俗資料館年報 平成6年度 慶州 隍城洞石室墳、冷水里古墳
法政大学文学部考古学研究室 専修大学考古学研究室 大手前女子大学史学研究 所 文化財調査室 啓明大専校博物館 釜山大学校人文大学考古学科	蕨市埋蔵文化財調査報告書第1集 蕨市金山遺跡調査報告書 埋蔵文化財発掘調査報告書 三長西遺跡 有岡城跡・伊丹郷町Ⅳ 啓明大専校博物館遺蹟調査報告第4輯 高靈本館洞古墳群 近藤義郎教授寄贈 日本考古學関係圖書目録

「蘇れ黄金・平泉祭」実行委員会 大宮市遺跡調査会	平泉と鎌倉 永福寺遺物展記念 大宮市文化財調査報告第38集 根切遺跡、大宮市遺跡調査会報告第48集 西大宮バイパスNo. 6 遺跡、同第49集 東北原遺跡第10次調査、同50集 丸ヶ崎遺跡群、同第51集 A-124号・B-61号遺跡、同第52集 大和田陣屋跡・今羽丸山遺跡、同第53集 B-53号遺跡・C-64号遺跡
中里遺跡調査会 日本製鋼所遺跡調査会 府中病院内遺跡調査会 (株)新人物往来社 (株)名著出版 学術文献刊行会 鎌倉考古学研究所 玉川文化財研究所	中里遺跡3～6、竹橋門 江戸城址北丸竹橋門地区発掘調査報告 武蔵国府関連遺跡調査報告 日鋼地区第一～六分冊 武蔵国府寺跡西方地区 武蔵台遺跡Ⅱ 資料編1～5 古絵図 発掘・古写真が語る 戦国の城 近世の城 歴史手帖 第23巻9～11号 日本史学文献目録 1993(平成5)年版 第5回鎌倉市遺跡調査・研究発表会発表要旨 太井己遺跡発掘調査報告書、小田原城八幡山古郭本曲輪第Ⅲ地点発掘調査報告書、時田遺跡発掘調査報告書
(財)山梨文化財研究所 全国天領ゼミナール事務局 上野市遺跡調査会	第6回「考古学と中世史研究」シンポジウム資料集 第10回 全国天領ゼミナール記録集 上野市文化財調査報告27 平成元年度(第2次)森脇遺跡発掘調査報告、同33 森永「エンゼルの森」開発区域内埋蔵文化財範囲確認調査報告書、同54 小芝遺跡発掘調査報告(2次)、同55 伊賀国府跡発掘調査報告
長浜市文化財図書普及会	長浜市埋蔵文化財調査資料第9集 堀部西遺跡調査報告書、同第10集 墓立遺跡Ⅰ、同第11集 地福寺遺跡・塚町遺跡発掘調査報告書、長浜市埋蔵文化財調査概報2 地福寺遺跡・塚町遺跡
織豊期城郭研究会 高月町出土文化財センター (財)古代学協会 河内長野市遺跡調査会 大阪・郵政考古学会 古代を考える會	織豊城郭 第2号 古保利古墳群詳細分布調査報告書 古代文化 第47巻第9、10号 河内長野市遺跡調査会報Ⅸ 西浦遺跡、同Ⅹ 宮の下遺跡、同ⅩⅠ 寺元遺跡 郵政考古紀要 続・平井尚志先生古稀記念考古学論攷 古代を考える会20周年記念 古代学評論第4号、古代を考える56 初期王権成立過程の検討
六甲山麓遺跡調査会 (財)のじぎく文化財保護研究財団 朝鮮学会 博物館等建設推進九州会議	本山中野遺跡 平松遺跡 朝鮮学報 第155輯 文明のクロスロード Museum Kyushu 季刊第13巻・第4号 通巻50号
(財)京都市埋蔵文化財研究所 (財)向日市埋蔵文化財センター 京都府教育委員会 城陽市教育委員会歴史民俗資料館 八幡市教育委員会 加茂町教育委員会 京都府立総合資料館 京都府立山城郷土資料館 京都府立丹後郷土資料館	平成4年度 京都市埋蔵文化財調査概要 向日市埋蔵文化財調査報告書第40集 物集女車塚古墳保全整備事業報告 国宝重要文化財 教王護国寺蓮華門北大門・慶賀門・北総門修理工事報告書 城陽市埋蔵文化財調査報告書第26集(1994)、同第27集(1995)、同第28集(1995)、同第29集(1995) 八幡市埋蔵文化財調査概報 第17集、同第18集 加茂町文化財調査報告第12集 恭仁宮跡発掘調査概要 京都府資料目録追録 No.11 企画展資料21 発掘成果速報～平成6年度の調査から～、展示図録15 やましろのお茶 特別陳列図録37 新宮涼庭と丹後の医の流れ、特別展図録26 日本海の裂き織り

京都市歴史資料館	京都市歴史資料館紀要 第12号、平成6年度京都市歴史資料館年報、八坂神社の古文書
向日市文化資料館	特別展示図録 むらの記録
宇治市歴史資料館	宇治橋 その歴史と美と
丹後町古代の里資料館	京都府丹後町文化財調査報告第11集 丹後町遺跡地図
京都府京都文化博物館	大唐長安展、特別展 マヤ 歴史と民俗の十字路
(財)泉屋博古館	泉屋博古館紀要 第十一巻
京都大学埋蔵文化財研究センター	京都大学構内遺跡調査研究年報 1992年度
石井清司	馬の雑誌 ホースメイト第15号
大野左千夫	地方史研究 第256号、紀北考古学談話会会報 合冊1
梶 國男	高校生の発掘
清水真一	桜井市内埋蔵文化財 1992年度発掘調査報告1、同1993年度発掘調査報告書、桜井市立埋蔵文化財センター発掘調査報告書13集 箸墓古墳南・上之宮遺跡第7次発掘調査報告書、同書14集 纏向遺跡第74次・第76次発掘調査報告書、同15集 平成6年度国庫補助による発掘調査報告書
戸原和人	西安文物撿勝、中国社会科学院考古研究所 1950-1990、文物春秋 1994年増刊、考古 200期
引原茂治	平成六年度 千駄ヶ谷五丁目遺跡発掘調査概要報告書
松井忠春	橿原考古学研究所 公開講演会資料、同第4、6、7、8回公開講演会資料
水野正好	春日文化 第三冊
森島康雄	出土銭貨 第4号
山本裕作	東播磨 第2号 地域史論

編集後記

情報58号が完成しましたので、お届けします。

本号では、京都大学埋蔵文化財研究センターの伊藤淳史氏に投稿していただき、同センター調査の速報を掲載することができました。貴重な原稿をいただいた同氏には感謝いたします。また、本号には、京都縦貫道建設に伴う大俣城跡の調査成果と、名神高速道路拡幅工事に伴う長岡京跡の発掘調査のうち、昨年度と今年度の概略を載せることができました。ご高覧を賜われれば幸いに存じます。

(編集担当=土橋 誠)

京都府埋蔵文化財情報 第58号

平成7年12月26日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究
センター

〒617 向日市寺戸町南垣内40番の3
Tel (075)933-3877 (代)

印刷 中西印刷株式会社

〒602 京都市上京区下立売通小川東入
Tel (075)441-3155 (代)